

津軽弘前藩の武芸(16)

——資料紹介——

目次

まえがき

内容紹介

一、市川家所蔵武芸関係古文書・古記録

1、『卜傳流劔術目録』

冊子本

- (イ) 明和六己丑年（一七六九）二月、小山次郎太夫英貞より、宛名の記載はない。
(ロ) 寛保二壬戌年（一七四二）十月十九日、小山治郎太夫英貞より對馬勝蔵あて。

右(イ)(ロ)の合冊本

二、戸田家所蔵武芸関係古文書・古記録

1、『寶曆五乙亥年（一七五五）親類書』

冊子本

戸田弥太右衛門定常による親類書。

2、『享和二壬戌年（一八〇二）由緒書』

冊子本

太田尚充

戸田行左衛門による由緒書。

3、『覚』

冊子本（横長）

戸田定右衛門による戸田家由緒書と本人の縁組、勤務経歴などの覚書。

4、『申請状』

切紙

貞享二乙丑年（一六八五）五月十五日、木村六兵衛が「御歩行頭」に提出した「戸田定右衛門」の「御歩行御奉公」の申請書。

5、『印可状』

切紙

享保十二丙未曆（一七二六）吉祥月、川本居士（貞右衛門盛應）が戸田居士（茂兵衛定明）に与えた「印可状」。

6、『實名并花押口考』

切紙

文化庚午（七年）一八一〇）菊池守貴が考証した実名「有常」と花押の意味。

7、表彰状

切紙

明治二年（一八六九）旧弘前藩が「戸田丈之助」の函館戦争における功労を表彰した賞状。

8、覚書

冊子本（横長）

戸田与左衛門が、戸田家の当田流太刀・本覚克己流和術の指南経歴や弘前藩が寛政四年（一七九二）農地開発のため藩士に土着を奨励した時の藩士たちの対応等の覚書。

9、日誌覚書

冊子本

戸田行左衛門「定取がまとめあげたと思われる日誌風の覚書。文化四年（一八〇七）から安政七年（一八六〇）三月二十一日までの記録がある。

三、弘前市立図書館所蔵武芸関係古文書・古記録の一部

1、『三種之功用・朝鏡之相傳』GK—789—61

卷子本

享保十四乙酉年（一七二九）六月朔日、一戸三之助宗明より竹内又市あて。

2、『演説』GK—789—62

切紙

延享丙寅年（一七四六）三月一日、一戸三之助宗明が宝蔵院流十文字鎌鎧修行の必要性を書きあげたもの。

3、『寶藏院流名目録』GK—789—63

卷子本

延享五戊年（二七四八）正月十五日、一戸三之助宗明より長谷川茂左衛門あて。

4、『宝藏院流鑑文書』W—789—3

冊子本

年記及び記述者の氏名等の記載がない。

5、『新影治源流』GK—789—36

卷子本

貞享四丁卯年（一六八七）九月去日、白取左太郎基尚より岩渕伝助あて。

6、『新影治源流』GK—789—76

卷子本

寶曆三癸酉年（一七五三）六月、西館縫殿之助より櫻庭瀨左衛門あて。

7、『新影治源流』GK—789—37

卷子本

寛政五癸丑年（一七九三）二月十日、成田又左衛門蓮意より山形斧市あて。

8、『新影治源流奥意之卷辨解』GK—789—38

冊子本

伊藤助計らによる奥意の卷辨解、年記はない。

9、『要務秘鑑』「師役之部」GK—209—1

冊子本

「自享保七年（二七三二）七月二十八日至文化九年（一八一二）二月十七日」弘前藩用人三橋左十郎編、各流儀武芸師範の系譜等収集したもの。

あとがき

まえがき

今回は、市川家（市川直正氏所蔵、弘前市住吉町一七）所蔵古文書古記録から一点、戸田家（戸田敏博氏所蔵、南津軽郡尾上町李平上字安原九八―四四）所蔵古文書古記録から九点、弘前市立図書館所蔵古文書古記録から九点紹介することにした。

市川家には、市川宇門(明治十六年「昭和十四年(一八八三)一九三九、旧制弘前中学から大日本武道教員養成所を卒業。明治四十年(一九〇七)」が書八月、京都における全国剣道大会に優勝し、太刀とメダルを受けて一躍名をなした。八段。範士。「武平」は通称である。)が書きまとめたと思われる「剣道秘書」(欄外に市川宇門の印が押されている)四冊その他があり、同氏の研鑽ぶりを伺うことができる。

戸田家は、弘前初代藩主津軽為信から仕えた家臣団の後胤の一人で、古文書、古記録、古記録、遺品等を多量に所蔵している。両家の所蔵する古文書、古記録を一通り見せていただいたが、紙面の関係で全部にわたって紹介することができず、右の十点にとどめた。

弘前市立図書館所蔵の今回紹介する資料は、今までの調査の過程で参考にすべく複写しておいたものである。

内容紹介

凡例

- (1) 表紙に外題のある場面は「」にその題名を記した。「」のない題名は、内容その他から推した仮称である。
- (2) 紙質や縦・横の大きさ等は、特別必要と思われない限り省略した。
- (3) 特定の人物や字句等は本文の後に「注」で表示し、全体にかかわる事柄については「解説」の項で説明を試みた。また、文中に「注」の必要な場合は()内に示した。
- (4) 判読不明な文字は口で示した。
- (5) 長文で読み難い場合は段落を設け、句読点、濁点をつけた。
- (6) 三―1、「三種之効用」三―4「宝蔵院鑑文書」には「送り仮名」をつけた。
- (7) 写真は一度複したものを接写しているのでやや不鮮明になっている。

一、市川家所蔵武芸関係古文書・古記録

1、『ト傳流 劔術目録』

冊子本

市川家所蔵

ト傳流劔術目録 追加^{写(1)}

源義経、鞍馬多門天ノ示現ヲ蒙リ、僧正カ谷ニ入ヲ異人ニ逢テ劔術之奥義ヲ傳エ、千変萬化ノ術ヲ顯シ無名末代ニ及ブ。諸流極位トスル術皆義経ノ傳來ト云フ。

一、中古常陸国鹿嶋郡ノ住人飯篠長威人道、俗名山城守^(家)宗直ト

云フ者、鹿嶋ノ神傳ヲ得テ劔術ノ妙ヲ世ニ顯ス。是中古劔術ノ始ニシテ諸流是ヨリ分ル。

一、同国ノ住人林崎勘助勝吉ト云フ者、神傳ニ因テ長柄ノ理ヲ感得シテ田宮平兵衛成政ト云フ者ニ傳フ。此兩人者神妙不測ノ術ヲ顯ス。是近世居合ノ始ナリ。

一、天文ノ此^(基)、下總国香取郡ノ住人塚原ト傳と云人、劔術天下無双ノ名人ニシテ貴賤崇敬ス。領知ナシト雖も大名ノ如ク

大鷹三連スエサセ、乗換三疋ヒカセ所々ヲ往行シ其名最高也。直ニ其傳來リト傳トスルナリ。是当流ノ元祖也。

一、文禄ノ比^(馬)、常陸国江戸崎ノ郷ニ諸岡一羽ト云者劔術古今無双之名人ト云。此弟子三人アリ。土子泥之助^(土呂之助)、岩間小熊、

根岸兎角ト云。兎角師ヲ捨テ江戸ヘ出テ微塵流ト改、大小名弟子数百人ニ及ブ。残り二人ノ相弟子、流儀ノ名ヲ改ル事

ヲ怒リ、小熊江戸ヘ出公儀ヘ訴ヘ、大手ノ橋ニテ仕合シテ、小熊勝利ヲ得テ名ヲ顯ス。是則ト傳流ト云云。

ヲ怒リ、小熊江戸ヘ出公儀ヘ訴ヘ、大手ノ橋ニテ仕合シテ、小熊勝利ヲ得テ名ヲ顯ス。是則ト傳流ト云云。



写真(1)「ト傳流劔術目録追加」の書き始めの部分。

一、ト傳ヨリ十六傳ノ正統越前国住人田中武平ト云者ノ弟子中村次太夫ト云者、^(六十七)延寶年中、^(六十八)越前ヨリ陸奥国ニ来リ被官トナリテ此流ヲ傳フ。傳來ノ書ヲ授クルニ至テ彼カ曰、主人ニ道統ノ系ヲ繼シムル事其恐アリ。此傳來ヲ以テ自流ヲ可忘と云テ、終ニ其身迄ノ系図ヲ切テ授ク。因之、ト傳ヨリ正統ノ系図ナシ。然レドモ、一流ノ傳來少モ不加私意ヲ、被官タリト雖為師ノ重キヲ以其ノ名ヲ顯シ、系ヲ繼グ者也。

一、當流ハ古流ニシテ、目錄、免書其傳ノ名目ヲ記タル計ニテ皆口傳也。口傳ハ末弟ニ至テ過ル事多シ。後人一流ノ大旨ヲ不失。能口傳ヲ受得シテ他流ニ紛ナカラン事ヲ可守也。

一、當流ニ^(二)二箇ヲ用ル事、木刀ハ當リ強ク疵付事多シ。因之互ニ^(三)勞ヘテ存分ニ打合事難成。修行ノ実リ不知故ニ^(四)二箇ヲ思存分ノ働ヲ教ル也。然共、^(五)二箇計ヲ用テハ怠リ出テ調子拍子モ乱ル、故ヲ以テ、仕形ヲ教ルニハ木刀ヲ用ルナリ。

一、免書ヲ授ケ、後^(六)齒引ヲ用テ真劍ノ理ヲ可傳。齒引ヲ修練セズシテハ真劍ノ位ハ不可知也。

一、刀ハ式尺參寸ヲ定法トス。此上ハ人々ノ分量ナリ。然レドモ、二尺五寸ヨリ長キハ損多シ。直ナルモ、^(七)ソリ高キモ不宜。我分量ヨリ少シ輕キヲ用ル傳來ナリ。変化ニヨリ片手打ノ業アル故ナリ。

一、脇差ハ一尺五寸定法也。是ヨリ長キハ小太刀ノ業、損多シ。長キヲ用ル人ハ、柄ニ両手ノカゝルニ間アルベシ。刀ノ業ニ成ルナリ。

一、太キ柱ヲ五尺ノ高サニ埋メ、重キ木刀或ハ齒引ヲ以テ存分ニ打込、打テ劍ノ捨テザル所ヲ常ニ修練スル事当流第一ノ傳來ナリ。人ヲ相手ニスレバ、タトイ^(八)二箇ニテモ人ヲ^(九)勞ル故存分ニハ打ガタシ。然レバ第一トスル業物マネト云世語ノ如シ。^(十)寔ノ勝負ニ至テ俄ニ強ク打ントスレバ、常々ナレザル業シテ改ル故、稽古セザル事ト同前ナリ。タトヒ妙ヲ得タリトモ、細カナル術寔の勝負ニ至テ勝利トハナリガタシ。人ハ生死ノ場ニ至テハ心氣強クナル故ニ、二三ヶ所ノ薄手は不可知。然レバ少シノ業ニテ先ヲ打テモ勝トハナリガタシ。

一、据物ヲ切ルニ、土壇ヲ思様ニ築キ氣遣モナキ死胴ヲ横タヘ、心ヲ静ニ手ノ内ヲ和ラゲ存分ニ打込、胴ノ不落事多シ。況ヤイソガシキ生死ノ場ニ至テ、常ニ修練セザレバ業俄ニ不可出シテ、強ク打タントスル時ハ俄ニ求ル業ニテ改ハ稽古セザル者ト同前ナリ。

一、當流ハ、^(二五三一一五五五)天文ノ頃天下乱世ニテ昼夜甲冑ヲ不放時代ニ諸人崇敬シタル教ニテ、流儀ノ本意ハ甲ヲモ打割業ヲ以テ第一トス。故ニ打込ノ修練疎カニシテハ此流儀ノ本意ニ不叶ト可知也。

此書者非傳來之書、受師口決為末弟後覺為目錄之別卷者也。

棟方十左衛門

棟方作右衛門

小山次郎太夫

英貞 花押

明和六己丑年（一七六九）二月

ト傳流 劍術目錄 追加二 写(2)

一、生々劍

此ノ劍体ハ劍術ノ本体ニシテ諸流共ニ極意トスル也。然レドモ、此ノ劍体ハ敵ノ働ヲ受ル理有ヲ、我ヨリ先勝ノ理少キニ強テ先ヲ取ラントスレバ劍体変ズ。其ノ動ク所皆敵ノ勝トナル。是故ニ當流ニハ此劍体ヲ密々陰陽ノ体ヲ顯シテ直ニ敵ノ先ヲ不待所ヲ示ス。

一、陰陽二劍

當流此二劍ヲ大要トス。一流ノ変体此二劍ニ存シ、二劍元

一劍ナリ。

一、八字二刀

^(稽)性妙劍ノ動キ八字ニ表ス。直ニ陰陽ナリ。小太刀ノ変此二

刀ニコモル。二刀元一刀也。

一、手之内無思自然

品々ノ教ヲ立ルトキハ惑多く、手之内思慮有テ劍ノ働キ不自由ニシテ変化ナリガタシ。故ニ人々ノ得手ヲ其倣ニシテ強テ教ヲ立ツベカラズ。事熟スル時は手之内自然ニヤワラカク、是無思ナリ。

一、目附閉眼

眼ノ止ル所心氣トモニ止ル。一所ニ心氣止ルトキハ其外虚ナリ。心明カナルトキハ動カズシテ眼睛到ラザルコトナシ。眼ヲ閉テ常ニ工夫スベシ。眼ヲ閉テ開キ未ダ物ニウツラザル所、則閉眼ナリ。

一、心分動靜

千變万化ノ術ヲスルハ皆一心也。一体動キ働クトキ一倍靜ナルベシ。是外ウゴキ内靜ナル所ヲ分ルナリ。

一、氣彼我同体

我ニ危キ氣アレバ敵モマタ其氣アリ。我ニ打タント云フ氣アレバ敵モマタ其氣アリ。勝負ハ疑ノ有無ニアリ。心ニ事



写真(2)「ト傳流劍術目録追加二」
書き始めの部分。

ノ應ゼザレバ疑也。

一、力自然力

力ヲ出サントスレバ偏ニシテ一方弱シ。氣一体ニ充テユルミナキトキハ、自然ニ力一体ニ通達ス。是則自然力ナリ。

一、聲

敵我劍ノ離合スルトキ、敵ヲ討トキ、皆声ヲカクルハ勢ノ助ニナル故ニ、諸流トモニ声ヲ用ユルナリ。未双方不合時、敵ノ進ム氣ヲ押ヘ敵ノ治マリタル氣ヲ動カシ、我ガ氣ノ臆シタルトキ進ム助ケニ声ヲ発シ、我ガ氣ヲ押ヘ敵待ニモ声ヲ用ユル。高下長短、其場ニ因テ用ユ。

一、勢三極一致

三極トハ、事熟シ理ニ徹シ心ニ疑ナク明カナル時ニ至ツテ勢自然ニ発ス。勢ヲ出サントシテ出スベカラズ。強テ出サントスレバ、却テ虚トナル也。

一、先之先 後之先

我ヨリ先ヲ打、其打タル所ニ止ルガ故ニ我ガ先、却テ敵ノ先トナル。打タル所ニ止ラザレハ幾度モ我先トナル。元来一心虚ナキ場ニ至ハ、其位直ニ先ノ先ト云。後ノ先トハ、敵ヨリ先ヲ打タル時其打タルルニ止ラズ、敵ノ劍ノ変ゼザルニ我ヨリ変ズル所也。

一、劍之生死

劍ニ我氣ノ移リタル所生劍ナリ。移ラザル所死劍也。死劍ノ変化却テ負ヲ求ムルナリ。

一、合離不止

一、心地不動

双方打合タル所ニ止ルガ故ニ、敵ヨリノ変化ヲ不知、双方離レタル所ニ止ルガ故ニ敵ヨリノ変化ヲ不知、合離ニ從テ一心動ズルガ故也。心地不動ノ所ヲ得ルトキ合離不止ニ至ル也。

ト傳流別傳

一、極寒之事 両手ヲ握リ、手ノ甲五本指共ニヨク痛ム程打合スレバホトリ出デ凍ヘズ。又熊ノ皮ヲヨクナメシ、幅一寸五分ニシテ毛ヲ内ニシテ皮ニ紐ヲ付ケテ腕ニ巻テ置ケバ手ノ凍ヘル事ナシ。

一、極暑之事 汗出デテ眼ニ入ルモノナル故鉢巻ヲスル習ナリ。口中乾ク事アレバ息合ナクバ紙ヲ口ニ入ルル習ナリ。

一、大風之事 是モ鉢巻ヲスベシ。衣服ニ吹散サレヌヤウニ心得、風ヲ後ニ受クベシ。細道ナドニテナリ難クバ、敵ニ風ヲ防ガスルヤウニ對スル事習也。

一、大雨之事 是モ鉢巻ヲスベシ。笠ハ打合ノトキ邪魔ニナル故トルベシ。カタビラナドノトキヌレテハ邪魔ニナル故タスキヲスル事習ナリ。

一、雪中之事 雪深く働ナリ難キ場故、先ヅ敵ヲ遠ク受ケテ輪ニ敵ヲ廻セバ、自然ニ道ツキテ働ノナルトキ詰寄スル事習也。

一、澤道(ぬかるみのみち)之事 豫テ其場ヲ知ル時ハ様々ノ習アリト雖モ、差力カリタルトキハ用ユルニ足ラズ。其支度ナキ故スベル所ニテ働ヲ急グニヨツテスベルナリ。ナル丈静カニ足ヲフミ定ムベシ。両足一樣ニ踏ム故スベリ止マラズ、片足ヅゝ浮カス心得習也。敵ヲ急ガスル様シカクル習也。

一、溝間之事 太刀ノ届ク場ハ溝アイト云フニ不及、届キ兼タル場也。太刀ノ届カヌ様ニ敵ニ見セテ、敵ノ打出ス模様ニヨツテ片手打スル習也。斯様ノ業数多アルニヨリ、當流ニハ刀ノ輕キヲ用ユル事習也。

一、坂中之事 坂ヲ横ニ敵ヲ受クベシ。坂狭クシテ横ニナリ難キ場ニテハ、坂ノ上ニアルトキ敵裾サバクモノ也。其心カケヲシテ折身折敷ヲ用ユベシ。坂ノ下ニアルトキハ、敵ヲ跡シサリニオビキ下ゲ、其虚ヲ見テ裾サバクコト習也。

一、戸入之事 習様々アリト雖モ、詰ル所ヲ打破リ入ルベシ。タトヘ戸破レズトモ其勢ニテ敵現ルルモノナリ。敵見ユレバ戸入り習ニ不及、勝負ハ常ノ如シ。

一、敷居躑之事 敵ノ頭上ヲ切割勢ヲ見セテ横ニ拂フベシ。敵ヨリ横ニ拂ハバ、シサリテ敷居ヲ躑サスル事習ナリ。

一、灯火隠形之事 蠟燭ヲ刀ノ鞘ニ持チ添ヘ、火ヲ向ニシテ我が顔ノ真中ニアテテ向ヘバ、敵ヨリ我面ヲ見エヌモノナリ。

一、闇夜之事 大小ノ鞘ヲ背中ニ帯ニサシニ刀ヲ遣イテ背中ニカザシ、折身ニウツプシ、敵ヨリ切太刀當ルヲ相図ニ片手ニテ裾ヲ拂フ習也。業ヲ積ムベシ。

一、柄取之事 敵ニ柄ヲトラレタル時ハ、モガントスル内ニ却テ取ラルルコトアリ。敵ノ取りタル拍子ニ返シテ惣身ニテ折身ヲ以テ引ケバ、大力ニテモ離ルル也。業ヲ仕習ブベシ。

一、棒合之事 太刀打如ク心得テハ勝利ナシ。棒ハ刃モナク先モナシ。一打打タルカ突カルルニ不構踏ミ込テ切ルトキハ勝ト成ル。勝負ナクテハ、氣強ク成ルニヨリテ深手ニ早速ハ死ナヌモノナレバ、一打計リニテ弱ルモノニアラズ、打チ悩ヤマサレテ負トナルモノナリ。

一、居合之事 出口ヲ以テ勝ヲトル事ナレバ、抜カセテ勝負スル事習也。抜カヌ内ハムザト寄ラヌ事習也。

一、無刀合之事 左ノ手ヲ差シノベテ開キ、敵ノ頬ヲフサグヤウニシテ太刀ヲバ後ニカザシ寄ル事也。左ノ手ニ取りツクヲ合図ニ切ルコト習也。

一、鍵合之事 刀ノ鞘ヲ左ニ持チ、右ニ刀ノ柄ヲ持ちて右ニヌケバ長刀ニナル、夫ニテ渡リヲ入ル事習也。然レドモ劍術上手ナレバ刀ニテ鍵ニ合スト云フ事ナシ。先習ヲアラハスナリ。

一、矢止之事 敵弓矢鉄砲ヲ持チタルトキ、羽織カ袴ヲ刀ノサヤノ先ニツケテカザス時、矢玉是ニテ留ルモノ也。

一、甲冑太刀打之事 甲冑ノ上ヲ切りタル分ニテハ勝利少ナシ。ヨダレカケノ下、内小手、両腋、草摺ノ下、斯様ノアキマヲ突ク事習也。

一、馬上之事 歩行立ヨリハ不自由ナリ。達者ニアラザレハ馬上成リガタシ。輪ヲカケナヤマスモノナリ。或ハ大勢ナラバ駆ケ散ラシ、乘リ轉バス心得第一ナリ。強テ切り止メントハセズ、切り散ラス心得ヨシ。膝ヨリ下ヲ歩行立ヨリネラウモノナリ。互ニ馬上ナレバ敵ヲ左ニ受クルモノナリ。互ニ右ニ受ケテハ落馬スル事多シ。又、手綱ヲ切ラルル事有リ、輕キ刀ヲ用ユル習也。

一、歩行立之事 馬上ノ敵ヨリハ、甲冑袖ヨリ外切ル所ナシ。近寄リテ膝ヲ切ル事習也。馬上ヨリ輪ヲカクルトモ、ソレニ構ハズ敵乗寄スル時馬ノ足ヲ拂フ事又習也。

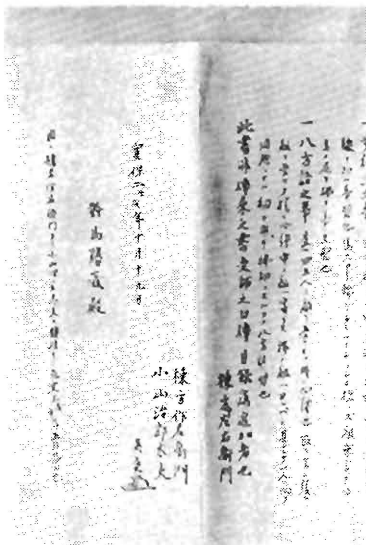
一、八方詰之事 是ハ四五人モ敵ヲ受ケタル時ノ心得也。取リマカレ、後ニ敵ヲ受ケヌ様ニ心得、中ノ敵ヘ寄ラズ、端ノ敵ヘヨルベシ。其レニテ一人ニ向フ同然ナリ。幻ヲ用ヰ拂切ニスルコト八方詰ノ習也。

此書非傳來之書、受師之口傳目錄為追加者也。写(3)

棟方十左衛門

棟方作右衛門

小山治郎太夫マコ



写真(3)「ト傳流劍術目錄追加二」にある「ト傳流別傳」の最後の部分。

寛保二壬戌年（二七四二）十月十九日

對馬勝藏殿

英貞 花押

因二棟方作右衛門ヨリ小山次郎太夫ニ傳授セルハ元文三^{戊午}年（二七三八）五月廿四日也。⁽¹⁾

注(1) 『要務秘鑑』『師役之部』には「卜傳流劍術元文元辰年（一七三六）二月廿四日棟方作右衛門殿より極意皆傳候」とある。

○市川家所蔵（未発表）

1、大正二年『劍術秘書』 浮浪人 冊子本

(1) 小野派一刀流假字書之口傳書

(2) 一刀流兵法皆傳口傳講釋

(3) 直心影流號ノ解 赤石浮祐 解

氣は早く心静に身は軽く眼は明に
業は烈しく。

2、大正貳年『劍道秘書』 浮浪人 冊子本

(1) 靈 劍

(2) 靈劍ノ解 小天狗

- (3) 吟味靈劍傳解 赤石浮祐 解
 - (4) 覺悟之巻口傳書
 - (5) 武道辨害 寺嶋芳洲 誌
 - (6) 武士道快談 蓮 児
 - (7) 武家ノ娘ト武士ノ妻 松濤女史
 - (8) 貫心流
 - (9) 武道劍法
 - (10) 劍術ノ効益 金井啓一
 - (11) 劍道起源
 - (12) 居合之事
 - (13) 一刀流ノ解
 - (14) 入門手続
- 3、大正參年『劍道秘書』 浮浪人 冊子本
- (1) 離靜誠位和談
 - (2) 兵法拾位傳規ノ巻
 - (3) 貫心流劍術決要之巻
 - (4) 貫心流劍術心明巻
 - (5) 貫心流劍術骨碎巻

- (6) 劔道教育法案 広島陸軍幼年学校
- (7) 軍星靈劔 相伝奥秘
- (8) 一刀流兵法劔術極秘辨書
- (9) 清浄靈劔名目録
- (10) 繩一流之秘術
- (11) 聖教要録小序
- 4、大正五年『劔道秘書』 浮浪人 冊子本
- (1) 神力丸目流初巻 佐野嘉成 書写
目録傳授之巻
- (2) 劔道ノ本旨
- (3) 武士道卜劔道
- (4) 天狗藝術論 卷一 佚齋樗山子著
卷二
卷三
卷四
- (5) 劔法形状本義 窪田清吉
- (6) 無刀流劔道書
- (7) 五輪之書 宮本武蔵遺書

5、無題

冊子本

(1) 大日本武徳会剣術教士内藤高治氏講話

(2) 剣法邪正ノ辨

(3) 剣術獨歩行道しるべ

(4) 鐵舟先生秘書剣術修行心得

(5) 剣法秘談武道觀念

(6) 剣法ハ無形ナル事

6、無題

冊子本

(1) 靈 劍

(2) 柔術ノ淵源

(3) 弓術法秘術

7、『直心影流究理卷 一』

卷子本

慶応三丁卯年（一八六七）四月吉日、藤川太郎より久留里太守董谷公あて。

8、当田流『極意之書』

卷子本

文政十多年（一八二七）十月廿一日 今八郎治寛衆より八木橋新三郎あて。

9、『澤庵禪師述剣術秘書 一』 冊子本

(1) 中江藤樹文武問答

(2) 剣術初心稽古心得（二刀流）

- (3) 剣術稽古心得
(4) 氣合術

以上

二、戸田家所蔵武芸関係古文書・古記録

1、『寶曆五乙亥年（一七五五）親類書』

冊子本

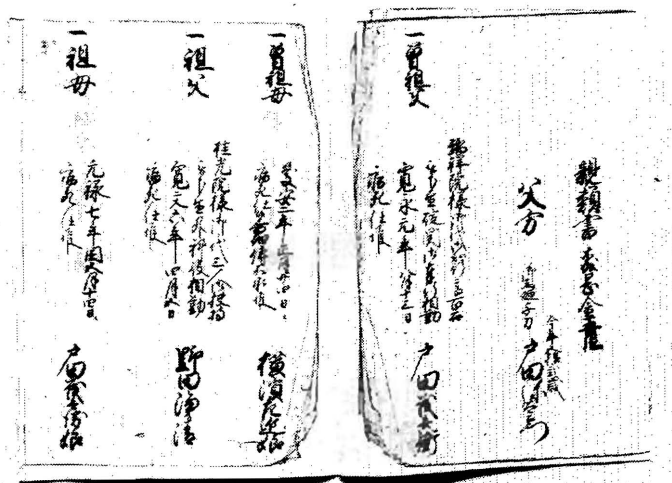
表紙

戸田家所蔵

寶曆五乙亥年
親類書
正月
戸田 弥太右衛門

親類書
森岡金吾組 写(4)

父 方 御馬廻与力 戸田弥太右衛門
今年五拾貳歳



写真(4)『寶曆五年親類書』の書き始めの部分。

一、曾祖父

(初代藩主津輕為信)
瑞祥院様御代御知行高百石被下置碓関御奉行相勤。寛永

戸田 茂兵衛

元年(一六二四)八月十三日病死仕候。

一、曾祖母

慶安二年(一六四九)

横濱 左近 娘

正月廿四日ニ病死仕候。

委細傳不承候。

一、祖父

(第三代藩主信義)
桂光院様御代三人御扶持

野 田 浄 清

被下置外科役相勤。

寛文六年(一六六六)

四月五日病死仕候。

一、祖母

元禄七年(一六九四)

戸田 茂兵衛 娘

閏五月十四日ニ病死

仕候。

一、父

(第四代藩主信政)
妙心院様御代貞享二年(一六八五)

戸田 弥太右衛門

五月廿七日御步行被召出、御切米金五両

式人御扶持被下置相勤申候處、元禄八年（一六九五）三月十五日御徒目付ニ被仰付、御加増金壹兩被下置相勤申候。

（第五代藩主信寿）

玄圭院様御代正徳六年（一七一六）三月六日ニ御留守居支配ニ被仰付相勤罷有候処ニ享保十年（一七二五）三月御廣敷御番人被仰付相勤申候。然処ニ年寄申候ニ付享保十一年（一七二六）十月隠居奉願候處、同廿八日ニ被仰付同十一月十九日ニ病死仕候。

一、兄

出家仕存生ニ而罷有候。黒石保福寺住持職相勤罷有候。

香 積

一、妹

享保十三申ノ年（一七二九）七月六日ニ病死仕候。治郎左衛門義御切米金十兩四人御扶持被下置、御右筆相勤罷有候。

原 子 治郎左衛門 妻

一、子

存生ニ而手前ニ罷有候。

戸 田 八十太郎

一、子

存生ニ而手前ニ罷有候。

戸 田 寅之助

一、娘

存生_ニ而手前_ニ罷有候。

一、娘

存生_ニ而手前_ニ罷有候。

一、子

存生_ニ而手前_ニ罷有候。

戸田 鉄五郎

一、子

存生_ニ而手前_ニ罷有候。

戸田 忠太

一、甥

存生_ニ而治郎左衛門

原_子治郎左衛門_子
原子左太郎

手前_ニ罷有候。

一、姪

存生_ニ而罷有候。

原_子治郎左衛門_娘
宮田 治五右衛門 妻

一、從弟

御切米金貳拾両七人御扶持被下置、御茶道役相勤罷有候。

木村六兵衛_娘
斎藤 玄達 母

母方

一、曾祖父

(第二代藩主信牧)
高源院様御代

親要助家督無相違被下置、御馬廻相勤罷有候。其頃御国替被遊候筈相極候刻、妻子召連御供可仕

旨申上候節御加増五拾石被下置、都合高百石ニ而八十

三騎ニ被召置御奉公相勤申候。

(第三代藩主信義)
桂光院様御代

(長良)
御代兼平伊豆、

(建武)
乳井美作、

(安徳)
乾四郎兵衛、

船橋半

(長良)
左衛門公事出入之節、

(船橋事件)
江戸ニ三年相詰申候。其刻御加

増百石被下置、都合貳百石ニ而御馬廻相勤處ニ無調法

御座候而正保二年(一六四四)二月宰人仕罷有候様ニ、

承応三年(一六五四)三月三日百両四人御扶持被下置

相勤候様ニ、延宝五年(一六七七)九月四日病死仕候。

一、曾祖母

元禄元年(一六八八)

九月二日ニ病死仕候。

小館 左助 娘

一、祖父

寛文九年(一六六九)十月朔日跡式無相違被下置、御

墓所頭相勤候處、年寄候ニ付御役御免奉願候様ニ被仰

付相勤候様ニ、貞享二年(一六八五)三月十七日ニ御

知行高百石被下置津輕鞠負与力被仰付相勤。同三年(一

野呂 金十郎

野呂 次兵衛

六八六) 九月九日ニ隱居奉願候様ニ被仰付、元禄十四年(一七〇二)七月十七日ニ病死仕候。

一、祖母

宝永二年(一七〇五)

正月十一日ニ病死仕候。

今 藤兵衛 娘

一、母

寛延二己ノ年(一七四九)九月六日ニ病死仕候。次五左衛門義貞享三年(一六八六)九月九日ニ親金十郎家督無相違被下置、津輕鞠負与力相勤罷有候處ニ、享保十一年(一七二六)十月廿八日ニ御馬廻御組ニ被仰付相勤罷有候様ニ、元文二年(一七三七)二月十一日ニ隱居願之通被仰付、延享二年(一七四五)十月廿八日ニ病死仕候。

野呂 次五左衛門 妹

一、從弟

在生ニ而在所ニ罷有候。

野呂次五左衛門子
野呂 常仙

一、從弟

御切米金五兩三人御扶持被下置、親吉兵衛御日記役相勤罷有候處ニ元文三年ノ年(一七三八)四月十三日ニ

野呂 助左衛門

病死仕候処、同年九月九日ニ家督無相違被下置、御留
守居式番組ニ被仰付相勤罷有候。

一、從弟

存生^ニ而助左衛門手前^ニ罷有候。

野呂 吉兵衛 娘

一、從弟

存生^ニ而助左衛門手前^ニ罷有候。

野^{吉兵衛子}呂 隆仙

一、從弟

存生^ニ而罷有候。六右衛門義森岡金吾用達役相勤罷有
候。

齋^{勝助右衛門娘}小山内 六右衛門 母

以上

一、本國 奥州

本処南部 九戸

一、生國 奥州

生所津輕 弘前

一、宗門 浄土

一、紋 丸之内すつる

一、差物出シ先達窺相濟候。

一、御切米金六両貳人御扶持被下置、享保十一^{丙午}年（一七二六）十月廿八日ニ親弥太右衛門家督無相違被下置、則日御馬

廻一番組与力ニ被仰付相勤罷有候。

右之通ニ而御座候。以上

寶曆五乙亥年（二七五五）正月

指物出シ之図



一、金ノ割菱

一、差渡シ三寸五歩

一、下ニ五色ノ切り下ケ

串鉄長七尺式寸

如斯相認伺直シ申候。亥ノ正月相認、同二月二日ニ森岡金吾様へ親類書共ニ差出シ申候。同口上書相添伺候。已上

寶曆五乙亥年正月

御馬廻七番組与力

戸田 弥太右衛門



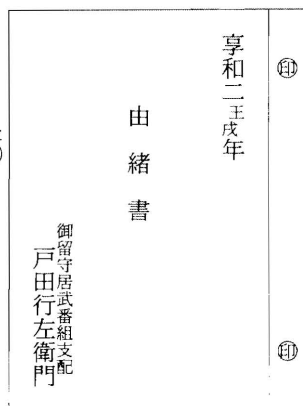
写真(5)『寶曆五年親類書』の最後の部分。

戸田 弥太右衛門 写(5)

定常花押

2、『享和二年戌年（一八〇二）由緒書』

表紙



由緒書
写(6)

冊子本

戸田家所蔵

一、高祖父

本国南部九戸

戸田大和
実名不傳承候

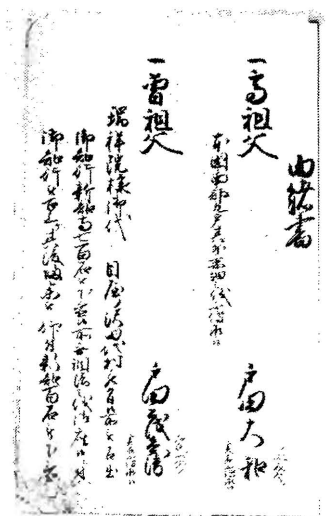
其外委細之儀不傳承候。

一、曾祖父

瑞祥院様御代
(初代藩主津經為信)

目屋ノ沢田代村罷有候所被召出、御知行新知高七百石被下置候所、無調法之儀御座候ニ付、御知行

戸田茂兵衛
実名不傳承候



写真(6)『享和二年由緒書』の書き始めの部分。

被召上^ケ、其後歸參被仰付、新知百石被下置、碇^ケ閑御奉行被仰付相勤罷有候所、女子斗^ニ而嫡子申立不仕、病死仕候^ニ付、御知行被召上^ケ候。

其外委細之儀^并年号月日不傳承候。

一、祖 父

戸田弥太右衛門定晴

妙心院様御代
(第四代藩主信政)

貞享二年(一六八五)五月廿七日、御徒被召出、御切米金五兩貳人扶持被下置相勤罷有候所、元禄八年(一六九五)三月十五日御徒目付被仰付、御加増金壹兩被下置相勤候所、正徳六年(一七一六)三月六日御目見以上御留守居支配被仰付相勤。享保十年(一七二五)三月御廣敷御番人被仰付相勤罷有候所、同十一年(一七二六)十月廿八日隠居願之通被仰付、同十一月十九日病死仕候。

一、父

戸 田 茂兵衛定明

玄圭院様御代
(第五代藩主信寿)

享保十一年(一七二六)十月廿八日親弥太右衛門跡式金六兩貳人扶持被下置、御馬廻^弼番組与力被仰付相勤罷有候所、明和六年(一七六九)八月十五日隠居願之通被仰付、安永六年(一七七七)八月廿五日病死仕候。

一、私儀

戒光院様御代
(第七代藩主信寧)

明和六年(一七六九)八月十五日親茂兵衛跡式御切米金六兩貳人扶持無相違被下置、御馬廻^弼番組与力被仰付相勤。寛政二年(一七七〇)二月十五日老^人扶持勤料被下置、作事方吟味役被仰付相勤罷有候所、同

四年（一七九二）九月廿三日金老兩勤料老入扶持被召上ケ、御目見以下御留守居支配被仰付候所、同六年（一七九四）六月十五日大組与力被仰付、同七年（一七九五）九月十五日歸役被仰付、同九年（一七九七）三月十一日御目見以上御留守居式番組支配被仰付相勤罷有候。

一、系図之儀者祖父弥太右衛門代ニ差上置候由傳承候。

一、家屋鋪正徳元外年（一七一）八月十一日、祖父弥太右衛門袋宮寺通り於山道町拝領仕住居仕罷有候。

右之通御座候。以上

姓 源

戸田 行左衛門⁽¹⁾

朱印
定武
花押

享和二年戊午（一八〇二）十月

須藤五郎太夫殿

蒔苗 市兵衛殿

戸田 行左衛門定取⁽²⁾

戸田 八十八定幸⁽³⁾

注(1) 戸田行左衛門定武。戸田與左衛門(資料8の③より)、戸田定

右衛門とも(資料3『覚書』より)名乗った時がある。

(2) 戸田行左衛門定取。同定武の子息。資料9「日誌覚書」の記録者と思われる。

(3) 戸田八十八定幸。戸田行左衛門定武の孫。

3、『覚書』

冊子本(横長)

戸田家所蔵

一、先祖ヲ尋ニ、戸田ト申名字ハ元来南部九戸之城主九戸修理

之亮ト、又、甲斐守ト申人之子、大和ト申候由。九戸市右衛門ト申候秀吉時代津

輕記ニも有之候。九戸乱之時打死之後九戸落城いたし、

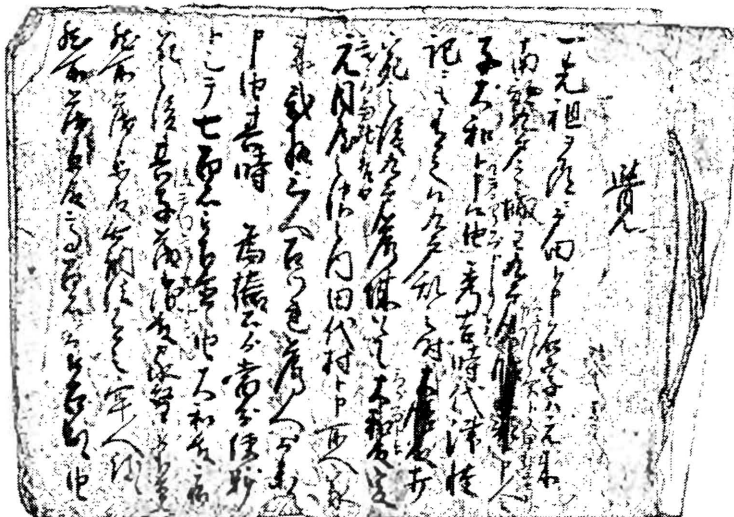
市右衛門ト云、三才ニ而当地ニ大和殿爰元目屋之沢之内、田代村ト申所へ家来式拾三人召つ

れ、落人ニ而参申由。

其時為信公も當分使料トシテ七百石被下置候由。大和殿病

死之後、其子茂兵衛殿家督被下置候。然所茂兵衛殿無調法有

之牢人致候。然所茂兵衛殿高百石ニ而被召出候由。碇ヶ関御



写真(7)『覚』の書き始めの部分。修正している箇所がある。

町奉行相勤被成候由。

然所茂兵衛殿男子無之、母子忝人^ニ而嫡子願不申上候而病死致候。夫故百石被召上罷有候所、上^ニ御尋^ニ而高式百石被下置候矢野武助ト申人御近習小性^(マヤ)相勤罷有候所、聲名跡^ニ被下置候。

然所武助殿無調法有之牢人致候。其子三人御座候^而、忝人ハ男子^ニ而忝人ハ女也。右忝人ハ出家致、覺勝寺之重職^(生)致候由。然所、武助殿牢人後早死致候故、右跡へ家後入リ^{あこ}ニ野田浄清ト申候三人御扶持被下置候、外醫入リ申候由。

其嫡子倫清之跡取り三覺ト申由。二男ハ新規御徒役罷出、戸田家ト相定、戸田弥太右衛門ト申候。

右之通御承候。九戸家ハ源家^ニ而武田家出候由ニ御座候。

一、明和六^{己丑}年(二七六九)七月五日、親茂兵衛儀隱居願差出、同八月十五日跡式無相違被下置、則役御馬廻忝番組与力被仰付候。同月廿日^ニ三ノ北^江御番入リ致、八月上リ番相勤申上候事。其頃頭ハ津輕多膳殿付添候。筆頭外鳴助右衛門相勤申候事。則助右衛門御役人衆廻同道、御番所廻ハ拙者忝人^ニ而相勤候。

覚
写(8)

縁組願之通九月十二日差出申候。同月廿四日被仰付候。
認様左之通

覚

上書ハ

菊地左内

菊地左内親

娘

戸田定右衛門

方江

右縁組奉願候

宜御沙汰奉仰候

以上

九月十二日

戸田定右衛門親

對馬惣八

菊地左内親

木村善記

杉原二ツ折也

覚

木村善記

戸田定右衛門親

對馬惣八

被仰付候覚

返事書様 但

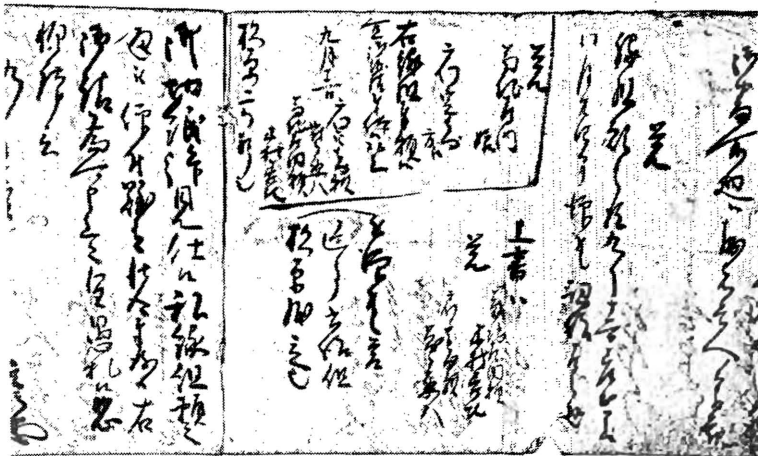
杉原紙立也

御切紙拝見仕候。私縁組願之通被仰付、難有仕合奉存候。
右御請為可申上候。宜愚札候。恐惶謹言

九月廿四日

定右衛門 花押

國分 弥源太様



写真(8)「縁組願」の覚の部分。

白取庄右衛門様

一、明和七^{庚寅}年（二七七〇）七月廿八日、作事方吟味役加勢被仰付相勤申候。引取八十一月廿一日也。

一、明和八^{辛卯}年（二七七二）五月六日、作事方吟味方加勢被仰付候得共、岩木山湯治願之通被仰付。

右之处勘定奉行中^{江断}、七日^ニ湯元罷下申候。依^而同廿二日罷上リ同廿四日誓紙相勤、廿五日^ニ作事方当番相勤申候。勘定奉行中^{江断}候様

口 上

私儀逆上罷御座候^ニ付、岩木山湯治願之通被仰付、明日湯元罷義に候。右之处御断為可申上伺御座候。已上

五月六日

戸田定右衛門

4、『申請状』

切 紙

（縦二八・九、横四〇センチメートル）

戸田家所蔵

差上申請状之事^{写(9)}

一、今度戸田定右衛門御步行御奉公被召

出難有奉存候。御奉公申上候内御法

度之筋目者⁽¹⁴⁾不及申上、逆心⁽¹⁵⁾構鋪儀⁽¹⁶⁾一切

仕間鋪候。宗門者⁽¹⁷⁾浄土⁽¹⁸⁾而御座候。縦如何⁽¹⁹⁾

様之儀ニ付定右衛門欠落仕候共尋出シ、急度

差上ヶ可申候。御請仕候上者、拙者如何様

之申事⁽²⁰⁾ニ茂可被仰付候。其時一言之

子細申上間鋪候。為其請状如件。

御藏米百俵津輕鞠負様御寄騎⁽¹⁾
 貞享二乙丑年五月十五日
 木村 六兵衛

對馬武左衛門殿⁽²⁾
 原田伊右衛門殿⁽³⁾
 原田助右衛門殿⁽⁴⁾
 柏谷弥次右衛門殿⁽⁵⁾

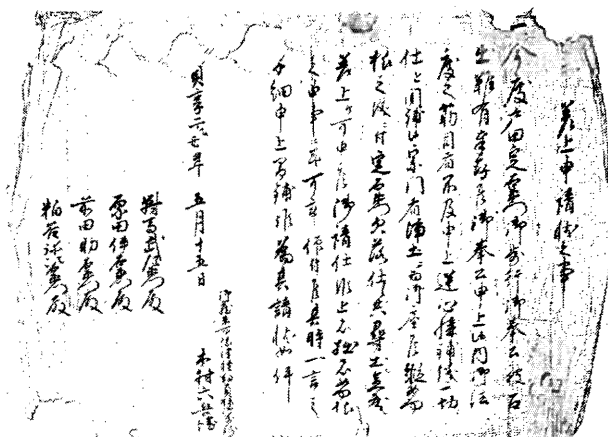
注(1) 津輕鞠負^(ゆきまゐ)。津輕鞠負広庸のこと。第四代藩主津輕信政の家老であった。

(2)(4)(5) 「貞享二年(一六八五)二月調御家中分限調」

(特) ^(みちのく双書) 輯『津輕史第八卷』所収六四頁によれば三名とも「御歩行頭」で、對馬武左衛門は百五〇石の、他の二人は百石の藩士である。

(3) 原田伊右衛門。右の分限帳に記載がない。

(6) 戸田定右衛門。右の分限帳の「御徒一番組」にその名が記載されている。ただし『享和二年戊午(一八〇二)由緒書』(資料2)の「戸田弥太右衛門定晴」が「貞享二年(一六八五)五月廿七日、御徒被召出、御切米金五両貳人扶持被下置相勤罷有候」とあるので同一人物と思われる。



写真(9)「差上申請状之事」全文。

5、『印可状』

切紙

(縦三五・五、横五八・〇センチメートル)

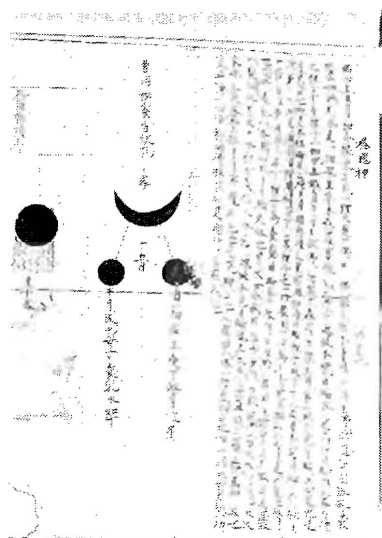
戸田家所蔵

魂魄ノ神 写(10)

三佛是也

佛^ハ心^ス生^ス日^ニ月^ニ和^ス根^ノ源^{ヨリ}。生^ニ死^ス一^ニ理^ノ大^ニ支^ス
口^ニ傳^ス云^ニ、佛^モ衆^モ生^モ草^モ木^モ有^ス情^モ非^ス情^モ生^ス佛^ハ心^ニ
一^ニ道^ノ心^ニ不^ス二^ニ成^ル故^ニ法^ニ界^ノ世^ノ界^ノ如^シ無^ニ別^ル成^ス一^ニ
是^ハ一^ニ切^ノ衆^ノ生^ノ草^ノ木^ノ森^ノ羅^ノ万^ノ象^ノ死^{シテ}三^ニ佛^ノ心^ニ三^ニ魂^ノ皈^ス
二^ニ本^ノ覺^ノ日^ニ輪^ニ一^ニ成^ニ三^ニ足^ノ鳥^ト住^ニ日^ニ輪^ノ内^ニ一^ニ三^ニ界^ノ
万^ノ德^ノ之^ノ種^ノ子^ノ十^ノ方^ノ種^ノ子^ノ一^ニ如^シ也。生^レ始^メ自^リ日^ニ月^ノ
一^ニ生^ル故^モ佛^モ一^ニ切^ノ衆^ノ生^ノ森^ノ羅^ノ万^ノ象^ノ生^レ用^ス立^テ上^ニ皈^{シテ}本^ノ覺^ス
月^ニ輪^ニ一^ニ成^ニ四^ニ足^ノ兔^ト一^ニ是^ハ月^ノ葛^ト云^也。如^ク是^ハ本^ノ性^ハ
晦^日ノ^丑時^キ日^ノ月^ノ須^弥頂^ノ上^ノ星^ノ宮^ノ殿^ニ和^合シテ^日輪^ノ種^ノ子^ヲ
取^リ下^ニ生^{シメテ}三^ニ界^ノ用^一本^ノ覺^ノ月^ニ輪^ニ立^上ル。故^ニ月^ハ
次^ニ第^ニ々^々成^ニ圓^満一^ニ亦^ハ須^弥頂^ノ上^ニ和^合シテ^下三^ニ界^ノ
種^ノ子^ヲ一^ニ也。一^ニ切^ノ衆^ノ生^ノ一^ニ切^ノ為^ニ上^ニ本^ノ覺^ノ日^ニ輪^ニ一^ニ故^ニ
空^ノ月^ト是^ハ云^フ支^也。故^月ハ^{十五日}自^次第^用滅^三界^下

種子為養露用。晦日先後朔日丑時三界用生次第立上皈成
圓滿。故世間ノ子^ニ養^フ乳^ヲ如^シ吞^ニ胸^ノ四^一水^ヲ。自^日一^ニ
輪^ノ火^ノ体^也。男^ハ火^ノ女^ハ水^ノナリ。故^ニ男^ノ陰^ハ少^シ。女^ノ陰^ハ
多^シ。故^ニ諸^ノ佛^ハ皆^ハ火^ノ水^ノ一^ニ道^也。水^ノ火^ヲ以^テ契^シ鋼^ム。故^ニ
男^ハ火^ノ女^ハ水^ノ和^合シテ^契作^二人^一体^ヲ。死^{シテ}三^ニ魂^ノ皈^ス
二^ニ本^ノ覺^ノ日^ニ輪^ニ一^ニ魂^ノ上^ニ天^ニ成^ル三^ニ世^ノ直^一道^ト。五^ニ藏^ハ止^レ
地^ノ鬼^ト神^ト成^ル也。衣^ハ那^ハ上^ニ天^ニ成^ル雲^也。故^ニ日^ノ月^ノ常^ニ覆^ス
無^レ光^也。是^ハ荒^ノ神^ト云^也。人^間崇^ヲ成^シ一^ニ切^ノ支^也



写真(10)『印可状』の前半の部分。

(縦一七・五、横六〇センチメートル)

戸田家所蔵

土徳之人名之曰

有常 常通字

有韻土也 常韻當金連續□□□

有常切歸納

羊

羊生而知禮且能群孝經曰

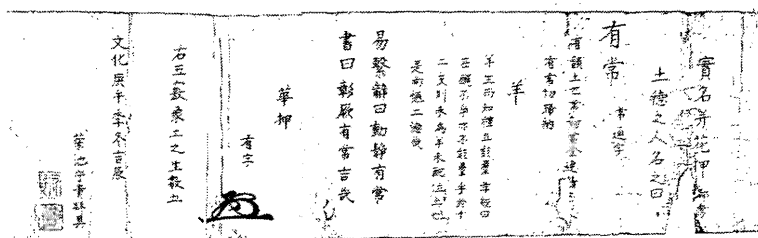
在醜不爭亦不能群乎於十

二支則未為羊配位土也

是尚懷土德哉

易繫辭曰動靜有常

書曰彰厥有常吉哉



写真(Ⅱ)『實名并花押□考』の全文。

華押

有字

右五竅象土之生數五



(七年一八一〇)
文化庚午季冬吉辰

菊池守貴 拜具

印
印

7、表彰状

戸田丈之助

當夏蝦地出張

二股之役力戰

其功不淺仍為

其賞金拾兩

被下候事

明治二年己巳十二月

議定堂

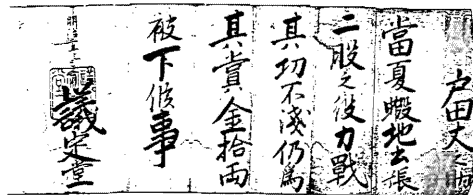
戸田家所蔵

切紙

解説

1、弘前第十二代藩主津輕承昭は、明治二年(一八六九)、戊辰以来の軍事功労者を大だ的に表彰している。本資料は函館戦争に参加した「戸田丈之助」への表彰状である。函館近くの「二股」という所で、津輕勢の合言葉をもつて巧みに近づいた相手に急襲され、津輕勢が大いに苦戦している。これを「二股之役」と称していた。

2、戸田丈之助は兵卒として浅利万之助隊に属していたが、この日同時に十兩の賞金とともに表彰を受けた浅利万之助



隊の氏名は次の通りであった。

隠密方・定八倅長尾鉄太郎、糺察方・兵藏倅後藤文藏、二等銃隊・多宮弟古川亀之進、二等銃隊・浅之助弟木村陣兵、三等銃隊々外・左馬之助倅外崎伝八、三等銃隊々外・勝弥倅蝦名巳之太郎、三等銃隊々外・孫吉倅三橋徳之助、二等銃隊・常弥倅武田繁之進、二等銃隊々外・八十八倅戸田文之助、二等銃隊・須藤親一郎、三等銃隊・工藤孫兵衛、營造司務上席・祐藏倅菱川雄太郎。

3、賞金には職務と功勞（上功・中功・下功）による基準があった。小隊司令士であった浅利万之助は中功として五十

両、戸田丈之助等右の面々は中功として十兩の賞金であつた。

また浅利万之助隊の總隊長都谷森甚弥は現米百俵、刀料百兩の格別の表彰を受けている。なお浅利万之助への賞詞は次の通りであつた。「当夏蝦地出張、二股之役突衝之賊を横撃致シ、其功不淺、仍為其賞金五拾兩被下候事」

4、戊辰以来の軍事功勞者の表彰等については、坂本寿夫編『弘前記事 三』（津輕近世史料5）（北方新社）（一九九〇）「賞典調其五明治二年己巳一一二」（三七〇頁）の項に詳細に記されている。

8、覚書

冊子本（横長）

戸田家所蔵

① 覚

當田流太刀 井本覚克己流和術傳受 井指南年数書

當田流太刀之儀者親茂兵衛義成田兵右衛門方⁽¹⁾皆傳仕候。然処、兵右衛門儀浅利伊兵衛方皆傳仕指南仕罷有候所、同人病死後門弟取扱之者無御座候ニ付、同人門弟共取扱指南仕候。

和術之儀者川元定右衛門方^{(本)(真)}皆傳仕候。然所、定右衛門病死
後門弟取扱之者無御座候ニ付、右両流共延享四卯年(一七四七)
に指南仕、私代當年迄四拾八年指南仕罷有候。

以上

十一月

戸田 與左衛門⁽³⁾

寛政七乙卯年(一七九五)

注(1) 成田兵右衛門。成田兵右衛門総恒のこと。弘前藩当田流太

刀、林崎新夢想流居合二代目道統浅利伊兵衛均禄の最高の弟子
であった。

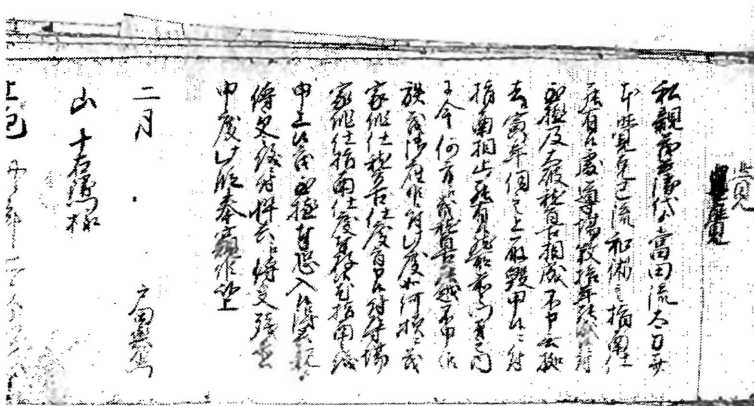
(2) 川元定右衛門。川元定^{(本)(真)}右右衛門盛應のこと。弘前藩本覚克己
流和術の師範。

(3) 戸田與左衛門。戸田行左衛門定武と同一人物である。

②

覚^{写(12)}

私親茂兵衛代^と當田流太刀^并本覚克己流和術之指南仕罷有候
處、導場数拾年罷成候ニ付、至極及大破稽古相成不申、



写真(12)「覚」の一部。

③

覚 写(四)

- 注(1) 寅年。天明二寅年（一七八二）九月。『要務秘鑑』「師役相止候面々」の項による。
(2) 山 十右衛門。山野十右衛門。御留守居組頭。
(3) 丑年二月十八日。寛政五癸丑年（一七九三）二月十八日を指す。

覚

劔術指南之儀 御目見以下御留守居支配

戸 田 與左衛門

上包 丑年二月十八日書⁽³⁾
(一七九三)

山^(山野)
十右衛門様⁽²⁾

二月

戸 田 與左衛門

無^(よんころな)抛去ル寅年⁽¹⁾同上取毀申候ニ付、指南相止メ罷有候。然所、前々門弟之内に今何方江も稽古罷越不申候族も御座候ニ付、此度如何様ニも家作仕、稽古仕度旨申候ニ付、導場家作仕指南仕度奉存候。

尤、指南之儀申上候も至極奉恐入候得共、親^レ傳受之儀ニ付、倅共江傳受残置申度、此段奉窺候。以上

是迄私儀先祖方袋宮寺通り山道町住居仕罷有候。然所、此度潰町被仰付候所、同所之儀者古来駒越組樋口村領ニ而尔今百姓屋鋪入込御座候ニ付、樋口村領被仰付御竿打入被仰付候ニ付、御物成上納可被仰付儀等奉存候。依之申上候も恐多奉存候得共、少給之私、殊ニ導場も取建罷有候ニ付、罷下御物成斗上納ニ而も難儀至極奉存候ニ付、左之通り申上候。

長勝寺方南ニ當リ富田村領ニ而三ツ森等申候木成御座候所、私居宅方手近かニ而見鐘方相成申候ニ付、杉松漆仕立仕度奉存候。尤右三ツ森之内、忒ッ者甚々小木成ニ而仕立方相成不申候外、忒ッ之内忒ッ者忒尺方三四尺位之小松、実生八拾本程仕立罷有候ニ付、見鐘仕、仕立方仕候ハ、生木可仕等奉存候間、抱山被仰付被下置度奉願候。

外ニ荒町後通り川端町潰町被仰付、家引取道々屋鋪大方式町歩程も可有御座等奉存候。右場所不残藤林与左衛門五ヶ年之内田畑開発方奉願被仰付罷有候間、同所之内江戸町行當町屋後通り方齋藤市十郎上屋鋪迄之内、三反歩位明年中開発仕、木苗等も手入仕度奉存候ニ付、来秋ニ至リ御物成上納可仕候間、私江開発方被仰付被下置度奉願候。

是迄私儀先祖方袋宮寺通り山道町住居仕罷有候。然所、此度潰町被仰付候所、同所之儀者古来駒越組樋口村領ニ而尔今百姓屋鋪入込御座候ニ付、樋口村領被仰付御竿打入被仰付候ニ付、御物成上納可被仰付儀等奉存候。依之申上候も恐多奉存候得共、少給之私、殊ニ導場も取建罷有候ニ付、罷下御物成斗上納ニ而も難儀至極奉存候ニ付、左之通り申上候。

写真(13)「覚」の一部。(書き始めの部分)

随而御切米渡方之儀者四歩一渡被仰付、是迄之通り住居仕、仕立方并開発方共被仰付被下置度奉願候。勤仕之儀者は迄之通り相勤申度奉存候。不苦御儀御座候ハ、前書之通り被仰付被下置度。右之段何分ニも宜御沙汰奉仰候。

以上

十一月

戸田 與左衛門

解説

- 1、寛政四年（一七九二）八月（弘前第九代藩主津軽寧親時代）開発のため藩士の土着が奨励されたが、下級藩士に様々な影響を与えた。本資料はじめ⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳はその一例を示す資料と思われる。
- 2、右の事情については『津軽史・第九卷』（青森県文化財保護協会編「在宅」の項、五一―一八五頁）や『要務秘鑑』から多く引用している『青森県史』③「三八頁以降に詳しい。

④

覚

以口上書申上候。私親茂兵衛儀成田兵右衛門方と當田流太刀傳受仕、和術之儀者川元貞右衛門方と傳受仕候。兵右衛門儀者浅利伊兵衛と傳受仕指^南なん仕候。然處右兩人病死後指なん仕候族無御座候ニ付、親儀兩人之門弟共取扱仕、延享四卯年（一七四七）と指なん仕、私迄数拾年指なん仕罷有候。

然處、天明二寅年（一七八二）導場大破仕、稽古相成不申候ニ付、修覆仕稽古仕様奉存候得共、少給之門弟斗ニ御座候ニ付、早速修覆之儀も相成不申稽古仕兼罷有候所、私儀在勤役被仰付相勤申候ニ付、導場取建門弟取扱之儀も行届不申候

二付、取毀仕、伺上指なん相止メ罷有候。

然所、寛政四^(子⁽¹⁾)亥年(一七九二)御留守居支配被仰付候ニ付、親方傳受之儀御座候、殊ニ倅共生長仕、男子共多御座候ニ付、倅共^(五⁽²⁾)傳受殘置申度、同五子年(一七九三)二月指なん之儀奉伺候所、伺之通り被仰付候ニ付、導場取建、是迄指なん仕罷有候。

然處、去年(一七九二)正月、御目付中^(江)方私儀御目見以下被仰付候ニ付指南役御差留之儀被仰付候得共、前書申上候通り、倅共^(江)傳受殘置申度、自分ニ而導場取建稽古仕罷有候ニ付、尔今稽古仕罷有候。然處、去五月御内覽被仰付候ニ付、倅共^(江)門弟罷出候所、倅儀出精ニ稽古仕候ニ付、藩御常事御目録被下置、難有仕合奉存候。依之申上^(江)恐多奉存候。此度

御高覽被仰出候所、前書申上候通り御座候ニ付、被仰付無御座候。御目見以上之門弟も御座候而、日々出精ニ稽古仕候族も御座候所、被仰付不被下置候^(江)□□甚々はけみ^(江)も相成不申候間、私被出候儀被仰付儀御座候ハ、御目見以上之門弟之内、私名代仕、此末御高覽之節被出候様被仰付被下置度奉願候。不苦御儀御座候ハ、宜御沙汰奉仰候。以上

二月

戸田 與左衛門

- 注(1) 寛政四年は亥年でなく子年である。また寛政の亥年は寛政三年である。『享和二壬戌(一八〇二)由緒書』(資料2)には「私儀(戸田行左衛門定式)寛政四年(一七九二)九月廿三日、金壹両勤料壹人扶持被召上ケ、御目見以下御留守居支配被仰付候」とあるので、この年は「寛政四年」で、「亥年」でなく「子年」ということになる。
- (2) 寛政五子年。寛政五丑年の書き誤りである。

⑤

覚

一、當田流太刀

親茂兵衛儀、成田兵右衛門方享保十八丑年（一七三三）五月皆傳仕罷有候所、延享三寅年（一七四六）方指南仕候。

一、本覚克己流之和

親茂兵衛儀、川元貞右衛門方享保六丑（一七二一）八月皆傳仕、延享三寅年（一七四六）方指南仕罷有候所、私儀親茂兵衛方明和四亥（一七六七）ノ九月、両流共皆傳仕罷有候所、安永六酉（一七七七）ノ八月、親病死仕候ニ付、病死後私指南仕罷有候所、導場数拾年罷成候ニ付甚々及大破、少給之私如何様ニも修覆仕兼、天明二寅年（一七八二）九月導場取毀申候ニ付、指南相止メ罷有候。御尋候ニ付此段申上候。以上

天明八末年九月御目付方へ書止申候⁽¹⁾

九月

戸田 与左衛門

上包

劍術指南御尋之儀

覚

戸田 与左衛門

注(1) 天明八年は「申年」であり、天明の末年は「天明七年」である。「末年」でなく「申年」の誤りではないかと思われる。

⑥

覚

私儀是迄住居屋鋪江導場取建罷有候ニ付、手挟御座候故、西隣永野左右衛門明屋敷御座候ニ付、同人方借受、是迄手入仕罷有候。然処此度潰町被仰付申候ニ付、同人儀馬屋町江屋鋪拜領被仰付罷越候ニ付、上屋敷罷成候間、御物成上納可仕候。私屋鋪之裏畑被仰付被下置度奉願候。外ニ私屋鋪南裏通り和徳組用水堰添壱町拾歩下之畑ニ而野畑御座候。堰添無用心ニ而難儀仕候ニ付、木品仕立申度奉存候間、御物成上納可仕候。右兩様共裏畑被仰付被下置度奉願候。

右之段何分ニも宜御沙汰奉仰候。以上

⑦

覚

戸田与左衛門申立候袋宮寺通り山道町住居之處、潰町被仰付在領被仰付候所、富田村領三ツ森と申候空地三町歩程之場所并荒畑江諸木仕立度、御給分四歩一渡方願之儀、再應勘定奉行迄申出、仕立之場所も想應ニ付、申立之通り四歩一渡申付候。

尤、申出之荒畑方江諸木仕立之儀者差繰相成候ニ付、三ツ森三町歩程之空地壱ヶ所江仕立、盛木至候ハ、三ヶ二者御用分、三ヶ一者仕立主江被下置候。

猶又、用人住居屋敷隣明屋敷并裏通り下之畑壱町拾歩空地被仰付度旨、是又申出之通り御物成并諸四役並合之通り相勤候様申付候由之旨、御申付可有之候。已上

二月二日

笠原兵司殿

森岡金吾

寛政六卯年^(寅)(一七九四) 前書通り

被仰付候御用之表

⑧

覚

私住居之家屋鋪袋宮寺通り山道丁ニ而祖父代^方百年余住居仕罷有候所、潰町ニ被仰付候ニ付、五拾町之内屋敷奉願候所、先後之願之儀ニ付不被仰付罷有候ニ付、外屋敷可奉願与詮儀仕候内ニ、樋口村領ニ被仰付、御物成上納之上住居被仰付候ニ付、富田村領ニ而三ツ森^(ト)与申候所空地御座候ニ付、右空地之所江杉松并漆仕立方奉願、在宅所ニ奉願候處、願之通被仰付候ニ付、御手当并屋木等頂戴不被仕斗被下置、御物成上納之上住居宅所ニ被仰付、是迄住居仕罷有候。然處、此度在宅御引上ケ被仰付、前々之通町割被仰付候間、私屋敷之儀も前々之通り御物成御免之上、住居被仰付被下置度奉願候。

右杉松漆仕立方仕候ニ付、屋敷手挟ニ御座候而者木苗仕立方迷惑仕候ニ付、私西隣明屋敷御座候故、右明屋敷并裏通リ用水堰添ニ野畑^ト畝拾歩之空畑御座候ニ付、詰地奉願候所、願之通り被仰付、木苗等も手入仕、去々年^方木苗仕立山江植付罷有候間、是迄之通仕立山并詰地共被仰付被下置度奉願候。

仕立山之儀者土地宜所ニ御座候間、杉等も盛木可仕与奉存候。不苦御儀御座候ハ、是迄之通り被仰付御物成御免之上住居仕候様被仰付被下置度奉願候。

右之段何分ニも宜御沙汰奉仰候。以上

九月

戸田与左衛門

西(館) 字膳(1) 様

注(1) 西 字膳。西館字膳建通のこと。当時弘前藩の重役・用人という役職にあった。

⑨

覚

師範之儀左ニ申上候。

一、親茂兵衛代^ら当田流太刀并本覚克己流之和師範仕罷有候所、導場数拾年ニ罷成候ニ付、至極大破仕、稽古相成不申罷有候得共、少給之私、殊ニ門弟も少給ニ御座候ニ付、如何様ニも修覆仕兼、天明二寅年(一七八二)導場取毀シ、当分之内師範相止申候旨御断申上候。

然所、倅共生長仕候ニ付、傳受残置申度、殊ニ前々門弟も御座候ニ付、寛政五丑年(一七九三)二月、師範之儀伺之通リ被仰付候ニ付、自分ニ而導場取建稽古仕罷有候所、同九巳年(一七九七)、私儀松前御用被仰付罷越候所、同十年(一七九八)二月、自分導場ニ而稽古御差留被仰付、学校導場江罷出稽古仕候様被仰付候ニ付、門弟并倅共学校江罷出稽古罷有候所、去年自分導場ニ而稽古仕候様被仰付候ニ付、導場取毀不申罷有候故師範仕、稽古為仕罷有候。

御尋ニ付此段申上候。以上

八月

戸田 与左衛門

⑩

戸田 与左衛門ノ持

一、屋敷 拾三間

長之助

九間

四畝壹歩 米三斗貳升三合

外 壹畝

一、下畑拾九間九間

五畝貳歩

米壹斗五升貳合

一、反別合九畝三步

米合四斗七升五合

正木 貳十五本 已上

戸田 与左衛門持

一、下 畑

拾五間半

拾間

五畝五歩

米 壹斗五升五合

屋敷

壹斗貳升九合貳勺

壹斗七升貳合四勺

新町後古川添

下々畑 壹畝拾歩

弥右衛門

米 壹升三合

上 畑 壹反歩 六斗

中 壹反歩 五斗

下 壹反歩 三斗

下々 壹反歩 壹斗

上納米 九升 三勺

長之助

覚

- | | | |
|-----|--------|--------|
| 一、米 | 三斗三升八合 | 戸田分 |
| 一、同 | 壺斗貳升八合 | 佐藤五十郎 |
| 一、同 | 壺斗四升七合 | 鈴木直次郎 |
| 一、同 | 九升 | 中尾藤右衛門 |
| 一、同 | 八升六合 | 天内善次郎 |
| 一、同 | 九升七合 | 佐々木源之助 |
| 一、同 | 壺斗五升壺合 | 佐藤兵左衛門 |
- 右之通り庄屋方より申来候

⑪

覚

- 御家中在宅之儀繁勤之族、在宅当分御差留被仰付候部、親類寄宿^ニ而日勤可相勤義候ハ、在宅再願申出候様。
- 一、倅繁勤^ニ付在宅当分御差留被仰付候分、是又右同断、親類寄宿等^ニ而可相勤義候ハ、再願申出候様。
- 一、日勤役^ニ付在宅御差支之部^ニ而支配^ニ而御人賦宜御差支不相成分、在宅再願申出候様。
- 一、御目見以下小給之族、是迄不得止事願筋在宅被仰付候得共、右之部者在宅当分御差留被仰付候。
- 右之通向寄可被申触候。已上

二月

注(1) 『津輕史・第九卷』六二頁に「正月廿日」の日附で同じ記事がある。

⑫ 覚

御家中在宅之族、在宅之筋表通垣根^并合垣等取拂候族も有之候趣相聞得候。以来右躰之儀無之様、此旨当番通用可被申触候。已上

御家中御切米取之族、在宅可致御給分^ニ而も当時繁勤候得共、在宅之儀御差留被仰付候。然者知行取之族繁勤之部ハ、為安堵水帳被下置候。御切米取之族ハ、其儀も無不安心^ニ可有之候。依^而在宅可致御給分之族当時繁勤^ニ付御差留^ニ相成^リ候^而も、末々為安堵其身^并家内等も爰元罷有子弟又身寄者等差遣、開発手配方相成候儀も有之候ハ、村所住居屋鋪等取究願申出候様、左候ハ、申出^ニ寄御沙汰被仰付候。此旨可申触候。已上

注(1) 『津輕史・第九卷』六四頁に右二項と同じ記事がある。

⑬ 覚

御家中在宅之族^江差出候御用状之儀、去々年^江郡所^江被仰付、御用便^并御急用之分共郡所^江遠使右相達候處、去秋^江在宅之族多有之候付、向々^江諸用状日々不少、其内多分急御用与片書致、今明日中相達候様与紙面^ニ而郡奉行申遣候^ニ付、

其度々遠使を以相達候由。然所此頃日別而多遠使も行届兼候ニ付、向々江問合候處、左之通り急御用与申程之義ニ無之分も有之由、依而為御メリ合、左之通被仰付候。

一、在宅之族ハ差出候御用状之儀ハ、以来御用便ニ而相達候分ハ、是迄之通御急用ニ而則日又ハ一兩日之内可相達分者御急用付遠使を以相達候様被仰付候。此旨有増御用向紙面江相認、郡所江差遣候様、左候得者右紙面之表を以遠使相見廻年中相認紙面共郡所御用所江差遣候様被仰付候。此旨可被申触候。已上

三月

右之通櫻庭半兵衛殿被仰付候。此旨申触候。早々

已上

山野 十右衛門

寛政六寅年（一七九四）

注(1) 『津輕史・第九卷』六四頁に、ほぼ同じ文意の記事がある。

⑭

今度在宅之族家木入用ニ付、仕立抱山被伐取被仰付候分者在方御役錢上納有之候付、山主江御定之杣役錢差遣候様。

尤双方勝手寄山主ニ而伐取、山下ケ致候ハ、御定直段にて伐錢山主へ差遣候様、尤御本山館山之分ハ御役錢御免ニ御座候間、杣役御定へ左之通

- 一、雜木沓丈丸太沓本 御役錢沓分七厘五毛
- 一、同二間丸太沓本 同貳分八厘
- 一、同貳間半丸太沓本 同三分五厘
- 一、三間丸太沓本 同四分貳厘
- 一、同三間垂木沓本 同沓分四厘
- 一、同貳間垂木沓本 同沓分五厘
- 一、同木 二間^ろ沓丈沓本 同五厘
- 一、同六尺^ろ七尺沓本 同貳厘五毛

右之通村方^江差遣候様、尚又其外之木品者右ニ準代錢差遣候様、右之通被仰付候間、此旨申遣候。以上
寛政六寅年

三月十一日

注(1) 『津輕史・第九卷』六五頁に同じ記事がある。

⑮ 御用人衆^ろ

御家中在宅被仰付候付、屋鋪之儀左之通、

一、在府丁後丁 一、同新割丁

一、馬屋丁未申 御櫓丁 一、同町東方行留

荒町之通古川添 一、荒町川端丁 一、鷹匠町細小路 一、鷹匠町中程江戶町之通

一、袋宮寺山道丁 一、同町北詰行留 一、同所袋宮寺通 一、五拾石細小路 一、袋町之通

一、若黨丁 後丁 与力丁 春日丁 小人丁 御徒町 同川端丁 田代丁 山道丁 住吉丁 西川端丁 瓦ケ丁

上中南北共

田中丁 柳丁 坂本丁 綿丁 片山丁 上田丁 桶屋町 川岸丁

右八町々家屋鋪形潰被仰付候。新家作并繰替拝領等御差留被仰付候。依之右町之明屋鋪所持之分不殘御引上ケ被仰付候。

一、惣而御家中明屋鋪所持之分、昨今年家作申立之上屋敷可被仰付候。以上

注(1)『津輕史・第九卷』六六―六七頁に同じ記事がある。

天明三癸卯年（一七八三）青森大キ焼失捨

寛政五癸丑年（一七九三）冲浦通り 廣戸大焼不殘火損

寛政六^{甲寅}年（一七九四）岩木川永代橋之思召ニテ駒越向^方懸渡候事

然所翌年相渡候。

寛政七^{乙卯}年（一七九五）小泊村之町百八九軒余焼失捨

⑬ 覚

御家中在宅被仰付候砌、私住居取潰町ニ被仰付、樋口村領被仰付候ニ付、唐内坂東向通りニ三ツ森^{（三）}与申候御用地御座候ニ付、右御用地并永荒大作人詮義仕候所、御検地ニ而三町歩程可有御座候旨申候ニ付、右之場所江杉漆雜木共仕、立山奉願、乍居在宅奉願候所、仕立木之儀ハ三ケ式通御用木三ケ一通り右仕立主江被下置候旨被仰付、御手当屋木之儀不被下置、在宅願之通被仰付候ニ付、是迄年数杉漆年々植付、仕立方仕罷有候。殊ニ自分屋敷杉苗等も所持仕候ニ付、當年も植付可申旨奉存罷有候。然所先達一統在宅御引上ケ被仰付候砌、仕立山之儀者其村々江相返候様被仰付候得共、杉仕立山之儀者前書申上候通り村領無御座候御用地御座候。殊私儀（以下二行不詳）

被仰付義無御座候得共、一統御引上ケ之旨御觸之儀ニ付御引上之害由御役方ニ而申候間、是迄数年手入仕、杉漆植付罷有候間、是迄之通仕立山被仰付被下置候方奉願候。右三ツ森之方在領無御座、御用地御座候儀者古来方御召馬無所地之由ニ御座候間、前書口上之通是迄年々仕立方仕罷有候。殊杉苗も所持仕候ニ付、植付申渡奉存候。是迄植付罷有候諸木等之切^{（三）}り罷成り可申与奉存。甚残念奉存候間、不^レ御儀御座候ハ、是迄之通被仰付被下置度、何分宜御沙汰奉存候。以上

亥 一 月

墓 所 地

⑰ 覚

天明二壬寅年（二七八二）岩木山南之御方_ニ煙立、四五ヶ月出候。同年三月末迄雪降、六月綿入_ニ而雪。

一、同三癸卯年（二七八三）大凶作_ニ而御郡内人数多死。尤寅年（二七八二）人数改之節、武拾三_四万人御座候由。然所凶作_ニ而他国出并死亡之者迄拾貳万人程不足_ニ相成申候。弘前中_ニ死亡多、往来致迷惑候事。同年正月戒香院様御逝去被遊候。必竟三民死亡故御_□病之由承候。

一、同四甲辰年（二七八四）万作_ニ御座候。

同年当国若侍五人黒石柳屋へ無心_ニ參、同所大騒キ、右五人之内三人出奔、貳人ハ搦被捕入牢。翌年五里追放出牢被仰付候。

同年八申年（二七八八）天子之御屋形雷火烧失。尤しん殿斗。

同九年寛政_{（二七八九）}ト改元。

寛政三_{（二七八九）}辛未年（二七九二）六月廿一日、（体孝院）第八代藩主信明光院様御逝去被遊候。

同年八月廿日大風、子年（二七九二）_{（一七九二）}ニも無覚之程之由。御郡内杉雜木沢山風折_ニ相成候。民家も甚破損_ニ相成申候。九月四日又々大風、東風_ニ而青森海つなミ、三尺程水上リ候由。

同年黒石和三郎様屋形様_ニ奉称候。

寛政五（二七九三）町々所々御潰町被仰付候。右町勝手次第引取候様被仰付候。尤在方も多、人死候_ニ付町方へ徘徊之者在宅被仰付候。

同年五月町方潰之儀は御免被仰付候。

一、御目見以下一統奉公人割付被仰付候事。

御仕向

寛政六寅年（一七九四）西館文之助殿、長屋焼失。久渡寺并諸社之杉伐取、学校御取建被仰付候。

津輕藏人殿、松浦甚五左衛門殿、木村并左々嶋、右新学校屋敷地ニ相成。

同七卯年（一七九五）御普請出来、学校頭取津輕永孚殿。

⑱

御家中在宅之族在宅之節、表通り垣根并合垣等取拂候族も有之候趣相聞得共、以来右躰之義無之様、此旨当番通用可被申觸候。以上

御家中御切米取之族在宅可致御給分ニ而も、当時繁勤候得者在宅之義御差留被仰付候。然者知行取之族繁勤之族は為安堵水帳被下置候。御切米之族者其儀も無不安心ニ可有之候。依而在宅可致御給分之族、当時繁勤ニ付御差留ニ相成候而も末々為安堵金之身并家内とも爰元ニ罷有之、子弟又者身寄者等差遣開発手配方相成候儀も有之候ハ、村取住居屋鋪等取究願申出候様。左候ハ、申出寄御沙汰可被仰付候。此旨可被申觸候。以上

覚

御家中在宅之族江差出候御用状之義、去々年江郡所へ被仰付御用便并御急用之分共郡所江遠便右相達候處、去秋江在宅之族多有之候付、向々諸用状日々不少、其内多分急用と片書致今明日中相達候様与紙面ニ而郡奉行申遣候ニ付、其度々遠便を以相達候由。然處此頃日ハ別而多遠便も行届兼候ニ付、向々江問合候處、左之通急御用と申程之義ニ無之分も有之

由、依_而為御_り合左之通被仰付候。

一、在宅之族_方差出候御用狀之儀、已來御用便_ニ而相達候分_ハ、是迄之通御急用_ニ而則日又ハ一兩日之内可相達分は御急用_ニ付遠便を以相達候様被仰付候。此旨有増御用向紙面_江相認郡所_江差出候様、左候得共右紙面之表を以遠便相見廻年中相認紙面共郡所_方御用所_江差出候様被仰付候。此旨可被申觸候。以上

寛政六寅年（一七九四）

三月

右之通桜庭半兵衛殿_方被仰付候。

山野 十右衛門

⑬

寛政三_{辛亥}年（一七九一）

六月廿日、屋形様御逝去。
（第七代藩主信明）

同年八月廿日、夜大風_ニて弘前屋称廻太痛。
（根）
□□□百五拾本風折、寺□貳百拾本余、革秀寺六拾本余、其外諸寺屋中不

残風折之杉何本共申不及。

寛政四_{壬子}年（一七九二）

四月八日、風_ニて宮地村六軒潰申候。

六月中旬、風ニて岩崎村大馬越迄不残皆引相成申候。

同年十二月廿八日、大地震ニて弘前ハ少斗相痛申候。鯨ヶ澤方大馬越、深浦太痛申候。鯨ヶ沢丸潰三軒、半五拾三軒、痛五拾三軒、小見世六軒、土蔵八拾軒痛、潰貳軒、舞戸村丸潰貳軒、半四拾五軒、痛土蔵八ヶ所、潰壹ヶ所。赤石村潰貳軒、半五軒、半拾六軒、痛三拾七軒、関村潰四軒、半拾三軒。金ヶ沢村潰貳軒、半十三軒。田野沢村潰貳軒、半三軒。風合瀬村潰壹軒、痛三拾四軒。森田村潰壹軒、半貳軒。廣戸村潰壹軒、痛七軒。追良瀬村痛四軒、潰三軒。深浦共、丸潰七拾五軒、半潰百九拾九軒、痛百三十五軒。

十二月廿九日、地震ニて深浦町一濱町太兵衛と申候者火元ニて出火、類焼拾四軒。土蔵貳所、湊番所半潰、手附番所丸潰、濱町丸潰家貳拾壹軒、土蔵貳所、半潰家四拾貳軒、土蔵拾四所。

一、深浦村丸潰家三軒、半潰五軒、同所觀音堂、圓覺寺半潰貳軒、一、変死家内五人、尋者、女房貳人都合八人、鯨ヶ沢ニも変死可有事。

寛政五^(マ)庚未年 (一七九三)

正月改候未又地震有也。外ニ廿九日丸潰^并半潰外焼家も有之由。

⑳ (書き出し切れて不明)

袋宮寺通、山道町住居乃處潰町被仰付、在領被仰付候所、富田村領三ツ森村と申空地三町歩程之場所^并荒畑^江諸木仕立度、御給分^ハ四歩一渡方願之儀再應勘定奉行迄申出、仕立替所も相應ニ付、申立之年四歩一渡申付候。尤申出候内荒畑方^江諸木仕立之儀ハ差障相成候ニ付、三ツ森三町歩程之空地壹ヶ所^江仕立、盛木至候ハ、三ヶ二ハ御用^口、三ヶ一ハ仕立主^江被

下置候。猶又同人住居屋敷□□□□并表通下々畑屯駄拾歩空地被仰付度旨、是又申出之通御物成并諸御役並合之通相勤候様申付候。右被仰付可有之候。以上

二月二日

森岡金吾

笠原兵司殿

寛政七乙卯年（一七九五）

②①

覚

今度於高岡就御大祭御目見以上拝礼被仰付候。依之参詣之面々廿日御馬廻以上、廿二日御手廻以上参詣之筈ニ候。当番式者忝人役ニ而参詣不能成分は名代ニ而目録差上可申事。

一、差上物之儀御城御年始之通、御武頭以上三百石以上太刀目録之儀は銘々持参可申候。太刀ハ於高岡御進物取扱役方御貸被仰付候事。附、長柄奉行以上之太刀目録は差上候而拝礼之筈、其以下之差上物ハ受取役人江相渡拝礼之筈ニ候。忌有之分ハ不及□□□差上可申事。

一、長柄奉行以上長袴、右以下ハ麻上下ニ而拝礼、是又差上物之儀、三百石以下扇子目録ニ而差上候族は鳥自何程と御年始之礼銀之高を堅目六ニ而差上可申候。扇子と申を鳥目と書替候様可被相心得候。

附、廿一日惣奉行鳴弦

奉弊使祭司

御参詣無之人共御名代之御家老、右之分素袍差用可仕事。

一、拝礼刻限之儀、御祭礼相済順々罷出、場所之儀は大目付御目付方可致差図候事。

一、拝礼相済候ハ、早速可相戻事。^{写(14)}尤御廟御宮前御拜殿方御宝蔵之辺江猥ニ参申間敷事。

一、御名代并御用ニ而相詰候面々、自分参詣共供廻り之儀御年始之由候事。

一、御名代之面々四時預小屋場江相詰可申候。尤仮小屋手狭ニ付参詣之面々大身ニ而も、侍式人、挟箱、草履取、笠持之外小屋召連儀堅ク可相無用事。

一、御名代之面々御礼相済、則日自分拝礼可仕候。

一、差上物代願目録引替候義返而不被仰付候。

一、於御拜殿御畳候附 覚

二畳目に 御家老

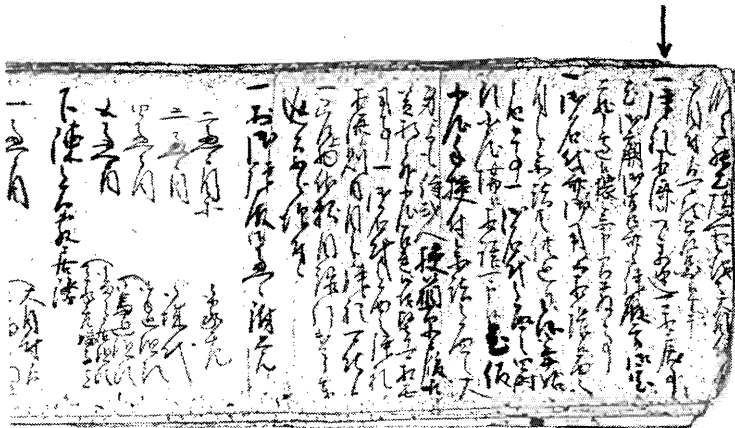
三畳目 御城代

四畳目 御手廻組頭

御馬廻組頭

五畳目 御留守居組頭

御家老嫡子迄



写真(14)「覚」の一部。三行目(矢印のところから)
「一、拝礼相済候ハ、早速可相戻事……」

下陣^ニ而敷居際

一疊目

大目付^方

二疊目

長柄奉行迄

番頭迄

外縁頓唐戸際

一疊目

碓ヶ関町奉行^方

(以下二枚分文字不詳につき略。写⁽¹⁵⁾)

9、 日誌覚書

冊子本

戸田家所蔵

(文化五年「一八〇八」)

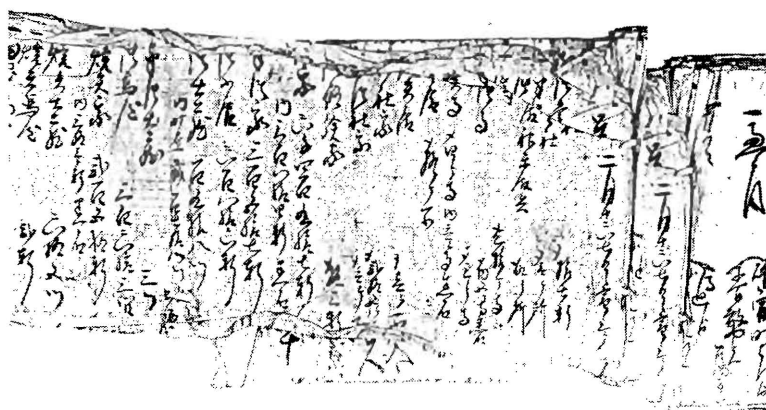
松前城下福山^江着船⁽¹⁾

尤幸吉船^一壹艘小泊り^江相戻、五月五

日浮武者式人^(人)仁夫共三拾人之乗合着船。^{写⁽¹⁶⁾}

一、詰合之内^一壱人ニ付上下一統^一壹日白米七合五勺菜金浮武者金
壹歩被下置相動候。七月廿一日為御手当金式歩式朱被下置候。

陣立^(習)ならし三度有。



写真(15)読めなかった部分。

一、八月三日⁽²⁾、松前詰御人数御陣拂被仰付、同廿日⁽¹⁾日和待、

同日日和之儀船頭^江申出候付、御陣屋出立之所順風不宜相成

見合候得共、迎も不順風故大松前中野屋清兵衛方^ニ旅宿求、

足輕ハ御陣屋跡^江差遣候。清兵衛方止宿ハ、佐野吉郎兵衛

并浮武者拾三人家来共、同廿二日朝迄止宿。同日五ツ時順風

之儀申出、早速乗船致候所、風合不宜、沖風相待候。迎も早

速之所相成不申、引船^ニ而沖合申出候。然所青森表へ乗渡可

申所、迎も風不宜、三馬屋村へ可致旨船頭へ申付候。然所廿

二日暮頃^ニ相成候得共着船相成不申、段々風悪ク三馬屋^江着

岸六ヶ敷様之間切て寄候所、頓^而夜九ツ時頃相成、仍^而碇^式

丁繫候所、日方風強相成、南部焼山邊沖遠^ニ流れ、夫方曉七

ツ時頃風相止メ、仍^而帆を揚、平館村沖合参候。同村荳里余

之所^江船繫キ、廿三日朝傳馬船^ニ而村方致通用、夫方傳馬船

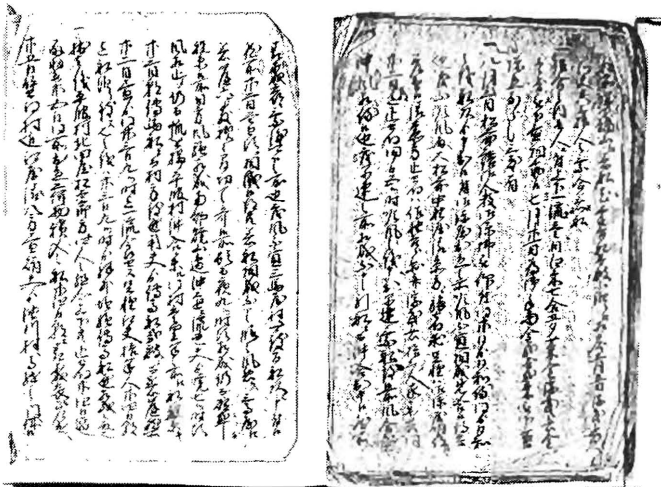
式艘^ニ而着岸、然所廿二日昼方同廿三日九ツ時迄一統食セズ、

足輕仁夫拾余人廿四日朝迄船泊り致ス。右之儀ハ廿三日九ツ

時方殊外塩強、傳馬船通相成候故也。

一、拙者儀平館村北田屋松太郎方^江四人之組合之上下共止宿廿

四日逗留、廿五日同所出立、荷物積入之船廿四日朝^ニ青森表



写真(16)「日誌覚書」の書き出しの部分。ただし前の部分が切れている。

へ差遣ス。廿五日蟹田村近江屋清八方昼賄、夫より油川村へ馬継之内休候所、菊屋伊右衛門方へ入、同人三種ニ而盃出ス。甚大悦。夫より青森へ着ク。濱町加賀屋三太郎方ニ止宿、同廿八日朝五ツ時青森より出立、同日昼高田村佐藤吉右衛門卜申者宿、同日目鹿沢村西塚弥右衛門方泊り宿、廿九日朝五ツ時出立、藤崎村丸尾吉右衛門昼宿、同日八ツ時頃宿元江江到着、翌世日頭方江断出勤、尤着否申通用番へ断。

一、文化六己巳年(二八〇九)八月十一日、拾万石御高直四品被仰付候。御祝御能拝見、御祝頂戴被仰付及暮帰ル。

一、同年十二月十八日、長濱萬物御番所へ居合被仰付。尤四人持扶五両被下置、組合四人ニ而式人ツ、式ヶ月代り相勤候事。尤年中加役松前御用ニ付、御人少故同所拙者共へ被仰付候事。

一、文化七庚午年(二八一〇)四月廿二日夜九ツ時頃、御目付方より明日御逢被仰付候間、四ツ時過出勤致候様通用申来候付、翌廿三日九ツ時以前上下ニ而登城仕候所、御目付之差図ニ而竹之間江師範之面々式拾式人相詰候處、屋形様於菊ノ間御逢被仰付蒙御意。夫より四ノ間へ退出、又々御自筆拝見并御家老衆御演説御座候ニ付、冬ノ間へ相詰候様御目付差図ニ付、則冬ノ間へ相詰、兩人立ニ而拝見相済退出、御家老衆、御用人衆、御用番へ御禮廻り自分頂方ニも罷出候。

右之趣ニハ劔術出精令満足候旨、尚又此末共子弟共取立候様被仰付候。

一、長濱御番所出来島式ヶ月代りニ而相勤候所、文化七庚午年(二八一〇)十二月廿二日、弟石郷岡嘉藤太儀御詮義之筋ニ付、同人家守ト揚屋入被仰付、右跡封印之上拙者儀見継方被仰付候。仍而長濱御番所引取代り入候事。

一、同八未年(二八一二)六月三日、弟嘉藤太儀無調法ニ付永之御暇被下置候尤大場御かまへ三里御追放被仰付ニ付、拙者儀御奉公遠慮伺差出候所、伺之

通被仰付。六月四日と同兩日七ツ過ニ御免被仰付候付否や御家老御用人頭方へ御禮廻仕候事。

一、文化九_{壬申}年(一八一二)九月朔日、江利山新蔵養妹拙者呼取妹ニ願候所、同四日願之通被仰付。仍_而九月七日佐藤又十郎方_江縁組願差出候所、同廿二日願之通被仰付候付、御用番御用人大道寺宇左衛門殿_江御礼廻。尤自分頭土岐渡人殿へ同斷。同廿七日引取婚姻之御礼右同斷。

文化九_{壬申}年十月中、不時番被仰付候所、同十六日小人宿中村久右衛門不調法之義ニ付、御給分被召上弘前_江三里御追放之上家財關所被仰付候ニ付、右奉行被仰付致出勤候。尤勘定所へ聞合致候所、鳴海又右衛門方_江参候様申通候ニ付、同人方_江参候所、出勤勘定小頭油布庄左衛門相詰候、小人小頭も参候。申渡相濟候所_{ニ而}、拙者關所奉行ニ付久右衛門方_江参候。立合外崎忠三郎と致同道候。夫々拙者致見届、一々品物書付立合致せ、印形翌朝勘定所_江差出候。尤久右衛門親類森田屋沖右衛門_江右諸道具願置候ニ付、預り取候_而是も勘定所へ差出候。立合_江も右品書付相渡候事。

文化九_{壬申}年(一八一二)三月、弟豊之進之儀菊池八弥方_江呼取、弟二。

文化十二_{乙亥}年(一八一五)二月廿七日爰元出立、⁽⁴⁾三_{馬屋之支度金式両}厩御飯屋へ三月朔日_江詰合、侍大将物頭笹角之丞、檢使佐々木孫兵衛、兵士代戸田茂太夫、⁽⁵⁾田村新八、者奉行福真才助、黒瀧元弥、大筒方阿部門弥、斎藤久司、久我民弥、須藤藤藏、廣田乙次郎、御徒目付神義弥、勘定小頭長尾定之丞、勘定人三上又吉、相坂六郎右衛門、外大組諸手小人共惣人数六十四人詰合致候。八月廿八日屋形様御飯屋御見分御発足之筈之所御延引ニ相成申候。惣人数同所引拂九月十五日、御番立同十七日。

文政^(元)戊寅年(一八一八)十一月朔日、三廐詰被仰付候旨御用番唐牛三左衛門殿被仰付候。尤詰合之支度金被下置候。

文政二卯年(一八一九)三月廿七日爰元出立、三廐表へ罷越申候。尤四日路^(ニ)而罷越申候。物頭ハ吉村場左衛門、檢使鶴川官吉、者奉行相馬作左衛門、小林半左衛門、平士代大郷七十、戸田茂太夫、大筒方兩人。

表屋敷正米九升壹合壹勺上納之内、四升七合ハ喜ハ^(ニ)上納被致候。

相詰九月三日六日卜御引拂被仰付候。拙者御番立^(ニ)而

(以下一行読解不能)

文政^(辛巳)四癸卯年(一八二二)五月、屋形様侍從之御昇進^(六)付御家中一統御能見分、赤飯頂戴、以下袴役御能見分、無袴之

者赤袴^(飯)斗。

文政^(辛巳)五壬午年(一八二三)三月六日、師範一統平服^(ニ)而御能見分被仰付候。其節新田奉行迄同様被仰付候。

文政^(辛巳)四卯年(一八二二)四月御下着之節、南部之浪人鉄砲^(ニ)而御通りを待受之由。仙臺者南部^(七)住居致ながら此方へ

住遣ニ付大騒致候。其節秋田久保田迄御手廻御廻、足輕迄鉄砲持御迎参、大間越通りを御廻リ無難^(ニ)而御着城。翌年四月廿一日御発駕之節、両組^(ニ)而拾人御供足輕、拾匁小筒拾挺持せ御登相成候事。

文政^(五)壬午年(一八二三)大旱魃、四月廿三日雨降候節、川水も少々出候。夫ハ旱魃^(ニ)而五月三日少雨否ヤ天氣、同月九日少し雨否ヤ天氣、夫ハ六月十四日迄一切雨降不申候付大旱魃相成、諸方^(江)御祈禱被仰付候。田畑相焼かれ候処間々有之候。十四日夜四ツ時過ハ七ツ頃迄雨降候ハ壹寸斗漸く水氣御座候。

文政七^{甲申}年（一八二四）二月、武藝之義又々嚴敷被仰付、年四度御家老衆見分致候様被仰付候。右ニ付、拙者義諸方^{（加勢）}かせ御免年寄頭足立又右衛門殿伺差出候処、御聞届相濟候。

同年侍從様御隱居被遊候。翌年文政八^酉年（一八二五）四月御入部、六月御祝之御能、御家中^并以下族町在之御用立之面一統三日^{ニ而}相濟。八月十五日御祭礼有之、町中^右町印山車御差出、御家中^右奉之、馬祭両組^{ニ而}五十疋、七月不正^{ニ而}不宜候処、七夕祭十二日迄有之。

屋形様御長^{龜甲町}^右御覽、五十石町通、夜八ツ時至ねふた通り、仕舞明六ツ時^ニ相成。

文政九^戌年（一八二六）四月御発駕、御立昼七ツ時碇ケ関夜九ツ時過之由。^{（8）}夫^右段々御道中夜九ツ時八時七時頃斗^ニ付、御供一統難義他領故諸家之御家中扱方迷惑、人馬大困り、不^右事諫言高倉相模申上候得共御聞濟無之及三度、無據相模儀切腹致候。一統感涙を流し候。道中御他領^右江戸表へ注進之由。然共漸々首尾を相續、案心致候。

同年十一月廿三日、^{（9）}屋形様御婚禮御整首尾好相濟。尤公儀之御姫様やし姫様と申候。^{（田）}大安様之御養女と相成、此方様江興入之御立寄之上御出之由。

一、侍從様右京太夫と御改被遊候^ニ付、太夫名一統御差留、仍^而行左衛門と文政九^戌年（一八二六）三月名改願之通被仰付候。^{（11）}

一、文政九^{丙戌}年（一八二六）雪薄、翌年亥（一八二七）二月迄尅寸も雪屋ね^右おろし不申、二月^右土場^右申、漸々三

四寸も降り候日御座候得共、おろし雪一統無御座候。

一、正月廿日本丁式目近江屋焼失。

一、寛政之変に御物入多奉恐入候に付、為冥加御家中知行御給分之内、(文政十年)当亥年(一八二七)に三ヶ年之内、式步通に差上度願之趣達御聴候處、御満足思召候。一同難波之処深被遊御厭候得共、御時合柄不被為得心事候に付、御国式步江戸壹步差上候儀御聞届被仰出候。割合之儀者、追而勘定奉行に可申達候。(72)

二月右之通被仰下候。御用番御用人双方へ廻に文政十亥年三月に步引初ル。

一、文政九成年に翌十寅(一八二七)雪壹度も^(マ)不^(マ)おろさず、彼岸廿一日に之処、十九日^(マ)に^(マ)當年不勝續^(マ)に^(マ)而^(マ)昨年不宜候得共、秋米出初式十五匁、十一月に相成式十匁に相成候。昨年半作に御座候得共、米直段下直^(マ)に^(マ)而^(マ)在方難義之年に御座候。

相濟候處、^(戸田)倅八十八江御菓子頂戴被仰付候、御礼之儀者則座に御目付江申上候而六ツ半時歸宅御菓子門弟并親類江も相廻申候。
(文政十年の分がはぐれてゐる。この文
言は、文政十年の続きと思われる。)

一、文政十一戊子年(一八二八)五月四日、二男八十八嫡子願⁽⁴³⁾差出候處、五月朔日願之通被仰付御礼廻御用番へ。

一、文政十二丑年(一八二九)六月十五日御能見物被仰付候。五ツ時に退出。同年八月十五日於三ノ御丸御屋形に角力見分被仰付候。尤夜五ツ時退出。

一、同年十二月三日、高源院様御法事、首尾好相濟候。然而（第二代藩主信牧）禪宗八十ヶ年迄大寺之御能見物被仰付、其節も師範一統見物被仰付候。朝五ツ時（初）而夜四ツ半ニ相濟、御礼廻なし、御目付斗。

一、文政十三（庚寅年）（一八三〇）三月朔日、倅八十八御目見相濟御礼廻不殘。

一、同年五月廿日相内太田村末木杣取方懸合被仰付。尤外崎庄兵衛組合八月七日同所（江）罷下り、翌年八月十五日同所罷上候。尤六月三日相内村土場（江）材木到着致候処、五拾年（ニ）も無覺洪水（ニ）而扱重候節後れニ相成候。

一、文政十三（寅年）（一八三〇）八月十六日、大洪水（ニ）而下町一統此方屋敷（江）相馬木流木（あいまぎ）式十口程水（ニ）而上ル。板敷の上六寸

斗上り、其水泥水なり。袋宮寺前へ大浪出ル。

洪水之節馬屋丁五尺余水上ル。其節

屋形様御覽（ニ）而御懸物御投候処水早速ひき候由。

駒越町、五拾（石）町、新丁、六七軒流失、其後一統流失之面々（江）御米壺石ツ、被下置候。家流失之面々（江）式俵ツ、被下置、其上御小納戸金相賃被仰付候。拙者共は七拾四匁相賃被仰付候。尤拾ヶ年（ニ）御差引候相成。

一、天保四癸巳年（一八三三）不作。（15）前年大雪（ニ）而冬至之入候目前ニ雨降候処、夫（ハ）五十日余雨一切不降、大キ寒候に付、

世之人明年豊作と相心得候処、段々時節後れニ相成、巳ノ年ハ凶年同様之大ふ作（ニ）而、郡内一統皆引同様、漸く拾（ニ）半位之上納ニ相成申候。依之御家中一統（并）掃除小人迄四合扶持ニ相成申候。尤九月廿一日渡り候。

右之通ニ相成申候掃除小人（ニ）而も、養育願差出候部ハ式合扶持ニ被仰付候。町在賣米大步相改、札（ニ）而賣所相定壺人

ニ付式合ツ、賣出シ、自分相對ニ而買候分は百式拾目壹升直段候。大豆八十匁（そば）蕎麥五十匁候。

当年不作故御小納戸金御家中一統御差引御免ニ被仰付候。拙者儀兩度ニ而三百匁余相貸、十四ヶ年御差引相成、残りハ一統御免ニ付御礼廻御用番へ致候。

同十月枉式千五百枚、木舞百本御貸渡被仰付候。

同十一月四合ニ付難義之旨ニ而禄三百石以下一統ニ為受質御錢被下置、手形御用達申ト勘定所へ濟手形ニ而五十目山城屋之処へ片谷之者共参候而濟手形受取片谷も質座質座へ預手形差出候間、向々も受取申候。尤百石ニ付式百匁之積三拾匁迄七拾匁之積。尤冬物斗之筈ニ而何品何品ト申義頭方へ書出勘定所へ廻シ、夫々銘々手形差出申候。不足分ハ勝手次第、多クハ不相成候。一切質無之候者御手当被下置候申唱候。

一、当九月も町在大物騒ニ相成候。御難渋之者同し碇ヶ関も秋田表へ他国之者式三千人大馬越（間）口も参候由。右ニ付秋田様此表へ兩度迄御届ニ預り半分通し、余ハ出戻り。尤道中ニ而死亡之者も有之候由。先年五十年先卯年ハ大凶作ニ而御国ニ而ハ御納米一切無之候ニ付、死亡之者ハ在町者ニ拾万余、他国参り者共入テ如此ニ候由。当年ハ少々も御納米も有御囲米も有之、町在共杓（杓）之御備も十万俵余も有之候得共、郡奉行間山鉄五郎筆頭ニ而在方村々用意之米も一切差出不申候故、在方大騒、仍而他国も御届ニも相成候。然処（町）十一月相成御家老津輕多膳御呵ニ而七百石被召上、三百石被下置、屋形御取上相成、岡之屋敷被下置、四坪之処座敷ろう、御用人野呂工藤座敷ろう、屋敷御取上三拾石ツ、被下置候。毛内も三百石之処三拾石ト相成同段、小笠原式百石之処永御暇ニ而入ろう、同人御留守居組頭格ニ而役人之同例ニ入ル。不思議ニ御座候。殊手鍵ニ而参候由。勘定奉行奈良庄司同太門惣上候。身上被召上入ろう。郡奉行間山鉄五郎同断、高屋小平太御祐筆格も大組足輕へ、御役下御国産小頭高屋□兵衛入ろう、須郷念弥富田町御茶屋懸り御馬廻格も諸

手足輕、勘定小頭一人、勘定人一人長柄之者へ御役下、早道之者佐藤文弥入ろう、同佐々木庄左衛門長柄之者へ御役下之處被仰渡候。無覺之旨申上候処同人入ろう、倅并二男揚屋入ニ相成候。福田金左衛門御呵之餘人江出入之旨ニ而御留守居組方諸手足輕へ御役下、同人倅早道見習之處、親金左衛門へ御預ケ、棟方弥五兵衛御呵之尋人へ出入之旨ニ而大納戸方以上支配江御役下、御国産方石岡太左衛門御役下、郡所小頭一人長之者へ御役下、御家老御用人御役下ニ而如斯相成候ニ付、笠原近江御用人森岡金吾、溝江傳左衛門、唐牛三左衛門、須藤半兵衛、木村奎之助御用人被仰付候。

騷も沢山、御役替も沢山御座候。珍敷役替ハ勘定小頭江御馬廻漸相成、本ハ廻シ小人方被取立、七拾石ニ相成、御使番格勘定奉行成ル竹内市左衛門なり。以上支配通、用番組方式人ツ、御留守居中役ト被仰付。蟹田町奉行次順江被仰付、此節御役替ト騷ト昼夜之内ニ御座候。御役替も百五十人程御座候内、笠原之出入半分余之由風聞ニ御座候。番頭格、御祐筆、学校懸岩田成藏三両式人扶持ニなり、追込之上倅へ以下支配、同人本ハ表坊主方老代之内上ル、一戸惣兵衛番頭方同断ニ而倅へ三両式人扶持、珍田祐之助勘定奉行方三拾石なり。以下支配町奉行一人御留守居組へ對馬傳藏、御目付石山喜兵衛同断、御代官清藤佐兵衛、築館追込之上倅へ以下支配、其外善悪二道難筆紙候。十一月大道寺御家老ニ而江戸登森岡金吾大坂登、十一月廿八日ニ又々笠原近江江戸登。

一、当九月方四合扶持ニ被仰付候ニ付、月並出仕御免。尤年頭、五節句斗式百石ニ番頭以上者月並有、御目見以上八年頭斗。

一、当年も風病流行ニ而在町共難義之者沢山。尚又在町式合米之賣米ニ御座候共、式拾人役手作之者ハ皆引多御座候故、淺安ク相見得候。小者之分ハ死亡之者可有御座候。在々大場へ小屋懸之上、粥を焚出候而小者へあとふ也。^(与)

一、男調当人并倅二男三男名前、年齢書出候様被仰付候ニ付差出、由緒書も一統差出申候。

小笠原良八、間山鉄五郎、奈良庄司、十一月廿三日入ろう致候処、同月廿六日ニろう前ニ而打首ニ相成申候。不思議之至候。

一、天保五年(二八三四)七月中旬に屋形様鰯ヶ沢に深浦邊迄御廻郷。夫に十三、小泊、三馬屋、岩崎御廻郷、前後三十日程人夫一人米壹升ツ、被下置候由。夫に付小者ハ高直之米ニ難義之處、一凌致候由。^(つとしのき)中家以上之部者足銭割合ニ一入困入候由。青森へ前後三度御下濱被遊候而御登之時季後れ相成、十月三日之御発駕相成候処、御家中徒士二ノ丸へ相詰候処、暮六ツ時ニ相成候得共御立無御座、翌日又々相詰候処、是又暮六ツ時ニ漸御立被遊候処、濱町ニ御泊リ被遊、翌朝御簾奉行之諸士御藏所へ朝五ツ時ニ相詰候様被仰付候付、何れも同所へ相詰候処、御藏前へむし〇を発御暇乞之御逢被仰付候時刻、晚七ツ時過ニ御座候。夫に鰯ヶ沢迄御出、同所ニ而御逗留、其日に雪降申候付、何れも難義之由。不作之翌年ニ御座候得共、御本当之御供立道中米高直ニ付五千兩斗之御登金之由。昔に覺無御座候。前之者御発駕金千貳百兩斗御座候得ハ沢山之由。近年過分之御物入増ニ相成候故、金銭手切一入一統困入申候。笠原近江殿御家老ニ被仰付候処、諸事同人了簡次第、同人方へ出入之斗御定ニ不拘御請替被仰付候事ニ候。

同年十二月公儀より思召候依而侍從ニ御位上被仰付候。一段之御祝御座候得共、金諸拂品ニ困入申候。

一、秋田表当年死亡之者拾万人程御座候故、田畑荒ニ相成候場所多ク御座候故、同秋迄米壹升銭百二十三文之由。寔ニ秋田表者昔に覺無御座候場合候。近年諸国一統難儀之様子ニ相成申候。是も世之末ニ相成候ニ付、人々美物〇〇数好ミ難

義相成申候。然共上^ら一統右之振舞相成申候。

天保六^未年(一八三五)当春屋形様御発駕之處、御足痛之御申立^ニ而御下り不被遊候^而、黒石殿御名代^ニ而六月十日頃黒石表へ御着之由。御足痛と申義は御金御才覚間^ニ合不申候故御発駕延々^ニ相成、何れ秋頃御下り之御構^ニ而御迎登之面々江戸表ニ相詰罷有申候。当六月十八日^ら八幡宮ニ五代尊様手立社人十七人御祈禱被仰付候。宇賀神祭ト咄合仕候。

去年(一八三四)上作^ニ付、当米ノ年米直段御買上式十六匁^ニ相成申候處、同六月^ら御買上二十四匁^ニ引下り申候。不熟後過分之下直故困入申候。然^ニ諸色一統高直金錢不通用借貸なし。如何^ニも難義之下米之義は拾八匁位^ら賣買、然^ニ五合酒直段式匁式勺^ニ御座候。元來御下シ米五十五匁^ニ惣酒屋中へ割付御拂被仰付候。尤一軒^ニ付式百匁と相当り申候由。然^ニ此節式十匁代^ニ酒屋^ニ相調候^而造酒屋候得共御拂米之直段^ニ相拘り過分高直之酒^ニ御座候。在方之者共壹升之酒相調候得ハ、正米五升拂不申候得ハ、酒調惣故手造之者多ク御座候^而酒屋^ニ而賣酒不足之由。錢廻り無御座候故勝手次第^ニ賣候者も御座候。

一、屋形様下り年^ニ御座候得共、御足痛ト御申立、当年は御発駕不被遊候。御迎登^度江戸表^ら戻り入候。八月ノ御迎登被仰付江戸迄相詰候處、又々十一月^ニ至り空數^{むなしく}相帰申候。必竟極御難渋之御場合相成候故、御発駕金差支候處^ら如斯^ニ相成申候。

一、当年も不熟作^ニ而惣檢見^ニ相成候處、三步六分位之御納藏国分之御年貢不足^ニ付、当十月^ら俵子三十石金五兩三步引、四十石^ら六兩三步五分引、五十石六十石金十兩四步引、百石以上四步五分引、貳百石以上五步引、五百石以上五步五分引、千石以上六步引被仰付候。諸色高直米直段式十四五匁、尤御家中御買上代米壹石式十四五匁位申候。御差引者三十匁直段^ニ御座候。造酒屋御差留被仰付、御用達之者御用無滯差上候者斗。都合十一軒被仰付候。米壹石六十匁直段^ニ造酒

屋へ千俵ツ、御借付被仰付。右之直段ヲ以酒直段被仰付候由、前代不思議之事ニ御座候。

一、当年御家老衆江戸詰三人、西館、笠原、森岡ニ御座候。諸役人度々罷登り、高倉井津輕因幡殿十月御登路金(一ツしお)一入困入候由。仍而御家中御買上代給半渡十一月无滞相渡候得共、七月より十月迄之处ハ五合相渡不申候。預手形差上候様被仰付候故、御用達之預手形支配頭へ取速差出候事。(急)

天保七丙申年（一八三六）

江戸登之御家老衆不残滞留、同年不熟作ニ而御勤中忝歩七八りん之作屯ニ付、御収蔵七万俵位、尤秋刈取差留罷有候処、時節後ニ相成候ニ付雪降る稲作殊外悪敷相成候故、収蔵未熟米又ハ熟米等致候而上納致候ニ付、存之外悪米壱石搗候得ハ品寄八九升之へリニ相成申候。尤御家中四合扶持渡リニ被仰付候。十一月以下之部ハ当人斗四合扶持、家内ハ三合扶持ニ相成候故、何れ難義候。尚又茶金之義、巳ノ年同様渡方被仰付候筈被仰付候得共、御手繰行届不申付、茶金ハ半渡候。九月之御買上、錢ハ忝錢不渡如何ニ難渋之場合、米直段は壱石上米百五六匁、右以下九拾匁位ニ御座候様、十二月より少々下直ニ相成、七八拾匁位ニ相成申候。在方御近在之分ハ死亡之者も無御座候得共、下在之部ハ他参并死亡之者も御座候。他国之者壱万人も可有之御座候。馬を喰候村方も余程御座候。大道寺女蕃殿御家老ニ而往還之路金持参之上、九月六日江戸表江御出立之处、十月十七日江戸表ニ而病死、右ニ付国元ニは御家老忝人もなし。御取立者之御用人須藤半兵衛、宇佐美平左衛門、右等ニ而不法之元咎斗申致候故、一入困入申候。笠原近江之組下悪徒之者ニ御座候。十二月廿四日ニ笠原ハ一間所之蟄居、倅(七)知規(近江)三百石被下置候得共早今御沙汰可有之御座候噂ニ御座候。右手下之面々合入御座候得共、此度不得当事之者斗蟄居被仰付候得共、是迄之本領無相違倅共へ被下置候。寔不思議之事ニ御座候。各者速々書印不申候へ共奉行之分ハ齋藤宮内、竹内茂左衛門、倉光市次郎、祐筆等も蟄居候得共、本領は其儘ニ御座候。

何れ追々断而御沙汰可有杯と咄合ニ御座候。大行院、弁天之太夫、小野若狭此三人等原定入之者候ニ付、何れも御詮義相拘り申候ニ付落着次第、又々同類之族出来可申候。此之度之義は替人も無御座候故、頓而新役被仰付候ハ、笠原之黨一々可申相糺候。

十二月六日御家中并諸組以下迄質色願之通御沙汰ニ相成候。漸千石高ニ壹目、百石者四百五十匁、三十石者百七十匁、以下之三十石者百匁、掃除小人四十匁、右割合ニ而質色被仰付候。尤質屋ノ江壹枚手形ニ而裏印ニ而質屋共方受取申候。五十年前外ノ年凶作之節三十石之部は一統三百匁ニ御座候ニ付、先之形を願候得共、役人共質屋方賄格を多取掠候故如此。不熟作ニ付國中酒屋一軒も無之候故、酒吞之儀不成候ニ付寒氣ニ困入申候。

天保八酉年(一八三七)三月、町在江御用金壹万両余被仰付候。御迎之登三月八日方段々十一日迄出立、御金貳千両登。

天保七申年(一八三六)八月、甲州(甲州大保一巻)ニ而大騷、貳千人斗相集候中江浪人拾人斗入交り、兵具を堅メ家潰等致候へ共漸々納り、頭取之者小々囚人ニ相成候由。

天保八酉年(一八三七)三月十九日、大坂表ニ大騷(打ちこわし騷動)御座候。(大塩平八郎の乱)

天保八酉年(一八三七)昨年六歩位ニ而十月渡候ハ御家中本渡被仰付候。同年九月迄四合扶持渡候。茶錢ハ七月迄ニ貳ヶ月分ハ渡不申候。八月ハ茶錢三増被仰付候付、一統大支候処、漸半渡相渡候。是迄之滞之分ハ永御取延と被仰付不相渡候。

一、八月御郡内一統質色シ被仰付候。取引之部百目以上ハ貳拾ケ年賦、右以下ハ拾年賦ト被仰付候。

一、去十二月之質色之錢高当十月渡ハ拾ケ年賦御差引被仰付候。御馬廻之隠居中勝衛ト申者御世帯向存念差出候所、御

聞届被仰付、御元^ノト新役被差立、三之御丸御座敷ニ役所相立。勘定人^并小頭拾人、小使五十人、尤小使は^一兩式人扶持刀帶ニ致候。尚又勘定人も御元方分ハ元来之勘定人^ハ五俵増ニ御座候。右存念之訳、宮崎八十吉申者之名前ニ而預札^一壹歩^ハ五分迄三万兩程書出通用致せ候。十月^ハ五穀共御買^ノ被差立、御郡内四拾八ヶ所^江役人立所^江三人^并下扱^一人役人之分は四人扶持ニ茶錢拾匁被下候而夫々買^ノ相立候得共、在方ニ而賣人多無御座候。直段は米三拾目相定候。大豆拾七匁蕎麦拾五匁相立候得共、賣拂は多無御座候ニ付、十二月廿日頃ニ至候。役人共御引拂ニ相成候。尤町在^江米^一壹升なる共相對ニ而賣買致候者於有之は、家財關所被仰付候等御觸出被仰付、人^一人^ニ付五合扶持卜定、日々通帳ニ而御藏米御拂ニ御座候ニ付、町家者共案心之所、十二月末相成候所、買^ノ役引上候。五穀相對賣勝手次第ト被仰付候而御拂米町家中^ハ差留、小者斗ニ^一人^ニ付白米壹合五匁札米賣拂申候。尤^一升代式匁元來相對賣法度ニ付、此節ニ至リ大豆小豆共一切町人共商賣不致候ニ付聞合申候。預札出候処、諸色高直相成事言語同断。木綿ノ類^并菜種共拂兼筆墨紙同様、明油一切無之神佛へも捧る事不成候。是迄^一匁之品物ハ五匁位、肴ハ塩引^一本上之処三十匁ト申事ニ候。預札両替一切不致候ニ付不通用申分なし。御家中本渡候得共、五合扶持御渡し殘米は三十三匁位申候。御買上札ニ而御渡ニ付大難義言語同断ニ御座候。酒は少しツゞ造酒致候へ共、一時斗賣拂、跡は封印ニ致置候。

天保九^{戊戌}年（一八三八）四月^ハ宮崎八十吉預札当分御止メ被仰付候。

一、公儀御世代リニ付、御巡見使五月廿一日弘前表^江至候は、同廿二日出立、同廿七日三馬屋^ハ松前^江出帆。

一、五月十一日御昇進之為御祝儀御祝頂戴御能見物被仰付候。同十五日武藝出精ニ付倅八十八御酒御吸物御祝頂戴御能見物被仰付候。十八日より三日之内御能御座候而町在之者御用ニ相立候者共一統御能見物被仰付候得共、夜中斗ニ付翌日八ツ時頃御能相懸リ申候。拙者義十一日之見物ニ而朝五ツ時出勤、八ツ時頃御能初リ夜五ツ時は逃^而退出致候。翌日八ツ

時迄も相懸候ニ付、何れも困入申候。屋形様夜分斗御好ニ而何れ御出ニ而も夜分御座候。

一、四月十七日江戸(三月江戸城西の丸火災)二之御殿焼失、閏四月十七日江戸大火事。

一、海岸通并沢目ニ而単多ク出候処ハ式三万も可有之哉噲ニ御座候。

一、屋形様芝居御好ニ而津輕頼母殿大道寺江御成之節芝居之役者御取寄、翌四ツ時過何れ御成ニ而御楽(たのしみ)、理外之事斗御好御座候故不作騒。^四

一、西ノ十月渡リ(天保八年)本渡被仰付候処、買不都合ニ相成、田中聡勝(勝衛)川原左平同人倅ニ半知五十石、御家中渡候米并御巡見使ニ付米不足ニ相成、在々江先納申付候。尤老反歩ニ付五升積割付申候。

一、四月渡御家中渡方寄百石ニ付四歩五厘御借上被仰付、三十石高ニ而式歩五厘、老入前五合扶持ト相置、残米御買上相成、在代錢ハ一切御渡不相成候付一統大難義ニ付、粥三時共喰申候。在方老乞喰之者多出申候。当年昨年不熟ニ而式歩七厘上納高ニ付、御手繰等も一切出来不申候。

一、御屋形様十月十五日爰元御発駕被仰付候ニ付、人馬并御供御家中則日相詰候処、今よりと相待せ翌十六日七ツ時ニ御出馬ニ御座候ニ付、一統大難義、碇ケ関江夜七ツ頃御着ニ相成候。

(天保九年)当年九月酒屋共拾五俵出候者ニ造酒被成付候。尤老升ニ付四匁五厘申候。

十一月米直段白米百八匁、老升ニ付式匁七厘之賣候。(玄)現米老升式匁四厘、当年ハ両濱共鱈御買上相成、江戸表江相登候ニ付、寒ニ入迄弘前ニ而鱈喰候義不相成候。明油拂底ニ而老合老匁御座候。諸色一統高直故極難之年御座候。

十一月四日夜在府丁出火、工藤宮五郎火元ニ而南隣類焼、両隣御茶畑、其夜老軒焼失、代官丁老軒焼失、一夜三ヶ所、外ニも式ヶ所投火候由。

一、天保十^{己亥}年(一八三九)正月三日夜笹森丁焼失。二月□□新町新五左衛門焼失、春日町壹軒焼失、三月誓願寺焼失、本源寺焼失、四月百沢寺焼失、和徳足輕町四軒、福寿院四月廿二日焼失、尤半焼、片□丁木村半焼、土手町貳拾七軒焼失、四月二日青森町八拾軒余、尤門徒寺^ヲ出火^ニ而寺町、米町、横町三通、飛鳥町も当二月焼失、其外在々浦々出火、弘前も毎夜四五ヶ所之投火、木小屋焼候族難義致候。在方^非彼人千人斗、乞食小屋へ三ヶ所小屋之上、^非彼人共壹合五勺之積、五勺粥相出候。×死亡之者弘前^ニ而六七百人、在々浦々言語同断。今泉村□七拾余之村拾軒斗、生残り新田通大跡右之姿^ニ御座候。

(五)
三月屋形様十七日^(六)ニ御暇被仰付、早速御下り可被遊候所、御金不都合^ニ而御病氣^ニ被為成候。然所是迄嫡人共斗諸役人相成候^而国政不正候^而御行状ハ言語同断^ニ被為遊候故、公儀^ヲ御法度ヲ遂候^而御国替半知^ニも可相成候様遇之咄合^ニ付、御家中一統心痛致候。然所漸々役人共取繕候^而田安様之御願^ニ而御隠居相成、黒石之左近將監様御家督^ニ相替候様御内意被仰付候。^(七)是上蟄居致候。多膳殿工藤傳兵衛殿御免^ニ而夫々元役^ニ相成、江戸表へ出立、其外御側役之面々出立、森岡殿已年(一八三三)不作故御米才覚^ニ大坂へ参候^而御手配被成候^而末年(一八三五)江戸江参候所、又々不熟作^ニ而御返弁難相成候故左様言訳大坂へ参候所、又々不作續^ニ御座候得共、上様^ニ而大者^ニ而女共斗多集候^而定芝居被遊候姿故、国元出立^ヲ頼^而七ヶ年^ニ相成申候。当年ハ秋迄之内^ニ下り可相成候。江戸表屋鋪ハ勤番并定府之族も月々渡米四合定^ニ而壹日^ニ五勺も相渡不申故、足輕者は町家へ奉公^ニ出候も有之、小人杯ハ乞食^ニ出候^而死亡之者も御座候。寔言語同断之姿^ニ御座候。

一、御国^ニ而百沢^ニ而^(天保九)去戌年(一八三八)当二月迄御出□三度御座候。小懸も同様。

七月三日渡り、壱人分式合五勺渡相成、同十五日と三合積ニ而日々相渡候故、人使ニ大困り、米屋付候面々杯ハ前日と參夜七ツ過漸々受取族も御座候。右之訳ハ御米不都合ニ付米屋ニ手配致候而相渡候旨被仰付候付不得止事、米屋ニ而自分才覚之上相渡候義故、惡米受取候族も有之粉小な斗受取候族有之、盆中随分一向心痛□□ニ御座候。

稲作之儀は七月七日米伏御座候得共、六月廿一日早せ出穂ニ付米伏ニ到り不残出揃ニ相成、折々雨降り申候得共暑氣も落不申、五月廿日頃雨天續、同廿八日と六月七日迄日々雨天、同八月と天氣ニ相成候處、同廿四日迄晴天之處、昼九ツ時頃と雨降候處、七月八日と雨續、終日不降日は是迄之内三日斗も無御座候。然共暑氣落不申候ニ付、稲作早散取申候。此節賣米白ニ而壱升式匁。

一、御氣入之御附側御加増、勤料等被下置候様三十日之内ニ御□□ニ被仰付候。

一、当年相應之熟作ニ相成候へ共、麁田多、尚又虫付場所所有之候故、御收藏四步七八厘之由。然共四合扶持相返段取之歩引渡被仰付候。仮渡も無御座候。四拾俵と三步五厘引、無據御場合御座候。

一、拙者義十月廿四日、平館湊目付金定八病氣ニ相成、同人組合對馬九郎左衛門可罷下候處、病氣相成、拙者儀当分代り被仰付候而平館湊へ罷下り申候。尤目鹿沢村泊り新城村昼ニ而平館村へ七ツ過ニ到着、金定八と十一月朔日交代致候。

一、四人扶持之内三步五厘引ニ而三斗九升相渡り申候。御手当錢無御座候。弘前ニ而酒壺匁五分、大濱ニ而壺匁六分ニ御座候へ共、平館村ニ而賣酒式匁八分、己年天保四(一八三二)と不作續ニ而海崖潰家多御座候。内真部村ハ六十軒斗八九軒と無之候。蟹田と余り目立不申候へ共、相應之潰家候。

一、平館、根岸両村ニ而百八軒之處、巳ノ年天保四(一八三三)之不熟作と死者多御座候而、亥ノ年天保七(一八三九)迄七拾五六軒ニ相成申候。

一、平館湊御馬廻之勤所ニ御座候得共、一切御役徳得と申者無御座候故、難義之場所ニ御座候。生肴喰候斗樂候。拙者義当

分代り相勤候処、四人扶持之内三步五引之渡方故、壹ケ月米三斗九升ならして相渡不申候。御持錢壹人手附被仰付候通罷有之ニ付、右手附ニ食炊を致させ申候故、月々飯料手附ニ米壹斗為出、拙者米壹斗九升差出候。塩味噌并焚炭、明油無御座候。筆墨紙煙草酒代ニは難渋致候へ共、生肴之部は不自由無御座候。御省略ニ付三ケ月詰被仰付、十一月朔日お正月中詰合、二月朔日致交代候害之処、今定八湊目付御免願に付、右代り願立ニ付、漸二月十四日湊代り合致候而、蟹田村泊り、翌日出立之処、四ツ時風雪強ク、阿弥陀川ニ而人馬出不申故、無撓同村ニ泊り、翌日油川泊り、翌日天氣ニ付宿先迄通しニ致候。

一、三月御家中渡り米御不都合ニ付、又々増歩引被仰付候。千石高ニ而七步五厘之御借上ニ相成候故、一統難渋言語同断御座候。

一、(第十一代藩主信承)屋形様四月廿三日御発足之処、御金御不都合故江戸表ニ而御出勤相成兼、漸十二月朔日ニ御出勤ニ相成候。当年は存之外昨年も豊作ニ付、右米松前表へ相拂候而御金御登せ相成候。在方出米十八九匁致候。右ニ付黒米壹升四分五厘、酒直段壹升壹匁四分、半紙壹帳八分、明油壹合八分、米直段不違当諸色高直故大難義御座候。

一、天保十二辛丑年（一八四一）正月入候而薄雪之様相見得候処、六日お日々雪降り厚雪相成候。正月十三日節分ニ御座候。

一、(第十一代藩主順承)屋形様当四月御国元へ御着城被遊候得共、御勝手向御不都合故祝も無御座候。当年昨年も相應ニ候へ共、去年お壹人組ニ付式斗程も上り無之候由噂候へ共、米直段下直ニ而新米壹石拾六匁之由。諸色不残高直、御家中歩引ニ而千石高七歩通之歩引故極難之場合候。

当八月廿三日宇和野御繰立被仰付、拙者義五長被仰付候。御馬廻組頭ハ須藤要人殿、番頭野呂新蔵、樋口官八義も拙

者扱方人ニ佐藤八郎太、奥崎勇介、永田熊吉、菊池文吉郎、右扱頭ニ相成候。屋形様高覧ニ而首尾好相濟、行軍ニ而大手前ニ而左ノ三要人殿御宅迄行軍ニ而参、退出致候。

一、九月三日板柳村御藏奉行被仰付候。組合式番組豐嶋了司、立合成田幾太郎ニ御座候。

一、十月九日板柳御藏ニ相居七ツ半頃到着之處、初御收納五拾石程上納ニ付、蠟燭ニ而御收納付候而長屋へ入候處、樽頭之馳走ニ硯蓋沓面付、肴頭九之色吸物本膳ニ御座候。翌朝も本膳ニ而残肴ニ而沓盃、夫方日々御藏へ相詰候。御收納式万七千百五拾石三斗三升三合三勺相当り申候。近年珍敷納方之由咄合ニ御座候。十二月十日内勘定致候而山六ツ割配分致候處、沓人前七拾石三斗三升三合三勺相当り申候。夫方翌正月迄配当三石三斗四升八合三勺出之、配当三ツ割三石式斗余ニ御座候。御扶持米之儀は歩引ニ付三斗六升ならして相渡不申候、式石三斗式升ならして残不申候。

去十二月米直段三分下直ニ而出来故沓五五分板柳村ニ渡候。右ニ付御收納手形漸拾六匁拂申候。丑年(一八四一)ハ

(天保十二)

御收納手形式拾三匁五分迄賣拂候由。然ニ拾六匁ニ相拂候故、沓石ニ付七匁余之違候、存念通ニ行届不申候。殊ニ諸色高直ニ而半紙沓メ七拾匁買調申候。半紙も三メ式束調申候。月々早道之者御米様ニ参候付、其度々々半紙三帖ツ、差遣申候。十二月廿四日ニ青森御藏罷下被仰付候へ共、馬割不参、尚又極詰ニ相成候故、正月六日方出藏相定駄下致候へ共、如何も正月中は早蔽取不申候故、蔽敷論立三月廿四日迄ニ青森御藏へ皆下ニ相成候故、立合廿八日ニ上弘、組合豐嶋了司廿九日ニ上弘、拙者儀濱手形寄方ニ付沓人勤致居候而諸組村々濱手形滯候分論立、四月廿五日ニ上弘致候。最初立合成田幾太郎之處、同人長屋ニ而二月六日夜病死致候而宿先へ籠ニ而差遣候。同人宿先方弟并親類之者参候。右ニ付、代候工藤傳太郎参候處、順違之由ニ而二月九日ニ御藏へ参、三月十日ニ工藤元弥と代合致候。

一、天保十三壬寅年(一八四二)

去ル十一月金木御藏式ツ長屋^并御米三千石位焼失致候。右奉行高屋勇馬、長谷川小四郎、立合関三郎兵衛。

三月六日鯨ヶ沢御藏焼失壹万式千斗、尤右之内方能キ所五六千石申拾匁ニ拂候由。尤板藏式ツ候由。野火と乞喰小屋へ付、夫方御藏へ付候由。御藏奉行は一戸奥弥、助川市太郎、立合今其吉、谷崎源十郎ニ御座候。

一、屋形様四月十三日御国元御發駕被遊候。当三月嚴重ニ御省略被仰付候。御目見以上も夏ハ布羽織ト被仰付候。近年新規之者共多御取立相成候ニ付、御滅之咄合も御座候処、左はなく、勤料等被召上候族多御座候。笠原代式拾年以来雇小入方御取立ニ相成候八百人程有之候。²⁶⁾

一、三月十九日風雨^ニ而寒候処、岩木山下通迄雪降申候。十八九廿日迄涼風ニ付霜も降候等存候。当年早春之彼岸六日目卯之日、尚又六月朔日日食七歩半、申之五刻方初酉ノ四刻ニ終候。六ヶ數年ニ御座候処、七月十五日大雨^ニ而、夫方日々雨氣^ニ而山々少々ツ、雨降、雨荒連り之暑^ニ而不思儀ニ六歩余之作年ニ相成候。五穀共宜秋米十五匁酒直段壹合七文ニ相成候処、十二月廿九日方壹合八文相成候。此節米拾八匁位候。

一、天保十四^{癸卯}当年(一八四三)ハ旧冬至前四十日方雪降、日々荒、十二月六日頃ハ壹尺五寸位雪御座候処、夫方折々雨降、屋称石隱^(根)不申、年頭ハ所々土場ニ御座候。三日も雨續降致候ニ付、正月十六日袋宮寺宮へ参詣之節、所々道々かわき候処御座候。宮内雪無御座候。大工町五十石町草履地ニ相成、小兒草履遊致候。四五十年も無覺事ニ候。然共当年ハ春彼岸初日ニ卯之日、秋之彼岸六日目ニ卯之日、三水ニ五月之年ニ付大陰御座候。当秋作年は無覺束候。然所、正月廿日夜壹尺斗雪降り、夫方少々ツ、雪降草履地ニ相成仕と存候得ハ、雨ニ成雪ニ成、厚雪之年方不順^ニ而三月節句も足駄ニ候。弘前一統之草履道ハ三月十六七日ニ御座候。当年七^{庚申}ニ而御在国ニ候間少之類御座候。左なくハ凶作之年ニ相成候得共、相應之出作ニ付米直段廿式匁位御座候。

一、天保十五^{甲辰}年(一八四四)。当年ハ土用中ハ近年無覺大暑御座候へ共、土用後暑氣落候ニ付上作相成不申候へ共、米一相應出来候。七月十日碇ケ関山^ニ洪水^ニ而大鱉湯野川原流失式三軒ならして残り不申候ニ付、右川添水損沢山ニ相成候故、御取納も相欠候故、御家中歩引渡候も引直り不申候付、何れ難渋仕候。

当年弘化と年号相改り申候。

一、弘化二^{乙巳}年(一八四五)。春ノ彼岸二日目卯ノ日ニ付悪作之年ニ相当候ニ付、一統不^レ案心候得共、当表ハ半作余ニ相納申候。仙臺之國ハ悪作之由。凡^ニ而上方邊ハ不作之由。仍^ニ而江戸表^ニ而金匱岡^ニ五斗五升之由咄合候。当表は無檢見之場所も相應ニ有之候得共、平賀通作不宜候由。樋口村邊ハ無檢見候。当七月不止續故米直段四十匁匁位致候得共、九月ニ至リ三十五匁位候。

一、当年海岸悲^レ常被仰付候ニ付、御陣立上下三人^ニ而上野之陣立候。五月廿日御頭津輕元太郎殿出勤、御手廻組頭ハ足立殿ニ御座候。上^ニ而高覽被遊候。

一、津輕金藏儀同倅頼母殿森岡井棟方知行被召上、屋鋪御取上、頼母殿三十人扶持、森岡式十人扶持、棟方七人扶持被下置候外、田村、成田三吾百石被召上、親類へ忝間処^ニ而御預、何れも一間所ニ御座候。惣人数八人御座候。

弘化三^{丙午}年(一八四六)。

屋形様四月廿四日御發足被遊候。同月十七日上野^ニ而御陣立丸備^ニ而御馬廻組頭添田有方、御手廻組頭津輕右近殿、御旗本備御家老大道寺族之助殿、殿備白取殿被仰付候。尤三十騎備^ニ而惣人数千人斗^ニ御座候。甥之義も当年ハ松前彼常^ニ。

被仰付候。頭添田殿ニ付御陣立^{江上}上下三人ニ^而出勤致候事。^(宇和)内習ニ上野四月六日参候処寒敷難義候。十一日ニ上之御内習被仰付候^而、又々出勤致候処、御上之御出御延引ニ相成、御家老衆之御内習ニ^而大道寺殿并組頭物頭殿備共不残出勤、同十七日ニ天氣能御陣立首尾好相濟、見物人数万人ニ^而夥^(おびただしき)數人ニ御座候。朝七ツ時出勤晚七ツ過相戻、三ノ丸へ引上ケ、夫^と頭之宅へ参候^而銘々引上申候。⁽⁷⁾

四月廿四日御発駕、竹之助様五月廿六日爰元御出立被遊候^而廿四日振ニ^而江戸へ御着之由。

五月中旬本願寺^と使之者松前^と参、帰之節石川村領ニ^而新城村庄屋倅^(殺)雜害致候。右死人塩漬ニ致候^而石川村ニ^而昼夜番人附罷有之、新城之者被召捕候。廿二三日。

六月中旬尾上村之高屋之倅三十^(殺)名之野北村之用事ニ付罷上り居候処、帰之様之書状を取拵、境堰村之船場近所ニ^而打雜候^而、右死骸を首^と切付候由。三四日之内当人相知被召捕候。追子木村之茶屋之者境関村之渡守^(殺)式人被頼打雜候処、守之者^(殺)名^(殺)人ハ出奔之由。仍^而式人牢者相成申候。

一、六月御觸書之表、在勤之族六人扶持ハ三人御引上、四人扶持ハ式人扶持御引上、以下之者在勤之部扶持御引上被仰付候。尤御省略中と被仰付候。

弘化五^申年(一八四八)五月、夷国船五艘宇鉄村参候付、御馬廻組頭戸田清左衛門被仰付候。物頭も参候。廿日斗之内夷国帰、上弘致候。⁽²⁰⁾

松前御用ニ付当年上之御登無御座候。

一、三月十五日門弟高覽被仰付候ニ付出勤仕候処、及老年出勤之方被仰渡ニ而御菓子頂戴被仰付候。然所、同廿五日頭高倉盤次郎殿同道ニ而登城被仰付候処、御酒御吸物并御皿鉢二枚、金三百疋頂戴被仰付候。仍而古弟并末弟共呼寄相祝申候。

一、当八月ハ^(合田八十八)倅武藝出精ニ付金三百疋頂戴被仰付候。

一、当年ハ雪下ケ弘前中彦度もおろし不申候。五十石町坏ハ土場ニ御座候得共、二月ニ相成二三寸ツ、雪降申候ニ付、悪道ニ御座候。

一、酉ノ正月廿日百歳山之処、松へ松かさとする木ニなり、見物人多參候。尤男松の□□一圓松かさ尤少く御座候。

一、嘉永二酉年(一八四九)九月十四日御連各之御切紙到来、十五日四ツ時以前之処、金壹両勤料増被下置候。御手廻式番組ニ被仰付候。被仰渡之趣左ニ

戸田行左衛門儀老年迄数年来門弟教授方格別出精ニ付、金壹両勤料増被下置、御手廻式番組被仰付候。

九月十五日

添田有方殿

同道ニ而御家老御用番大道寺御礼廻、其外御用人御手廻組頭へハ番頭小館多助同道廻致候。随而門弟并親類廿八迄呼寄、同月廿八日大祝致候。

一、十月四日倅八十八月並出仕奉願候処、十一月朔日願之通被仰付候ニ付登城仕候。同四日御奉公見習願被仰付候処、十二月朔日御奉公見習御中小性^(マ)被仰付候。

嘉永三庚戌年（一八五〇）、屋形様御登、同年御検見三十八年余、御検見老万石斗候得共、諸国一統不作_ニ而江戸表百_ニ六合之由。御国表御買上米老石四十四匁五分、町米小賣白米老升老匁三分五厘、白米老石五拾四匁_ニ御座候。青森表ハ白米老升老匁八分之由。諸色一統高直_ニ御座候。

嘉永四_{辛亥}年（一八五二）四月廿四日、屋形様御着城昼九ツ過。

六月廿四日劔術高覧被仰付、暑氣_ニ付朝六ツ時杯ト被仰付出勤御座候。老年_ニ而劔術無怠慢御意_ニ而御菓子頂戴被仰付候。門弟中_江配分致差遣申候。

一、貴様倅八十八方_江菊池慶左衛門呼取女後妻縁談取數度伺之通被仰付候段申仕候。

七月七日

野宮伴左衛門殿

一、同年九月廿四日、屋形様御祝重_ニ候付御能被仰付候。尤廿三日_ハ御能_ニ而廿四日廿六七八九日と五日之内御能被仰付候所、金姫様御太病之御飛脚参候付、廿四日御能_{（後）}済跡三日ハ日延_ニ相成申候。拙者儀廿四日御能見物_ニ登城仕候処、金式百足之御目錄被下置、御料理頂戴被仰下候。尤当勤之七拾以上御目錄被下置、在町男女共八十歳以上七百文被下置候。

一、嘉永五_{壬子}年（一八五二）。

前年ハ冬至前_ハ雪降候得共、薄雪_ニ而罷有之候処、正月_ニ相成日々不勝_ニ而雪降、百年來竟無之、大厚雪_ニ而濱道馬往来差泊_{（上）}り申候。尤二月之閏月_ニ御座候時節後_ニ可相成候。

当年陰分之節_ニ而半作之様_ニ存候処、六月七月天氣_ニ相成候_ニ付、七步通之作年_ニ相成候。御検見人も拾二三年ならして不参候。然共米直段弘前表四拾三匁致候_ニ付、酒直段老升式匁式分_ニ被仰付候。

九月廿五日八幡宮御藏立合被仰付罷下候。八幡御藏御収納米七千六百三拾石貳斗八合、御収蔵米直段壹石ニ付五拾貳匁ニ御收納手形ニ而拂、尤五拾五匁六匁迄ニ拂候。御米も御座候ニ付、五ツ割ニ而四拾兩三步ト錢五拾七匁之配分、外ニ金壹兩ト拾三匁駄下切上り配分、金五兩ト錢四匁御用分之殘金配分、惣メ四拾六兩三步ト錢六拾四匁之配分、御蔵奉行ハ齋藤嘉三、小山儀三郎也。右之内ニ男仙太郎ニ貳兩貳歩、行蔵ニ貳歩、天ロニ貳兩、高連ヘ金壹兩、神明之祖母ニ壹歩、土手之姉ニ貳歩、忠吉ヘ壹歩。

一、金壹兩ハ膳梳古物買求、貳百三拾八匁五分ハ小使、酒代、産物代共右之通ニ有之候。五月廿日ニ上弘致候。奉行ハ廿一日罷上り申候。

一、嘉永六癸丑年(一八五三)五月廿日、八拾貳歳ニ而八幡御藏立合、首尾能相勤上弘致候。

十月廿三日ハ雪降候得共、折々雨ふり申候付、近年覺無之薄雪ニ而翌年二月迄弘前一統屋根之雪おろし不申候。心能年ニ候得共、折々雨雪故表通土場候得共草履道之様ニ而も時節故足駄道候。

嘉永七寅年(一八五四)二月廿二日御切紙到来御頭添田有方殿同道ニ而登城被仰付候処、当年之処出精ニ相勤候ニ付、金百五拾足并御料理御菓子頂戴被仰付候ニ付、御役人一統ヘ翌日御礼廻致候。

大坂留川ヘ異国之船參江戸大騒、大名衆出張被仰付候。

一、翌年七寅年(一八五四)浦川異国船七艘參。大船長さ九十間、中船六十間、三十間共七艘參候付、江戸表大騒、御大名ヘ御場所ニ夫々御人数御かため被仰付候。江戸より浦川迄里数十八里之由。鎌倉ニ御座候。

一、同年七寅年六月七日高覧被仰付候而出精致候処、高年之処致打方等一段之事ニ被思召候。依之為御賞金貳百足被下置、

於時計之間大藏繁次郎申渡。役人衆不殘御礼廻。

一、当年雪薄ニ而一度ならして流し不申、導場ハ一度も不流候。□□歩引御返無御座候付百石百五十匁御手当十二月被下置候。武藝出精候様被仰付候。異国船度々参候付、御鉄炮等被稽古出精候様被仰付候得共、歩引故一統難義致候。心能稽古之人々も無之傳授等分書出候様被仰付候。

嘉永八年（一八五五）正月廿日一統書上申候。

当正月嘉永ハ安政二乙卯年（一八五五）と相成申候。当年屋形様御名代ニ而若殿様四月廿日御下リ被遊候。三ノ丸ニ被成御座候。五月異国船三馬屋ヘ壹艘参候而三馬屋詰役人ハ松前ヘ詰合ニ相成申候。秋田仙臺御国松前表ヘ詰合、江戸表被仰付候。江戸表ハ御取上ニ相成申候。

一、若殿様七月廿八日御病死被遊候。然所廿二日ニ御取越ニ相成候。
（世嗣津縣承祐・享年十八歳）

一、安政三辰年（一八五六）（初代藩主為信）瑞祥院様御法會ニ付旧家申出候様被仰付。左之通

覚

私先祖大和儀

瑞祥院様御代御奉公申上、猶瑞祥院様式百回御忌、文化三年（一八〇六）十一月御能見物御酒御吸物被下置難有仕合奉存候。代々七拾歳以上ニ而隠居仕、私行年八拾五歳ニ而四代相成申候。此段申上候。以上

七月

戸田行左衛門

野宮伴左衛門様

戸田 理吉 様

上書先祖御奉公申上候儀ニ付

一、八月四日於革秀寺ニ瑞祥院様御法事、貳百五拾回御忌、四日拝礼、大雨ニ而寺社等ハ水出候ニ付出戻致、翌五日拝礼致候。八月廿四日於長勝寺御法事被仰付、廿八日迄御家中并在町共参詣勝手次第ト被仰付候。廿九日ハ五日迄七ケ日之内御法事、晦日御家中一統拝礼、五日ハ旧家斗拝礼被仰付候。

御香奠百石□□金十兩三拾銅、右以下貳拾銅ツゝ被仰付候。

安政六年末ノ年（一八五九）。

同六日御機嫌伺登城被仰付候。

同七日旧家登城被仰付、御酒御吸物御肴御料理頂戴、御菓子頂戴被仰付、役人衆一統御礼廻致候。

（頭註に「此所が八十八代相成候」とある。）

貳百八拾五人之由。江戸詰在勤病氣之面々名代被仰付候。料理頂戴、御菓子并銀拾五兩頂戴被仰付候。

当年七月廿日登城被仰付候処、拾年来迄相勤候ニ付、金壹兩ニ壹人扶持御加増被下置、御馬廻番頭格被仰付罷勤有之候処、当年十一月廿一日倅八十八儀登城被仰付候処、御馬廻貳番組被仰付相勤罷有之候処、親行左衛門義翌安政七申年（一八六〇）三月七日病死仕候。行年八拾九歳。

成田又藏義御手廻格山方手傳相勤罷有之候処、安政七申年二月朔日病死仕候。同年三月十二日倅篤同御馬廻相勤罷有之候処病死仕候。

同年閏三月六日、高屋連藏義御買物格相勤罷有之候処病死仕候。

同年九月土手ノ婦病死申候。^{写(17)}同年十二月菊地慶左衛門母病死仕候。同年十月手塚有左衛門倅病死申候。

但□□大分出来候得共、御蔵切手形五拾四匁ツ、致候処、

御家中御差引ハ五拾匁相成申候処、^(文久元)翌酉ノ年(一八六一)二

月頃方御蔵米五拾八匁御座候。下米六拾余被下、小者江壹升

壹匁三分五厘ニ而札米□□□候。弘前町中ニ而札米七千人之

由。下町斗ニ而八百人之由。

安政七申(一八六〇)四月朔日親行左衛門跡式無相違被下

置候。御手廻式番組被仰付候。

(第十一代藩主承昭)

御上様申ノ九月御登ニ而、翌酉ノ四月十五日御着城被遊候。

尤江戸表井道中両悪者出候之由ニ而兩組方十二三人御堅□登

被仰付候。

安政七庚申年(一八六〇)三月廿二日高覧之節御意之覚高覧



写真(17) (矢印のところから) 同年十二月、菊地慶左衛門母病死申候。
以下最後まで記録の部分。

被仰付候処、何れも常々出精と相見得一段之事ニ被思召、尚此未共出精為致候様被仰出候。右ハ取扱御呼出ニ而於裏板間ニ御側御用人中田庄左衛門殿被申渡候。尤御伴付出席御馬廻式番組御座候処御改無之、牧野友次郎殿御改候。組番頭笹森藤八郎、佐々木弥太八兩人宛□□ノ方へ山中兵部殿式番組御改被仰付候。尤親勤料三両壹人扶持御差引被仰付候。持料六両ニ三人扶持ニ而御馬廻式番組相勤罷有之。

注(1) 文化五年(一八〇七)、蝦夷地警固のため弘前藩兵が渡海した時の状況の一部と思われる。

(2) 文化五年松前表より引き上げる弘前藩兵の模様の一部と思われる。

(3) 文化五年(一八〇八)十二月十八日、弘前第九代藩主津輕寧親は、西蝦夷地警固の功により十万石に昇格する。

(4) 領内海岸通りの警備の模様に関する記録。交替で行われていた。

(5) 戸田茂太夫。後の「戸田行左衛門」である。

(6) 文政三年(一八二〇)十二月二十六日、津輕寧親侍従に昇進する。

(7) 相馬大作事件の模様の一部と思われる。

(8) 第十代藩主信順は朝起きができなくて、出立はいつも昼近くであった。そのため一定の旅程をこなして宿舎到着が夜中となるが多かった。これが続くために家臣団は閉口したと云われる。

(9) 第十代藩主信順は、文政九年十一月二十三日、田安中納言齊匡郷息女(養女か)欽姫様と婚礼。

(10) 文政十年十月十四日、津輕寧親(侍従)は右京太夫、津輕信順は越中守と改称する。

(11) 津輕寧親が右京太夫と改称したため、家臣団に「太夫」と名のつく者はすべて改めなければならなかった。そのため「戸田茂太夫」は「戸田行左衛門」と改めたというわけである。この例は珍しいことではなかった。例えば第十一代藩主津輕順承の世子承祐(十八歳で病死)は幼名武之助と云ったが、当時「之助」と名乗る藩士はすべて改めさせられた。

弘前藩庁日記、弘化三年十二月十日に次の記事がある。

「篠崎龍之助義、進、銃、之進両名之内、名改願申出、進与相改候被仰付候。」

右之面々若殿様御名ニ差障之義有之ニ付、御先例之通「之助」名之面々名改願申出、本文之通被仰付候。浅田英之助、珍田

- 祐之助、成田周之助、服部美之助、柴田鉄之助、秋山伝之助」
 (12) 数度にわたる蝦夷松前出兵で藩財政圧迫による歩引きである。文政十年正月十六日、「一役一人へ御家老口達書」として示されている。
- (13) 戸田八十八。本覚書に戸田行左衛門の「忤八十八」と頻出するが、「二男」であった。この日「嫡子願」を提出し、やがて名跡を継ぐことになる。
- (14) 文政十三寅年（一八三〇）八月十六日、岩木川水樋口村の上の土手破れ、下町一円の大洪水となる。
- (15) 天保四^三年（一八三三）天候不順のため皆無作となる。この年の庶民の生活が伺われる。
- (16) 凶作のため流民の移動が激しかった年であった。
- (17) 用人笠原近江が権力を握り、家臣団とくに重臣間の抗争が顕著となる。笠原近江は天保五年十月家老となり、この抗争は一層激しくなった。下級の家臣は笠原近江に批判的であったようである。
- (18) 天保五年十二月十五日、藩主信順侍従となる。
- (19) 天保七年（一八三六）十二月二十七日、笠原近江一間所で蟄居となる。（天保七年九月六日家老は罷免となっていた。）しかし息子虎之助が新たに三百石与えられたという処置に対しては、不満な家臣が多かったようである。
- (20) 天保八年（一八三七）九月十九日、「御家中知行歩引御返本渡被仰付候」という方針にはなったが、実際はこの記録のように実現せず、不満が残った。
- (21) 皮肉たっぷりの記録である。
- (22) 天保十年（一八三九）五月十六日、弘前第十代藩主津軽信順隠居となる。信順は病身のため正常な勤務が出来なかったと云われる。七月六日には弘前藩柳島屋敷（江戸屋敷）に移っている。その後文久二年（一八六二）十月十日は江戸で死去、六十三歳であった。
- (23) 津軽信順が行う藩政に対する鋭い批判である。
- (24) 左近将監。松平伊豆守信明の三男。黒石第八代藩主津軽甲斐守親足の養子として文政八年（一八二五）十一月五日第九代を嗣いだ、津軽信順に嗣子がなかったため同家の養子とり、弘前第十一代藩主となった。津軽順承である。
- (25) 天保十二年（一八四一）の八月には、十七日に大組足軽、持筒足軽の備立野稽古、十八日に諸手足軽の備立野稽古、二十四日に手廻組、馬廻組の備立内習が行われている。「工藤家記」から引用している『津軽歴代記録・下』の「書院番」「表書院番」

の名称は藩日記などにも出ることはあるが正規には弘前藩では採用していない。何れも藩主立会いのもとに宇和野で演習している。

(26) 第十一代藩主津軽順承は、質素儉約、学問、武芸の奨励、沿岸防備の強化に努めた。嘉永三年（一八五〇）七月から始めた備荒貯蓄制度は、翌年には二十二ヶ所の貯穀蔵に十五万五百俵の穀蔵、また備金三万二千両に及び財政の好転をもたらした。本記録はその一端を物語るものと思われる。

(27) この日は好天に恵まれ、藩主順承自身が出馬して盛大な演習となった。ただし「工藤家記」を引用している『津軽歴代記録・下』では、期日は四月十三日となっているし、津軽右近は書院番頭、添田有方、白取数馬は表書院番頭としている。しかし、本資料のように、四月六日は寒さのため、四月十一日は藩主欠席のために、四月十七日に行うことになったという記録はない。また過大な表現としても「見物人数万人」というのも珍しい記録である。

(28) 武之助。後の津軽承祐。津軽家一門の津軽直記順朝の長子。天保十四年（一八四三）弘前第十一代藩主津軽順承の世子（大隅守・従五位下）となったが、安政二年（一八五五）七月二十八日病死。十八歳の若さであった。性温和にしてとくに学芸に秀でていたという。昭和二十九年（一九五四）八月、墓地改葬のため発掘したところ、遺体は棺中に死蝋となって発見され、多くの副葬品も出土して世間の話題となった。現在長勝寺のミイラといわれ安置保存されている。（『青森県人名大辞典』）

(29) 弘化四年（一八四七）三月二十一日（五月ではない）、異国船より橋船で八人上陸。食料を求めた。生大根三四十本差出し直ぐ出帆するよう申し入れたが、東風吹き次第出帆することと船に帰った。乱暴を働くようなことはなかったという。これらのことは三瓶詰者頭松浦甚五左衛門の報告によるもので、幕府へも報告している。

解説

1、この「日誌覚書」の記録者について。記録の中で「忤八十八」とか「親行左衛門」と呼ぶことのできる人物は、資料2の『享和二年由緒書』から推察して「戸田行左衛門定取^{（最幼）}」ということになる。また「忤八十八」は「戸田八十八定幸」であり、「親行左衛門」は「戸田行左衛門定武」である。

2、記録の期間は、解説できる文化四年（一八〇七）から安政七年（一八六〇）までの五十三年間に及んでいる。このながい期間の日誌は、戸田行左衛門定取一人で書きあげたとは考え難い。親が祖父が書いた日誌から、戸田行左衛門定取が抜き書きし

て一本の日誌としてまとめたのではないかと思われる。

3、記録の内容は、藩財政の貧困に対する下級武士や庶民の暮らし向き、天候の異変、農作物の出来、不出来、それによる物価の変動、大洪水、火災、沿岸警備や武芸高覧等多岐にわたっている。

4、(注)の各項は、『津輕歴代記録』(青森県文化財保護協会編)、『青森県人名大事典』(東奥日報社編一九六九)等参考にしたが、『日誌覚書』の年記に思い違いによる誤記が数ヶ所あった。ただ『津輕歴代記録』の引用する資料は『藩日記』は別格として、『佐藤家記』『工藤家記』『長尾周庸家記』等高級武士の「家記」を多く採用しているが、戸田家のような下級武士の「日誌覚書」等も参考とすべきであつたと思われる。

○、戸田家所蔵古文書・古記録の一部

- 1、享保六辛丑年(一七二一)三月吉日、本覚克己流和指南許状。
- 2、享保十一酉年(一七二六)十月、戸田弥太右衛門定晴隠居願。
- 3、享保十二丁未年(一七二七)十二月、親類書(石岡八左衛門)
- 4、享保十四己酉年(一七二九)四月、津輕藩主に対する服忌令。
- ⑤、宝暦五乙亥年(一七五五)正月、親類書(父方・母方)(戸田弥太右衛門)
- 6、宝暦十二壬午年(一七六二)四月、親類書(父方・母方)(戸田茂兵衛)
- 7、明和六己丑年(一七六九)七月六日、戸田茂兵衛定明隠居願。
- 8、安永三甲午年(一七七四)十月、親類書(父方)(戸田定右衛門)
- 9、寛政五年(一七九三)二月二十三日、戸田与左衛門導場取建て、戸田流及本覚克己流指南。
- ⑩、享和二壬戌年(一八〇二)由緒書。(御留守居式番組支配・戸田行左衛門)
- 11、享和三癸亥年(一八〇三)正月吉日、戸田流免状。
- 12、文化二乙丑年(一八〇五)二月吉日、戸田流免状。
- 13、文化四丁卯年(一八〇七)十二月十一日、御用儀有之呼出状。
- 14、文化六己巳年(一八〇九)、親類書(父方・母方)(戸田茂太夫)

- 15、天保四癸巳年（一八三三）、由緒書（戸田行左衛門）
- 16、天保四癸巳年（一八三三）十一月吉日、本覚克己流和初巻。
- 17、天保九戊戌年（一八三八）二月吉日、本覚克己流和極意責具足之段。
- 18、天保九戊戌年（一八三八）二月吉日、本覚克己流和極意至格之段。
- 19、明治二己巳年（一八六九）、蝦地出兵の時の表彰状。

※ ⑤⑩⑪は本資料に紹介、この他に「戸田家所蔵古文書・古記録」目次の3、4、5、6、8、9がある。また「本覚克己流」和術四問答」が所蔵されている。弘前市立図書館が所蔵する同名の書（『文化紀要』第二〇号＝一九八四に紹介）は、後半の部分が切れているが戸田家の本書は全文が載っている。

三、弘前市立図書館所蔵武芸古文書・古記録の一部

1、『三種之功用 朝鏡之相傳』 GK—789—61

卷子本

弘前市立図書館蔵

神代之巻公事本記ニモ十種ノ神宝ト揚ラレタルハ、十種之傳秘、畢竟三種之徳用ヲ被述タル也。

先、草ナギノ劔ハ、賞罰宝劔之徳ニテ、悪人ヲ罰シ顕道之事ヲバ上ゲ被用、或ハ功用之有ニハ賞禄ヲアタヘ、皆其功用ニ應ズルガ宝劔ノ徳也。賞罰不正其賞ナク、其悪ヲコラス所ノ罰ゲン重デナケレバ、姦佞ノ者ハ縁ニフレ姦曲ヲ

ナス也。悪コラス所ノ宝劔之徳正シケレバ姦佞ハ自然ニ退ク。宝ハ智恵ノ徳ヲ備テ和順デ万民ヲ恵メバ四海自ラ安ズルナリ。依之宝劔テ天下ヲ平ニシ、仁ケイヲホドコシ、万民ヲ安ゼラシム。此二ツノ徳ハ治世ノ本元ナリ。然共、神鏡ヲ照シテ賞罰ヲ不行バ、却而賞ヲ行ヒ悪ヲ罰スル所ニモウラミイキドヲリヲ起シ、天下国家之災ト成事也。賞スル

所謂スル所、道理ニ叶フガヤダノ鏡ノ徳用也。其神尔宝劍
(八坂禮曲玉の意)
 内待所ノ三種ノ徳ヲ以テ天下ハ治ニ足ルナリ。万機ノ政ト
 云共、此三ツノ徳ヲ不出ナリ。然共、心境ハ幽玄ニシテ悟ガ
 タシ。心ハ我スラ何ト知り難キナリ。形モ影モ無く、無キ
 カト思ヘバ日用万事ニ應。此道理ヲ吾ニ備ル時ハ、向所ニ
 何事モ移ラズト云事ナシ。今日鏡ニ向ニ其儘其影ヲ移シテ
 毛頭トギレズ、善惡邪正ヲ移ル也。如此明ダ物ニ吾ニ請得
 ヲ是ヨリ治ル所ハ国天下モ不難也。然共、欲ノサビテ
(迷)
 明ダ物ヲクモラス故ニ、心情クラクナツテマヨヒ甚深シ。
 故ニ道ニテ蔽ヲ日用ト言ハ爰也。人欲ノサビヲ拂磨バ
(得)
 本明ダ心境故、クマナクシテ向所タダチニ是非徳失ヲ能
 弁スル也。是ヲミガキテ毛頭サビノ不付ハ神聖ノ御心也。
(やや)
 ミガク所ニ良モスレバサビウクヲ我トロ賢人也。ミガク
 ベキトモ不思打過ルハコビトノ凡情ナリ。扱、人欲ノサビ
 ヲ取様ハ、師ノ教ニ依ル也。本明ダ物ヲ吾ニ備居レバ、
(4)
 是ヲ師ニ習テ本善ノ明ナ徳ヲ調ル事ナリ。我道ニテ初ノ師
 ハ、伊奘諾尊、天照太神也。

一、鏡ハ伊奘諾尊初而自ラ御悟リ、是ヲ教度思召セドモ、

其理幽玄ニシテ言葉ニ尽サレヌ故ニ、何トゾ人ニ示ヤス
 ク通ル教可有也、御心ヲガンミ被成、是ヲ御悟リ、銅ヲ
(玩味)
 以テ初而鑄サセラレ、心ノ姿ハ如斯ノ物ゾト暫ク御示シ
 ノ所ヲ人々得心シタル事也。然バ、一心ノ理ヲカンガミ
 ト言コトバラ略シテ、カズミ、又、鏡ヲ略シテ神ト云也。
 善ヲ賞シ惡ヲ罰スルハ、是皆鏡ノ徳ナリ。人々此理ヲ請
 得テ居ハ、正ク守時ハ賞罰明也。不明ハ治ト云テハ無也。
 一、毎朝鏡ニ向テ影ヲ移事、古来ノ教也。然ドモ、鏡ニ向
(ばかり)
 時、先ツ影ヲ移スト計思事外ニ先トスル故、道ニタガウ
 ナリ。朝ハ清浄ニシテ、鏡ニ向時、鏡ヲ押戴キ、モフ念
(誓)
 ヲ拂、誠ノ一反ニ立帰リ、此道ニ不替様ニトチカヒ、急度
(きつと)
 本心ヨリ影ヲ移シ、尤形ヲ調ガ内外清浄之所ナリ。我
(かたちあり)
 形シハ父母ヨリ請得タルナリ。又、其親ノ親ト先祖ヲタダ
 ス時ハ、皆天ノ命、天理ノ至ル所ナリ。明ナル天鏡ノ空
(直)
 ニカハリテ、是非善惡タダチニウツシ、宝此所ニツイテ
(ツククシ)
 全我ナキ誠至極ノ所也。

天鏡穴にかゝりてよしあし乃

人の心をうつとふしれ

此神歌ヲ一反ニテモ乃至何反ニテモ唱、君臣父子五倫
の道不替ヤウニ子(念想)ンソウスル支也。

タニハ(ゆづ)寢所ニ入、一日ノ支理ヲカヘリミ、善ニス、ミ、

悪ヲ去リ、己ガトガヲ恐レテ、朝ニハ(まきにちつ)當以祓ノ徳用散テ、

而一朝日一日、己斯尽時ハ、一生ノ祈禱不遇之也。

一、年始元朝、此事ヲ執行支也。鏡ニ向時、目ノ内ニ血筋

又は顔ニモ不常ソウミル時ハ一入可歌支也。

天眼、地眼、中眼ト云支有リ

左眼、中眼、右眼トモ云。

一戸三之助 宗明

享保十四乙酉年六月朔日

竹内又市 殿

注(1) ヤダノ鏡。八咫の鏡。「ヤダ」の濁音は原文のままであ
る。

(2)(3)(4) 明ダ物。明らかなもの。「アキラカダモノ」の濁音
も原文のままで、津輕の濁リ言葉がそのまま書かれてい
る。

2、『演説』

GK—789—62

弘前市立図書館蔵

切紙

夫當郡流布之寶藏院流十文字鎌鎧

写(18)

諸侍執事之始者

當郡主越中守信政公御時代、高田平右衛門と申武士被召

抱候。高田平右衛門謂者、越後國所生也。奈良之元祖寶藏



写真(18)『演説』の書き出しの部分。

院之直弟子^ニ而、七人之名人帳と申^ニも記之。鎗道之家傳不殘傳授之為名人故、当郡之信政公之御師範被為仰付。此流儀之鎗道御執行^ニ而當郡主之御流儀也と言。甚後代土佐^(弘前第五代藩主信寿の初名)守信重公此流儀御執行之御師範、右平右衛門孫弟子丹野序右衛門と申武士、鎗道之御師範被為仰付御執行也。

於當郡高田平右衛門時世指南諸士之内、此流儀之家傳印可六人、平右衛門両子共入都合八人之外印可者無之候處、近世此印可斷絶^而漸今某^(それがし)、此流儀之家傳一字不殘相傳令受用在世也。

技藝之事と召申鎗は、武心嘉藝中之王行^而近代武士之一番鎗無比^(すこぶ)頗高名と称要術也。刹那心精思巧之者非^而誰力此道解哉。如前書新當郡主、御両将公之御執行之鎗道一流之傳法断絶申儀、御郡損之道理無大小。愚老隱嘆之某^(それがし)近年不幸之身^而衆士方武術師口之儀は、上^江奉恐無言^而年月送候處、御當代岩松信寧公御幼君^(弘前第七代藩主・幼名盤松)之御代至候。御先両主公之御流儀鎗道断絶無之様致相傳置進上可仕、今某^(それがし)百人^(それ)之門弟聚一流之極意秘傳可令傳與置存念候。

老體之某、命終ニ難斗候得共、先此儀言出候条、忠誠被

思召分某^江被加御助力、此流儀為忠心御懇望之衆中は御座候。拙宅被出御對談御相談之上、御稽古可被成候哉。

仍問狀如件

延享三^(黄)丙酉年 (一七四六)

寶藏院一家之名人

一戸三之助

三月一日

宗明^写花押⁽¹⁹⁾

加知^{カチ}乃^ノ既^イ後^ゴ為^ニ忠^{チウ}心^{シン}懇^{コン}望^{ボウ}之^ノ衆^{シュウ}中^{チュウ}は^ハ御^ミ座^ザ
 拙^{セツ}宅^{タク}被^レ出^デ御^ミ對^{タイ}談^{タン}御^ミ相^{サウ}談^{タン}之^ノ上^{ジョウ}、御^ミ稽^キ古^コ可^レ被^レ成^ス候^{コト}哉^ヤ
 仍^ニ問^{モン}狀^{ジョウ}如^ニ件^{ケン}
 寶藏院一家^{ホウザンイン}之^ノ名人^{メイジン}
 一戸三之助^{イチドミサノノスケ}
 延享三^ニ丙^ノ酉^ノ年^ノ (一七四六)
 三月一日
 宗明^{ソウメイ} 写^{カキ}花押⁽¹⁹⁾

写真(19)『演説』の最後の部分。

3、『寶藏院流名目録』 GK | 789 | 63

卷子本

弘前市立図書館蔵

寶藏院流名目録

- 一、飛乱 太刀合 三
- 一、虎乱 長刀合 三
- 一、打留 鍵合 三
- 一、五箇 口傳
- 一、三箇 口傳
- 一、真信 口傳
- 極意
- 一、八方詰
- 一、小袖合
- 一、戸入
- 一、風車
- 一、下道具合

一、倅之曲尺

一、妻手切三寸詰

一、浦之波

一、龍之打込

一、瀧落

一、茂

一、逆手鎌

一、五月雨

一、早馬

一、紅

一、思返

一、前廣

一、芝搦

一、船軍

一、狭間之鎌

寶藏院流歌書

夫兵法者不動明王

愛染按全有妙何間

去鼓拙哉待具足不

有利一心闇而無得

利死定勿逢退師親

之傳何疑之有哉

(馬子)
なるこそハ

(三)
おのか羽風に

ひきたてゝ

(心)
こころとさハく

(群雀)
むらすゝめかな

染出す人はなけれど

(春)
はるくれハ柳ハみとり
(緑)

(紅)
花はくれない井

しら露ハ

(己)
をのかすかたを
(婆)

そのまゝに

(紅葉) (置)
もみちにをけは

(紅)
くれなるの玉

聖人法秘

非秘為傳

一目羅不能得鳥

得鳥羅者是一目

獅子忿嗔之旨前

三後一

右此一巻雖為秘術

御執心之間令相傳早

聊他見有間敷者也

寶藏院流許卷

寶藏院流十文字鎌

数年依御執心不殘

先師相傳之位心持

令傳授早 自今以後

執心之輩於有之者

重々以起請可有相

傳者也 仍免狀如件

△奈良住元祖寶藏院直傳

高田平右衛門 正重

高田儀兵衛尉 正茂

山中又右衛門 成美

浅利伊兵衛尉 均祿

高田 甚六郎 正利

高田 三之助 宗明

延享五戊年(一七四八)

正月十五日

長谷川茂左衛門殿

朱印・花押

4、『宝藏院流鏑文書』

W—189—3

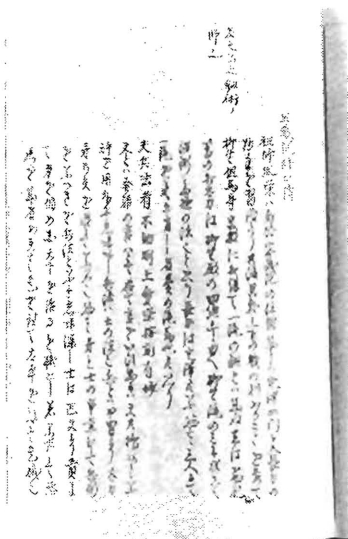
冊子本

弘前市立図書館蔵

宝藏院許口傳

写(20)

祖師胤栄ハ南都宝藏院の住僧なり。穴澤の門に入り、長刀の妙手を習ひ得たり。其の後異朝上古の利あることを考えて、柳生但馬守宗教(頭注「家光公之劍術ノ師也」)に相



写真(20)『宝藏院流鏑文書』『宝藏院許口傳』の始めの部分。

謀りて一流の祖とハなりぬ。去れば、飛乱等の打太刀は柳生殿の切組まれしゆへ柳生流のミに非ず、劔術至極の法也といへり。長刀は穴澤ともいふ。しかれば三人にて一流を建立有し名譽の流儀也ともいへり。

夫兵法者不動明王愛染按前有妙

夫とハ発語のことバとて始めて言をいひ出すにハ、夫とも抑^{おさ}などいふ辞を用ひ、外に意味なし。

兵法ハ士の法也。兵とハ甲冑より太刀、矛、弓矢を混じていふ名也。しかれば矛も士の事業にして、兵術をいふべきを兵法といふ意味深し。士は匹夫より貴まで、身を修め国天下を治むるを職とし、もし不順して惡逆をなす者あれば、是れを討ちて太平を致す是れ職也。此の職に付ての業を武藝といふ。武藝を習ひて職と業と一般に身を守るを兵法といふ。平日習う處を見れば古の項羽⁽⁴⁾が誼⁽⁵⁾し一人に、敵するの法なれども千辛万苦して心氣力を習練せざれば理に徹し技に融⁽⁶⁾ることなく、身を修むる実なし。故に勝負の争ひの中に法を立てて数多し。

不動明王といふハ、人々心の師なるものを指していふ。不動經に、我が真躰は一切衆生の一念心上の間に立つといふ本文に因る也。此の佛は、外にハ怒りの相を顕して降魔の勢ひを具ふるといへども、内心に慈悲の恵ミ深きことは諸佛に越たりといへり。是れ士の兵法に則り尊信すべき處なるゆへに、是に假⁽⁷⁾りて意を説く。此れ兵法も横手有て、身を守る益ありといへども横手障て人を刺し殺すことなく、只手負せて働をふさぐまでなる流儀ゆへ、内心慈悲の兵法なれば不動尊に誓へし諸流最上の流儀とする也。

愛染とは、其の不動は何に因りて不動の徳を、何を以て末世までに衆生に善き道にみちびき給うなるは、愛染按前の二也。是は数奇好む心もあり、あわれむ心も有りて、暫時片時も捨てず忘れずして修行する也。

染はそむる也。此れ不動の意を心氣にまねび染め、十文字の形を法に移せる處を氣躰に習ひ染むる也。

按前とは、按は、^(推)おすとも^(考)かむがふるとも訓む也。前はまへ、古をいふ。我が具えたる心の師のミを善として、古往の

明哲の前言往行を曲尺とせざれば、器早陋にして、たとへ術ハ人に勝るゝとも、山賊夜盜の術なるべし。故に、常に神儒佛の学者を初め、武藝の人には老若を撰はず、常に交わりて心を謙りて、或ハ慎みて問ひ、或ハ問難して其の理を得ば愛染の勝也。其の事実を知らば按前の勝也。理を聞きて技に移すことは必勝也。人に理を問答の間に徹底さするは乱勝にして向上の位也。是れ当流に三の仕合ある口決也。

有妙とは、此れ一藝を学べバ武士の道も自然に正しくなりて、有道の人に信用せるゝ器量生るるをいふ。是れ十文字の形に人を貰かず、只勢をとりひしぎて追放すと三の仕合と、愛染按前の三段修行に妙あり、道の妙は常にして奇妙不思議のことに非ず。

何間去而鼓柅哉

古し舟の上にて腰なる帶刀の水中へ落したるに、あれいといふて手を打ちし間に刀水へ入りしを、傍輩の旁より進ミ寄りて四五寸水上に見えしを執り上げしと也。此の執り上げし人ハ、声も懸けず手も打たぬ也。間ハ常の修行にあり。此の妙を修せずして武ハ技に奢り慢りて、矛の上に負を執り、又ハ放肆の心より我をやぶり身を亡ぼす。皆間去而鼓柅の藝にして士の術に非ず。山賊夜盜の術也。

待具足不利

待とハ、既に当流の兵器は仁愛の形せる人を買ぬき得ぬ器なり。然れば、春に象り木に属せる器なれば是を用ふるに待ち止るは其の道を失う也。たとひ仕合能くして勝を得るとも流儀に背ける勝也。

然れば仕懸けに三の品あるべし。初め矛を執りて立あがる處を序といふ。負を思ひ死を守る是れ也。敵に近付き寄る處は破の位也。序には形を糺して矛構えを慎しミ氣を収め、破にハ心は位を執り氣満して進むをいふ。急とは間関を破りて入る處をいふ。間関といふは、敵前に近き所進ミ難き所自然に有るもの也。是を間関鉄壁ともいふ。此の處に心を動かさ

ず、序破の調子の違はぬ修行是れ也。

具足とハ、具足満行と法花経(華)に出し妙文也。中古以来甲冑を具足といふも、此の念相より名付けしと申す傳也。具ハ修也。心に修し収むるをいふ。足ハ技に行ひ形に習はすをいふ。然れば足は行に象る。又、修ハ理を修し行は技を習ふをいふ也。事理片方ならざる時ハ風骨といふもの定めて是を上手と云ふ也。又、流儀により間閑に止りて能き図を見て一足して勝つことを教るあり。是は間拍手ばかりを専らすとする流儀也。当流は位と調子を専らにして、位を以て先の氣を押えて技を未発に止むる教え也。又、前の三の仕合に工夫肝要也。

一心闇而(無)无利得

喩ば突き出さむとする未前を押えて勝ち、或ハ突き出すを明らかに見て、或ハ逃れ或ハ打ち或ハ押へて勝ち、或ハ此方より突き出して敵の止ること叶はぬ調子を得て一槍に突き勝ちす、是れ世に所謂の明也。当流にいふ處の習ひは然らず、たとへ此の品々を皆心に得て手に應ずることも、其の得たる處の心位を以て吾いまだ足らざる處有るを知るを明といふ。是を不知るを闇といふ。又、吾此の品々を得たりとも、一品を得たること我より拔群の敵にハ勝つことあり、負ることあり。又天命に運といふものあり。又如斯品々の技を尽して得たる名人は古より無くして、只一品を得ても全軀を貫く術を名人といふとも言ひ傳ひたり。又、右品々の技並びに位、調子など勝負合は、明暗共に学ぶ人の目的の上に有りて、其の法、教えざるを教えることは当流の習ひ也。技の象(かたち)にも理の象にも、其の身の修行有れば無理を以て未熟の人に一旦は勝つもの也。技は無理なる勝ちも知る人に非ざれば見知らず。理学の人の口碑に残りより見れば恥なきやうなれども、此の處に恥るハ明らかに入る門戸に至れる人也。恥ざるハ闇き人にして、竟に利を得ることなく、不動心も吉止(よきとど)まらぬ也。利は武士道の利と廣く見るべし。一生の道術ともに尽して、死して後止むの大利也。一時の勝負の間の利と思うべからず。

死定而勿逢而退

死を守るハ当流の習ひ也。死を安くするハ山賊夜盜のなす處也。死を守るの修行上達して死定まるの位に至る也。又、死とハ負け也。負けを心に定むること人々工夫しては自得深かるべきこと也。

逢うて退くことなきの田地に至らんハ当流根元の處也。三の仕合に懸けて工夫尤も肝要也。

師親之傳何有疑哉

前にいふ如く、穴澤、柳生に談ぜられて往古の戟に切組の法を付けられたり。十文字形は此の進みて待たぬ一道より教えられしゆへに師親といふ。此の處に疑ひ有れば十文字は持たれぬ也。能く可味也。

なることを己が羽風に響かせて

己ときはぐ村雀かな

進みて位を以て先の氣を蓋ひ技をふさぎて勝つべきに、却て我が風には無情の鳴子も透はれて響を出して負けまじと凝る一念なれば、必ず先を助けて無量の術を出す只死定むるにしかずとの教也。

染出す人はなけれど春くれば

柳はみどり花は紅み

進みて三の修行の功を積れば、自然に理学は理に上達すべし。技藝は技に風骨定まること春を得る青柳花木の如し。但し、技藝は理を連ね、理学は技を連ねねば風骨は定らぬものと先哲の辞也。風骨定らねば、たとへ妙手を得るとも一技の手足に馴れたるばかりにして、当流に叶わず、武士の藝に非ず。能々自得あるべし。

白露の己が姿をそのまゝに

紅葉におけば紅の玉

五色を對する人にして玉の形の丸きを我が心跡形用に比べて三の修行せよといふこと也。是れ万事の夫々に得たる人を

一時の師として問ひて、我が本跡を節といふ義也。凡そ歌を引くことは、歌は其の意深くして辞に申す尽し難き處に歌を引くゆえに、能々常に味うべし。其の糸口をいふのミ也。

聖人法秘 非秘為傳

古の聖者の傳る者は辞也。辞ハ法也。法は事職に及ぶの理、是を法といふ。則ち当流の飛乱より許までの切組と此の秘歌の卷までの目録、是れ皆法也。皆自然の誠より出たる仕切ゆえ、印可までも常の理具えたるゆへ不思議奇妙の技なし。故に不知人も自然に十文字さへ技たらバ当流に叶うことあるべし。是を秘するハ傳へむ為也。飛乱より三箇までの法に祖師の此の一流建立ありし處は極たり。其の外に可秘ことなし。初心の人は手足に能く習ひ得ても、其の故を不知故に、先祖より以来切組の法の理を假初(かりそ)にもいわずして人々の自得をまつ處を此の条にいふ也。法ハ一人に敵して勝負争ふ士の技也といへども、十文字の形に敵を貫きたる士道を移せる所に引合せて朝思暮鍊有るべし。

一目羅不能得鳥

三箇までの切組は全跡の羅也。然れども理も一理也。技も一技也。たねなき者也。学ぶ人は一曲の切組に自得あれば一生の作用の作用足りぬべしといふ也。是れ許傳授の位也。

得鳥羅者惟一目

技を習ふ人は理に至らねば極むる處に非ず。理を学ぶ人は技に帰らざれば極むる處に非ず。其の極むる處に至りし處は、技の家は技也。故に前にて仕合の修行にて理に至り技を鍊ること也。

獅子忿嗔之旨前三後

獅子は一切の獸の王にして、勇猛獅子に及ぶものなし。此の獅子ハ兎を捕ふるに虎の威をなすといふ。されば獅子一吼すれば其の聲の響にて百獸の頸八つに裂けて死すといふ。其の威を一生持つことは、能く其の勢を自ら頼らずして能く省

みて、兎を捕ふるにも少しもあなどらずして、虎の勢をなすゆへ也。

前處には一の省を持てといふこと也。三は無量の事をなすをいふ。一は省みて常に修行せよ。得たる所に驕(きょう)な人を慢(まん)なといふこと也。

前三とは一は技の初め、三は技の全躰也。一といふ技は三を兼ね備ねば一となさずといへり。又、技の通用する處は十、百、千と大技に至り、分釐(ぶんりん)と理技を具へねば叶わぬ也。是は別のこと也。

宝蔵院流紅之書

飛亂太刀合 三

敵より太刀霞の節、十文字遠山の中段に持ち掛け候節、太刀より足を引き出し候處を上より突き込み勝つ。

敵太刀を陰に持ち候節、十文字下段に持ち懸け候處を太刀より切り出す候。十文字足を踏み込み中段に取り、太刀引き取り候處を踏み込み突きて勝つ。

敵太刀車の節、十文字上段、太刀切り出し候節、足を踏み込み其の儘勝つ。

虎亂長刀合 三

敵長刀をせつかう(折甲)の節、十文字遠山の中段に持ち、脇つばへ押し当てて懸り候節、長刀より張り候節、十文字上段の心持に迺し上より突き込み勝つ。

同長刀瀧流の節、十文字上段に持ち懸け候節、長刀より切り懸り候節、十文字足を踏み込み中段に直し上より突き込み勝つ。

長刀芝返之節、十文字下段に持ち懸け候節、長刀より冠入れ候節、十文字上に合わせ足を踏み込み、冠て切り捨て其の儘勝つ。

打留鎗合 三

互ひに遠山の中段に持ち懸け候て、下段に十文字を落す候節、直鎗より突き出す候節、十文字足を引き冠り足を踏み込み切り捨て鎗を留め候節、直槍を突き出す候處を上に打ち落し脇つばへ突き留め勝つ。

敵下段の節、十文字上段に持ち懸け候節、直鎗より突き出す候節、下にて合わせ冠り込み切すて勝つ。

同下段之節、十文字脇執りに持ち懸け候節、浅利之本二上段に持つ直鎗脇つばを突き出す候節。写(21)

5、『新影治源流』 GK—789—36

卷子本

弘前市立図書館蔵

○新影治源流 写(22)

一、〱當眼
一、〱調子

一、〱居霞
一、〱下ヶ太刀
一、〱清眼



写真(21)「宝蔵院許口傳」の最後の部分。
文章がとぎれた感じで終わっている。

○右五表之段

一、へ切 忍

一、へ逢 車

一、へ合 薙

一、へ相 霞

一、へ清 眼 請身

○右五中之段

一、へ違 留

一、へ打 落

一、へ志 る 劔

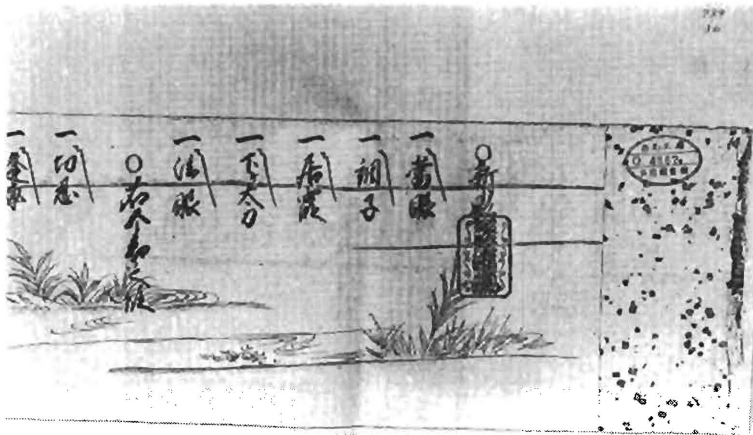
一、へ橋 は つれ

○右四貳刀之段

一、ひ つ ミ きり

一、へ つ け 入

一、へ し ち や う



写真(22)『新影治源流』の書き始めの部分。

一、へむかふ詰

一、へ劔のうらかへし

右五小太刀之段

一、へひつみ替

一、へ付入替

一、へ七様替

一、むかふ詰替

○右四影之段

○右之條々雖為秘書依

御熱心深令指南者也

仍目錄如件

△河村次右衛門 勝平

白取左太郎尉

貞享四丁卯年（二六八七）

九月吉日 基尚 朱印・花押

岩 淵 傳 助 殿

6、『新影治源流』

GK—789—76

弘前市立図書館蔵

卷子本

新影治源流^{写本}

一、甲繩 口傳

一、甲繩 口傳

一、甲繩 口傳

一、甲繩 口傳

一、甲繩 口傳

右表甲繩掛替口傳大事有

一、四寸繩 口傳七五三人

一、身ノ繩 口傳神前

一、津俱繩 口傳山伏

一、不痛 口傳出家沙門
兒女若衆

一、十刀繩 口傳侍 品口傳多し

一、取合棒しぱり 口傳

一、車繩 口傳

一、三寸あみだ繩 口傳

一、番不入 口傳

一、首金懸様大事有^附切縄 口傳

右此一巻依御執心深 目録

之通縄一筋も不残令相傳

早 自今已後誰人^二而も

堅可慎者也 若以來御執心

之方御座候者以起請文

是ヲ相傳可有者也 仍許狀

如件

橘	内膳正	家久
青柳	宮女介	高久
川村治右衛門尉	勝平	
白取	佐太郎	基尚
添田	傳九郎	貞榮
笹森瀧右衛門尉	建豊	
岡 藤左衛門尉	貞許	
安藤七右衛門尉	治利	
石郷岡	八大夫	建理
成田	吉三郎	兼満



写真(23)『新影治源流』の書き始めの部分。

- 一、(第一) 心を我に放ましき事
一、(第二) 氣のつけやうの事

○新影治源流 写 24

7、『新影治源流』GK—789—37

弘前市立図書館蔵
卷子本

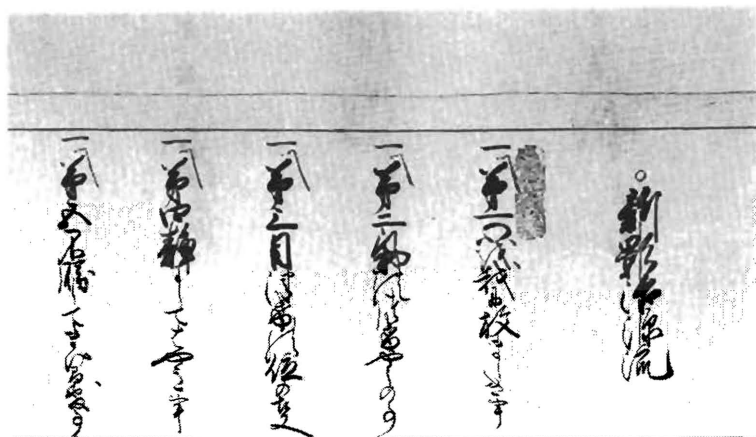
櫻庭瀬左衛門殿

印 朱印・花押

六月

寶曆三癸酉年(二七五三)

小笠原 直之丞 安久
藤 田 舍 人 貞如
岩 淵 嘉門尉 直亮
笹 宇右衛門尉 盛清
釜池八左衛門尉 景常
西館 縫殿之助

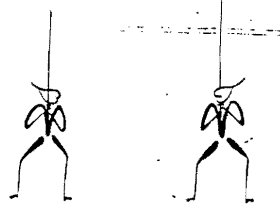


写真(24)『新影治源流』書き始めの部分。

- 一、第三 目つけの位の支
- 一、第四 静にしてはやり事
- 一、第五 不勝してまけ間敷事

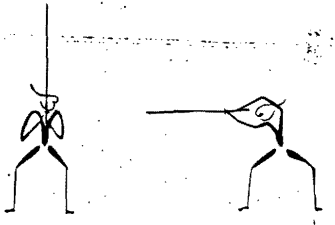
當眼

當眼



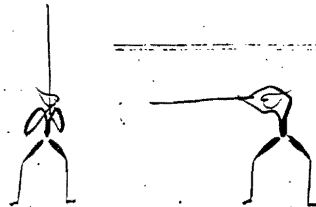
調子

調子



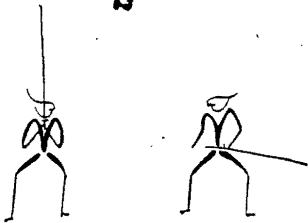
居霞

居霞



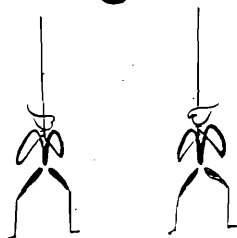
下太刀

下太刀



切
忍

切忍



清
眼

清眼



合
薙

合薙



合
車

合車



請身

請身



合霞

合霞



志る劔

志る劔



打落

打落



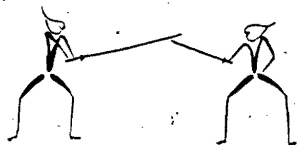
違留

違留



津希入
つげいり

津希入



ひつミ切

ひつミ切



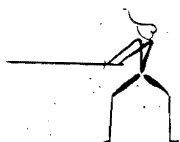
橋端
はしはづれ

橋端



劔の裏返
けんのはしげ

劔の裏返



むかふ詰
むかふ詰

むかふ詰



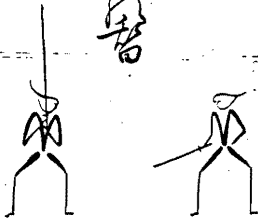
七やう
しちやう

七やう



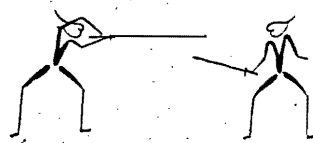
七やうの替

七やうの替



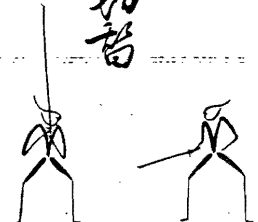
津希入の替

津希入の替



ひつミ切替

ひつミ切替



同位

同位



陰之位

陰之位



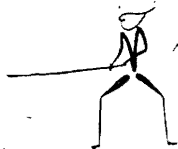
向詰の替

向詰の替



行

行



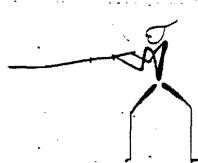
濟

濟



心之位

心之位



歌に

兵法の上手成とも油断せば

下手にはおとる物としるべし

白川の関をも越ぬ旅人ハ

まだ見ぬ奥の物語すな

兵法はしずとまけはせんと云

しりたる人は殊にまけまじ

右之條々雖為秘書依御執心深
令指南者也 仍而黒目録如件

橘 内膳正 家久

青柳 宮女之助 高久

川村治右衛門尉 勝平

斎藤 孫助 請平

寛政五癸丑年（一七九三）

斎藤 平次郎 雅長
成田 吉三郎 兼満
成田 又左衛門

二月十日 遭意朱印・花押

山形斧市殿

8、『新影治源流奥意之巻辨解』

GK—789—38

冊子本

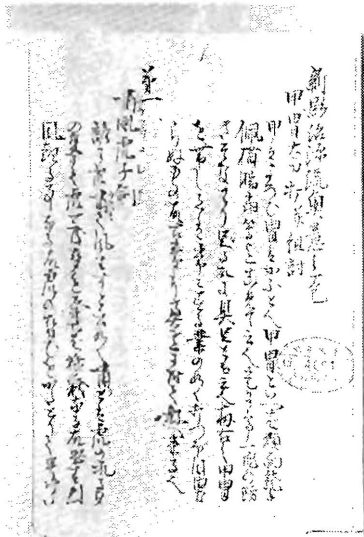
弘前市立図書館蔵

新影治源流奥意之巻 写(四)

甲冑太刀打并組討

甲はよろひ、冑はかぶと也。甲冑といへば、頬面、籠手、
佩楯^{はいたて} 腰当迄こめて云也。是にて一身の防ぎそなわり足る
故に具足とも云也。

扱、右之甲冑を帯しては、常々する業の如く打つば自由



写真(四)『新影治源流奥意之巻辨解』
書き始めの部分。

ならぬもの故、古来より奥意に附て教へ来る也。

第一

嘯風虎子劍

諺に、虎嘯て風生ずと云如く、嘯クとは虎の吼る聲の支にて、虎一度聲を發せば猛獸なる故必ず烈風起る事なる故、虎の勢ひをかたどりて号けたるなり。

扱、甲冑を帶しては、必竟太刀は會釋なり。譬へば、敵は陰にてもあれ斜にてもあれ、構へたる時我は陰に取り、夫と敵の眼か口へ振込突んとすべし。敵は太刀を打合する時、鏢ぜりの如く詰合せて太刀を打捨、胴の発ゆへ我右の手をはさみ突上ながら左の手にて胸を強く突ケバ、敵倒るゝもの也。其時妻手指を抜き、何方ニても具足の透間二刀三刀さし、其後首を取べし。

第二

踞地獅子劍

獅子、是又猛獸也。踞地とは地に踞くと云事也。勢を強く發せんとしては身を沈みて浮立ハ勢力格別なるものにて、譬ば鳥の羽を伸し飛んとする時、形を低ふして夫と飛立が如し。此故に地にひざまづく獅子の勢ひをかたどりて号けたる也。

扱、敵は上段にて真向を打割んと太刀を打かくる時、我は右の手にて柄を握り、太刀ノ胸中程に左の手を添へ、つかくゝと進ミより左の手にて草摺を疊ミながら、右の手の太刀先にて輦丸のあたりを突込べし。敵弱る所をはね倒

し首を取也。

第三

金剛王寶劍
コンゴウヲホハウ

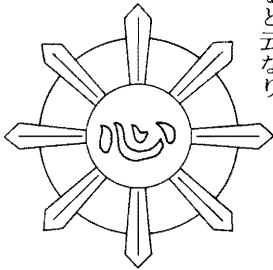
金剛とは、つよき刃の最上に云ふ詞にて、古より金剛童子、金剛力士など云如く、充滿してあたるべからざる形を表して号けたるなり。

扱、敵は上段にてもあれ陰にてもあれ、打懸るに我は下段に構へ進ミ寄、打太刀の籠手裏かゞりの邊をさらひ取べし。敵の利腕キ、ウデを痛めては、跡自由になるものなり。右何れも太刀討の法也。尚其時其敵により手立品々(てだて)あるべけれ共、つまる所是に漏るゝ事なし。よく鍛練して其妙を得べき也。

本覚之劍

本覚とは、本をさするとよみて、劍術の本とする所我と劍と別々なるものにあらざる刃を知るべきなり。是をよく心に深く知るをさすると云なり。

心即劍 劍即心



敵を受けるには、四方の四隅の外になき事也。何れより敵を受るとも、其方江應変するは心のよく鍊れ調りて推及ぶ故也。是を心即劍なりと云也。ツルギ

さて、其應変する太刀の働には、又心に戻り心の如く使ハるゝ故に劍即心なりと云也。是心と劍と別々なるものに非る証拠也。図は別に形にかゝハリ意味あるに非ず。心と劍とはなれず、八方江應ずる変を仮にうつして教へたるなり。

右書當流雖為奧秘因年来之修行成就

令皆傳早 自今以後師範可為勝手者也

夫天地の自然に備る處則四劍あり、四方とす。八面渾じて万化に轉ず。故に心魂の神柱天地をば太敷建て、八面の敵に對して其本源を偲す。(ふとふとしく)

夫百万業の刀法有といへとも、一討之処より外なし。爰において吾一念決定して敵を死地に入れ、百千討全く得る時、何の疑ふ処かあらん。然れば、生死有無の場にして利を得る事一討の所にはしかじ。故に全疎かにして得べからず。

伊 藤 助 計

9、『要務秘鑑』「師役之部」

冊子本

「自享保七年七月廿八日^(一七三二)至文化九年二月十七日^(一八二二)」

弘前市立図書館蔵

師役之部 御鷹野場御定四ノ卷ニ有之

写(6)

○ 享保七年(一七三二) 八月廿八日

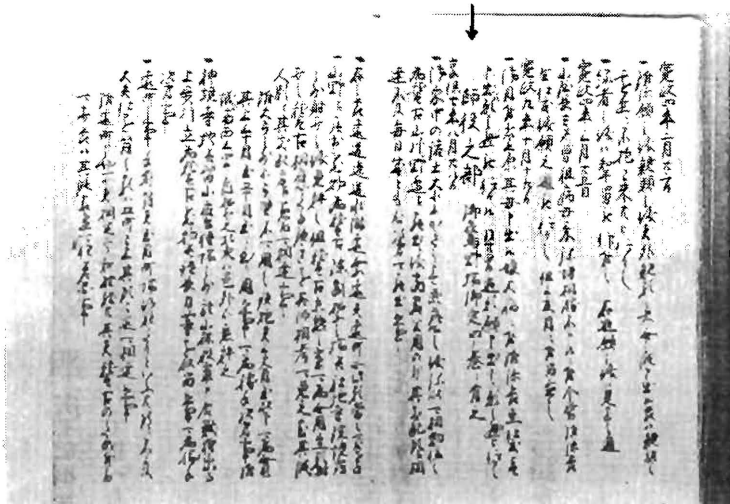
一、御家中の諸士大小にかぎらず、武藝之儀弥以可相勤。依之為稽古山川野辺^江罷出候儀、当番公用の外其支配^江相達不及。毎日成とも心次第可罷出候事。

一、右之節、遠道、辺道、水遊、遠乗、遠矢、遠町、如此類常々可心懸事。

一、山野^江罷出、飛物為稽古、除制禁之場^并社地寺院境、^(一)竊之外射打之儀免許之。但、稽古未熟之輩可為無用。生類射打之稽古相應たるべきを其師相考可免之。尤、其段人別ニ其支配方^江兼而可相達事。

附。^(二)大弓之外小弓堅不可用之。鉄炮は三文目以下可為無

用。其上三十目玉、五十目玉ニ至リ用候事可為勝手次



写真(6)『要務秘鑑』「師役之部」書き始めの部分。(矢印より)

第事。

附。城は南西三里之内禁之。北東ハ邑外に悉許之。

一、神境寺地并留山鷹待場之外於山林數輩申合獸狩出、馬上步行位、為稽古飛物并鎗、長刀を以留候事可為勝手次第事。

一、遠町之事。手前筒は玉目町場何程たりといふとも願ふ不及。大矢仕懸筒之類ハ五町已上、其頭々迄可相達候事。

附。遠町之場所は相定宇和野。然共其者稽古のため外に可打節ハ、其段相達可任差図事。

一、矢落玉落之儀隨分心を付べし。仮令雖下々たりと、猥怪俄人於有之ハ、其品より可為曲事支。

附。堅田畑之内江不可入。農人耕作之妨を致すべからず。若田畑を荒し候ハバ、其様子貪儀之上相應の過料可差出

候事。

右之趣可相守。若武辺の心懸を差置、或は遊山翫味のため致殺生、或は卑劣の仕方於有之は、可為曲事ものなり。

右之通被仰出之。一役一人江御家老中被仰出之。

○ 宝曆九年（一七五九）二月廿三日

（罷派一刀流翹術）

一、寄合山田金弥儀御家中師役致候ニ付、遠方御用相勤候而は稽古励ニ不相成候ニ付、当在番御用猶被仰付候。

同廿二日、師役之面々相定候。遠方役罷越候而は門弟稽古之障ニ相成候ニ付、不差遣様頭ニ夫々申遣之。

○ 宝曆六年（一七五六）三月十四日

（長短反求流鉄炮）

一、御手廻佐々木吉右衛門申立候。鉄炮指南候ニ付、惣而鉄炮は遠近高下之目當其外場所ニ寄様々働之傳受御座候ニ付、

琛斗^ニ而右稽古難成候。依之前々之通、鳥獸殺生御免札被仰(下)度委細申出候。申立之通。

一、御手廻組頭大道寺隼人申立候。佐々木吉右衛門鳥獸殺生之儀申出候。右殺生之儀、去春私申立候。如此未猥ニ相成候^{而ハ}、於私迷惑仕候。依之鳥獸殺生之儀、私^ニ御任せ被下置度奉存候。射打見分之上宜敷面々斗可申上候。其節御印札被下置候様申出之。申出之通申付之。

○ 宝曆十四年(一七六四)二月十六日

一、於御用人吉村場右衛門宅、御家中武藝師役之面々江口達左之通。

去年中御家中之面々武藝怠候様被及御聴候。尤乱舞御行候由。武藝無間断透之節ハ、乱舞致間敷物^ニも無之候得共、武藝次^{ツいで}ニ致候^{而ハ}は以之外不宜候。必竟師匠共怠^ニ付度々導場江も罷出候由。依之毎日も罷出致指南、弟子共稽古出精候様相進可申旨、此段急度申付候様被仰出之。

○ 宝曆十四年(一七六四)二月十二日

(山鹿流兵学)

一、御手廻組頭森岡主膳申立候。川元左門方伺之上兵学奥秘之傳^并門弟私方へ受取置申候。然者重儀流儀之儀^ニ付、御目見以下江は兵書之節不申談候旨、先師方申傳^ニ御座候処、御目見已下之左門弟^ニハ御座候へとも、長之助儀兵衛実子^ニ而未幼少^ニ御座候へとも、悉應望^ニ御座候間、門弟に仕兵学之儀指南仕度旨、願之通。

○ 宝曆十四年(一七六四)六月四日 (六月二日、明)

(当田流太刀・林崎新夢想流空色)

一、御馬廻・須藤忠兵衛申立候。御馬廻・浅利清藏門弟劔術稽古之儀、同人病中^方相止罷有。猶又嫡子伊八郎忌之内稽

古相止候^而は暫中絶^ニ付、免許之族見鑑仕、門弟稽古仕せ度同人忌之内^ニ付、私^方奉伺旨申出之。伺之通被仰付之。

○ 明和四年（一七六七）十一月十七日

一、御家中武藝^并兵学儒学致稽古候面々、師範之者之方^江日々稽古寄合候人別、月限^ニ調書出候様。尤稽古日相立、其日斗之寄合候得ハ、右會日寄合候人別限^ニ調書出候様被仰出之。
（師範之処々^江申付、右會日、御歸郷之節被差出、入御覽候様）

右之趣可申通旨御目付^江申付之。

○ 明和七年（一七七〇）八月三日

一、浪人小泉好七儀、（当田流太刀・林崎新夢想流居合）浅利万之助門弟^ニ而太刀・居合致皆傳候^ニ付、諸組足輕共^江致指南度儀、先達^而願之通申付候。

依之、両術とも未何方^江も入門不致者とも之内、望之者も有之候ハ、好七方^江致入門稽古候様。猶又稽古中少分之儀^ニ而も物入等無之様可致旨申出候付、組々足輕共透々勝手次第稽古致候様、此旨類役中^江長柄奉行中迄一統被申合、組々足輕共^江無（忘）急度向寄御申付可有之候。右之通御旗奉行口達書相渡之。

○ 安永四年（一七七五）九月十九日

一、十三奉行・（長短反求流鉄炮）佐々木処左衛門、前々方御預被仰付候御筒、今度悴^并門弟之内於小沢野大筒其外乱火棒火矢髓拂為手入、遠町打方稽古致^せ度奉存候。右御筒持賦之儀は町人足拾五人被仰付度、申立之通被仰付之。

○ 安永五年（一七七六）二月廿二日

一、右同人儀申立候。鉄炮傳來之内、玉火矢打方御座候而、悴^江此度傳受仕候処、火移等度々試稽古仕^セ度、依之先年^レ拜借被仰付候。右渡中川原星場^ニ而玉目三十目以下之玉火矢稽古仕度、委細伺之通。

○ 同年四月十日

一、御留守居支配・田中直次郎儀差支之儀有之^ニ付、門弟取扱成兼候^ニ付、當分師範相止候旨申出之。
(梶派一刀流劍術)

○ 安永六年（一七七七）正月廿一日

一、梶流一刀流之儀、妙心院様御代被遊御信仰、山田仁右御門被召抱、御家中指南被仰付候以来及數代、衰微致候上、金弥儀病死、悴一学若年^ニ付御自分後見被仰付候間、一学を被立、猶又、門弟をも致教導候様被仰付候旨、於津輕多膳宅田中惣右衛門^江申渡之。

○ 安永六年（一七七七）二月十九日

一、諸手物頭・牧野茂八申立候。私儀山鹿流兵学指南仕候。此段申上旨申出之。承届旨申遣之。
但、右指南之儀、前方伺之上被仰付候儀^ニ候得共、森岡主膳殿兼^而被仰付候由^ニ而申出之趣、承届旨申遣之。

○ 安永六年（一七七七）三月十二日

一、御中小性格・竹森郷右衛門申立候。(姓)
(井上外記鉄炮)
御囲筒薬調合方御用被仰付、明十三日^レ取付申候。右御用中出仕^并御寺拜礼罷出兼、変之節調合方^江相詰候^ニ付、寄場^江相詰不申旨申出之通被仰付之。

○ 安永六年（一七七七）三月廿日

一、御中小性・竹森（并上外記流鉄炮）又吉申立候。私儀御鉄炮拝借願之通被仰付、難有仕合奉存候。其上於江戸表出来仕候道具并書物卷物等、変之節并私儀も罷出候ニ付、無人ニ而賦方相成兼候間、何卒変之節上人足被仰付被下置旨、願之通被仰付之。

○ 安永七年（一七七八）二月六日

一、御中小性後藤勇助申立候。私儀制作仕候鹿嶋之儀、委細申上候通被仰付奉畏候。鹿の額皮御座候得者制作相成候ニ付、在方鹿狩之節皮斗差上候様。

一、鹿皮製作内、汚穢御座候而御供御用并私射法差障之儀御座候間、私師匠真鍋彦五郎方秘傳之儀御座候得者御用之儀御座候間、御用嶋同人江被仰付候様。尤製作器物并入用諸品製法多少ニ寄増減御座候間、委細傳仕候。弓師方申上候様被仰付度旨申出、勘定奉行貪儀之處、申出之通製作被仰付候様、委細附紙ニ而申出之通被仰付之。

○ 安永九年（一七八〇）二月六日

一、御中小性・吉岡徳藏儀導場取建、笠井六郎大夫相頼直元流致傳授、笠井園右衛門門弟一統相究稽古致度、屋敷願再應申出候ニ付、此度於代官町西村保之進差上候家屋敷拝領、願之通被仰付之。

○ 安永十年（一七八一）二月

一、劔術書上帳之内、足輕表坊主差除き、御留守居支配ハ御目見以下ニ而も書出候様、御目付へ口達ニ而申付之。

○ 天明四年（一七八四）十一月晦日

一、御自分義、弓道傳法來月三日御傳授候様被仰付旨、（石堂竹林流）中畑孫兵衛江申遣之。

○ 天明七年（一七八七）二月七日

一、此度古來之通、御鷹野場所之外御家中為稽古射打殺生御免被仰付度。師々ニ而前々之通、免許之者吟味之上可被申出候。免許無之者ハ師々ニ而互ニ致吟味、決而罷出不申候様可致候。尤十月朔日と二月中御赦免、三月朔日中ハ可為無用候。

西 不殘種市村迄

東 石川村と百田村迄、平川と内通不殘

南 不殘久渡寺山岸迄

北 高杉大川切

右之場所ニ而射打殺生堅不致候様急度可被申付候。

已上

但 在々江も被仰付候之。

○ 天明七年（一七八七）二月十五日

一、御手廻・笠井園右衛門申出候。（直元流、劍・大長刀）直元流三上銳助皆傳ニ付門弟取扱罷有之處、同人御追放被仰付候得共、門弟寄合稽古仕候ニ付、高覧之節私見鍵仕奉入高覧度、願之通被仰付之。

○ 同年三月十二日

(石堂竹林流弓術)

一、御中小性頭格・中畑孫兵衛申立候。

(姓) 此度射藝高覧ニ付、右出順之儀是迄御小性組小傳次次順之処、御留守居支配館

美文内、御中小性後藤勇助門弟相濟罷出候様、昨日被仰付候処、出順是迄通被仰付度委細申出候得共、文内、勇助

(第7代藩主信寧)

御先代様当御代之御流儀ニ付、出順之儀弥昨日被仰付候通相心得候様被仰付之。

一、竹内渡人、斎藤小左衛門、右同様申出之。昨日被仰付候通相心得候様被仰付候。

○ 天明八年(一七八八)三月五日

一、御家中射打殺生免許之面々、殺生札持参在之被罷越候而一宿致旨相頼候ニ付、一宿も致せ候得ば二三日も致帶留、其上同道待合候得共来候得バ、路用等差支候而錢致借用度旨賄頼も不差置、却而無躰之無心等申懸候族も有之趣相聞得不屈之事ニ候。已来右躰之儀無之様委細御触有之。

○ 同年九月廿一日

(直元流劍・大長刀)

一、御手廻・笠井園右衛門申立候。

此度劍術高覧被仰付候処、三上銳助慎被仰付候ニ付、惣門弟稽古相止罷有候。依之、

先達而同人門弟中稽古仕度旨兩度奉伺候得共、稽古御差留被仰付候。然バ此度用人於導場稽古仕セ高覧ニ差出度儀、

伺之通被仰付之。

○ 寛政二年(一七九〇)六月七日

(宝蔵院流十文字鑓)

一、御中小性・一戸金弥申立候。

宝蔵院鎗術門弟之内、三人江許相傳、四人江目錄相傳仕度。尤妙心院様、玄圭院様御

流儀ニ付奉伺旨申出之。伺之通被仰付之。

○ 寛政二年（一七九〇）六月九日

一、牧野左次郎申立候。私儀是迫山鹿流兵学門弟取扱仕罷在候処、今度御用人被仰付候得共、曾祖父左次郎儀も御用人

（山鹿流兵学）

ニ而兵学門弟取扱仕候間、私門弟取扱之儀も是迄之通取扱仕度奉伺旨申出之。伺之通被仰付旨口達ニ而申通之。

○ 同年七月五日

一、御中小性格（姓）・中畑孫兵衛申出候。私曾祖父孫兵衛、本間民部左衛門門弟ニ被仰付、御物入を以弓道不残皆傳相濟、

（石堂竹林流弓術）

代々指南仕罷有候処、私儀先年罷登候節、石堂竹林流御尋被仰付候処、亀井能登守様御家中松森勝之丞、尾脇様御内
星野勘左衛門門弟ニ而指南仕候ニ付、以御威光同人門弟ニ罷成、御物入にて段々稽古不残皆傳相濟候処、忤八藏、去
年御供ニ而罷登、青山下野守様御内ニ而石堂林左衛門儀石堂竹林流ニ而同人門弟ニ罷成、以御威光段々稽古仕、弓道
皆傳相濟難有仕合奉存候。然ハ右弓道来由僉義仕候処、元祖系図石堂竹林流本家道統相違無御座候ニ付、私儀も道統
之家、林左衛門門弟ニ罷成、傳授之弓書江名前連名ニ仕、忤名代ニ而皆傳相濟候ニ付、已来石堂竹林流相傳被仕候
指南仕候旨申出之。申出之趣承届旨申遣之。

○ 同年八月十日

一、御馬廻番頭・佐々木専右衛門（長短）反求流鉄炮、去年松前蝦夷地騷擾ニ付、私江大筒方御用被仰付候処、其節乱火其外玉薬出来方相

濟候哉否申上候様被仰付候ニ付、左之通

一、乱火御筒之儀御大切之御筒御座候間、松前渡海仕候ハ、木筒^ニ而出来相用候筈申上候。尤、玉拵之儀仕懸筒故、筒之寸法、大小^ニ順シ玉拵候^ニ付、松前表^江罷越出来之儀御聞届被仰付候間、右玉^江込候焼棄之儀用意仕置候。

棒火矢 矢拵棄共出来仕候。

大筒 玉葉大小共出来仕候。

連城炮 玉葉惣仕懸共出来仕候。

早衡 小筒^并十文字目玉支度仕置候。

右之通乱火玉拵之外不残出来仕置候。何時御用被仰付候^而も御差支無御座旨申出之。承届旨申遣之。

○ 寛政二年（一七九〇）八月廿七日

一、御馬廻・竹森郷右衛門申立候。去年松前表格段御用向^ニ付、沓番手諸手足輕^江軍用鉄炮打方指南仕候^ニ付、右打方御序之節高覧被仰付度旨委細申出之。願之通被仰付之。

○ 寛政三年（一七九一）二月十七日

一、御手廻・浅利万之助申立候。此度剣術高覧被仰出候処、去年三月より八月まで大病相煩、今以睨^{（しか）}と快氣不仕、病氣

^{（当田流太刀、林崎新夢想流居合）}
^ニ而罷有候。依之、佐田長太郎儀祖父万之助門弟^ニ而皆傳仕、今以折々導場^江罷越、打太刀等仕罷有候。依^而同人先年無調法御免被仰付、高覧之節打太刀仕せ度儀、願之通被仰付之。

但 長太郎は佐田長左衛門親ナリ。

○ 寛政三年（一七九二）四月廿一日

一、此度評定所三組頭御家中武藝見分被仰付、去ル六日見分之処、（下傳流劍術）小山次郎太夫、（直元流劍、大長刀）三上銳助門弟仕合組無之ニ付相尋候処、仕合太刀持參無之ニ付申出。左候而は御~~レ~~合相成不申候ニ付、以来御~~レ~~合被仰付度義、願之通師範之面々江夫々被仰付旨、高倉主計、森岡金吾江申遣之。

○ 寛政四年（一七九二）二月十二日

一、此度於諸武具藏御用有之ニ付、射打殺生免許之族在方江稽古ニ罷出、諸鳥打取、右尾羽何鳥ニ不限、諸武具藏江相納候様。尤、右尾羽多相納候面々江ハ時ニより御賞方等も可被仰付候間、出精致射打候被仰付之。

一、右ニ付、御鷹場所并寺社領、御鷹待場都而是迄御停止之場所江ハ決而不罷出、猶又農事ニ不相障、凡而在方之者共江不法之儀無之様被仰付之。

一、歷々殺生并御免札決裁無之族懸打等有之候ハ、名前聞届、帰宅次第師々江早速申出候様被仰付之。

一、殺生御免御定十月より翌二月迄ニ有之候処、（くまかみ）鷲鷯之類は御定月之内ニハ打取兼可申候ニ付、右御定月過候ハ、日数幾日何村辺罷越候儀、人別ヲ以右之趣各より師匠々々江可申通旨、御目付江申遣之。

○ 寛政四年（一七九二）二月十七日

一、御矢羽御用ニ付、射打殺生被仰付候面々、玉葉調合入用諸色并火繩其外着替持、人夫渡方之儀、私共迄申出候。人夫之儀ハ自分着替持而相濟候様申合候様、上下式人分ツ、御賄被下置候様。玉鉛并燭燭、流黄ハ紙御藏より、芋柄ハ蠟燭藏~~り~~、竹火繩桧皮之儀ハ御武具藏より渡方之上、追而新火繩上納申付申遣之。勘定奉行江も申遣之。

○ 寛政四年（一七九二）二月廿七日

一、頃日於諸導場稽古之族、碁將棋之会、俳諧等之慰いたし、稽古不_レ之儀有之ニ付、口達書御目付へ相渡之。

○ 寛政四年（一七九二）三月三日

一、射打殺生之儀前々御停止ニ御座候間、御武具藏御用打取之面々も御鷹場所并御鷹待場ハ不及申、都而耕作斗於田畑地鉄砲打候儀堅御差留。其外之山林并田畑無之場所ハ、耕作之時節ニ而も御武具藏御用被仰付候面々致射打御矢羽差上候儀。但、三月_五月迄巢鳥ハ打不申様。右之通被仰付候様、勘定奉行申出之通御目付_江申遣之。

○ 寛政四年（一七九二）十一月十四日

一、中畑孫兵衛申上候。（石堂竹林流弓術）曾祖父孫兵衛儀妙心院様御代弓道相傳仕罷有候処、御意ヲ以本間民部左衛門門弟被仰付、天下

唯一三日月加持傳授仕。其後私儀戒香院様體孝院様_{（第七代藩主信寧）}御相傳奉申上候間、御先格之通御傳授奉申上度旨申出之。伺之通被仰付之。_{（第八代藩主信明）}

○ 享和二年（一八〇二）八月廿五日

一、竹森郷右衛門申立候。（井上外記流鉄炮）鉄炮指南方被仰付、其上御武具藏御用筒并調合等被仰付罷有候間、小普請金之内差引方御用猶被仰付度。頼之通被仰付之。

○ 文化三年（一八〇六）二月十日

一、此度南溜池御取立ニ付、前々之通直様裏通江大矢場御取立被仰付候ニ付、已来御家中射藝師範之族勝手次第罷越稽古被仰付候。尤、掃除等之儀ハ師範之族申合、折々手入致候様、尚又屋敷方江も見やり手入申付候間、同所申合候様。

一、右大矢場前々之通直様江見やり申付候。此旨共師範之面々江各々夫々可申通旨、御目付江申遣之。

右ニ付、口達書左之通

一、此度南溜池御取立ニ付、前々之通直様裏通江大矢場御取立被仰付候間、馬術、劔術、鎗術共野辺ニ而稽古致候儀も有之候ハ、師範之族申合勝手次第大矢場江罷越稽古致候様、猶委細御目付江可被申合候。已上

馬術、劔術、鎗術師範之面々

右口達書御目付江相渡、同所方師範之面々江渡之。

○ 文化五年（一八〇八）十一月五日

（玉蔵院流十文字纏）

一、櫻庭又左衛門御役御免願之通被仰付候得共、鎗術師範方出精ニ付、同人知行米、小普請金御差引御免被仰付度旨、門弟方も申出。願之通被仰付候。

○ 文化六年（一八〇九）十月五日

（克己守格流太刀・本寛克己流和術）

一、唐牛甚右衛門申出候。以支配伊藤武弥劔術和術数年出精仕、許傳授等も相済候間、門弟為勵合此度高覧之節罷出候様被仰付度儀、願之通被仰付之。

○ 文化七年（一八一〇）七月朔日

一、（本覚元己流和術）三上與次右衛門申出候。私儀文化二丑年（一八〇五）と斎藤茂兵衛病死後、同人悻常之進若年ニ付、伺之上和術師範方門弟取扱手傳仕罷有候。然処、常之進儀此節格別藝術宜、門弟取扱向も行届候ニ付、私門弟取扱方引取申度奉存候旨申出。伺之通被仰付旨申遣之。

○ 文化八年（一八一二）二月廿一日

一、御自分儀師範方ニ付、両在番御用捨被仰付旨、寄合斎藤安吉江申遣之通、用番寄合江も知せ申遣之。

（じゅんじょう）
馴縄流軍馬別傳書（弘前藩家老津輕玄蕃政朝が馴鞍流と飯縄流とを統合して創立した馬術）

一、馬沓之事

先達而相のべたる通り、世上にて麻糸などにて作り、又ハ常のくつへくじらなど入候事ハ不宜なり。當流におゐて秘事する致方は、糸繩にしてしゆくらを以て作事なり。是は古砂に入水に入てもしとまず、勿論物をふみぬく事もなき物なり。然共土地に入りよりてしゆくらのなき所あり、左様の時はこわたにて作る。是又一段宜まとある事なり。右の両様武者沓と申て奥秘に致す事。

一、鉄沓専用の事

是又川渡などにて右の武者沓をぬぐ事は左様の為に傳あれども、用る致方は、たとへ沓がとれても此鉄沓斗に而土地をはせても馬の爪の害にはならぬなり。馬の足の裏江ぬる葉なり。

松やに粉ニ_レ十両、いもり黒やき半分、此半分と云々、口傳あり。

一、息合葉用意之事

戰場ニ而は、つよくのりはせを致す故に、息をいたす事が間々あり。其節は用意に致す事なり。白き女郎花(つふし)の花を取てかけ、干に致して豊かな梅に限りて梅干の用る事なり。黒焼当分調合致して、ほうづきの大サにして緋に包む、くつわのくい違へ糸を以てゆひ付而なり。尤、くい違の穴の取さがらぬ様に致し置事なり。

右之通、兼而口中に茶を用意いたし置故に、急の時に及て用ニ不及なり。

一、卒倒の馬息合針の事

是は、つよく息を致し卒倒して馬の死たる時の事なり。舌先より手一足に舌をにぎりて、其にぎりたる所をつりはらゐにかねにして、舌の真中を表裏よりすと突通し、扱、水を以て舌のひくる程洗へバ忽ち生き返而針也。爰に傳あり。其儘に横につけバ生るもたちまち死する也。仍而随分ひづまぬ様ニ真直に突通すかねるなり。左様の節に及て針を不持合時ハ、小刀を以ても右の通に致なり。是は先達而相のべる馬醫の家におゐて、印可(いんか)のはりにいたして悉く秘事いたす事なり。然共、軍馬全用の儀ニ付て先生の此ケ条ニ入おかれたると有事なり。

馴縄流軍馬上 許之卷

一、雲珠を用ゆると云傳來の事

馬に雲珠を用ると申事ハ古傳なり。此こつと申事を存じたる者ハまれなり。立聞のひゝきのかねを用る事などを古ヘハ有たれども、今是等の傳かゝたる事とも多なり。雲珠の事も(たじろ)傳來して、用法の事を知ることハなし。

杏葉(あんぎ)の事も、古書亦ハ先達而のぶる通、源氏物語などにもきやうようを用ると有事、鞍のかざり物の様に相見るなり。

其用法の事を髓ニ存じたるはなし。此秘傳と申に二品あり。其事の徳用を秘傳と致し、又、左なくとも世に傳の經たる事を秘傳と致して、心ざしのふかきものへ相傳いたす事なり。此志の儀に付て、つれ／＼(徒然)草ニも相みゆる通り候。或ハますほのすゝきの事を渡部のひぢりの傳へ知りたると申す事を語りたれば、其の座に愛蓮法師が居て雨のふりたるに、みのかさをかし給へ、かの薄の事を習にまいらんと申したれば、余りに物さハがし。雨が止てこされと云たれば、むけの事を仰らるゝ物かな。人の命ハ雨のはれ間を待ものかハ、我も死しひぢりも失ては尋得んやと申たる。是心さしの至極と沙汰いたす事なり。雲珠、杏葉の古傳まれなる事を爰にあげられて、扱、馬浮大河渡し、是等は大わさ物にて、猶またおもき傳なり。

大將馬上鞍堅して、是至極致たる物故、此五ヶ条を当流免許のヶ条致されたるなり。雲珠と申字ハ異国方出たる文字なり。日本ニ而馬ひしたんと申て馬の浮沓の名なり。其製作の致様ハ、竹ニ而目籠を組て、たん扁へなりに致して紙をしぶはりに五六扁もはりて、其上を漆を以てぬり、是を平革のぬり結を以て十文字に帶を致して、其帶にくわんを打て紐を付るなり。後の塩手ハ二ツ串的の塩手ハ短くして後のハ長ク付る也。扱、大河を渡る時、是を馬のうきと致して水をおよぐに宜と有事なり。ヶ様の傳來なり。然共、当流におゐて、ちと用捨いたす事が有。其意味ハ末のヶ条にて相知ルなり。

一、杏葉の傳の事

是は文字の通、からもゝの葉と書て字心の通のかたちいたしたる物なり。銀を以てからもゝの葉の如くに拵て、長みの真中に豎に間を五歩斗置て穴を二ツ明る。扱、杏葉の葉先を射向の方へ致して、むなかへの真中へ鉾打付るなり。尤、裏革を付る。其用法ハ二之上繩を此杏葉の穴の間より通して前足の間へ引通し、はら帶へ結付るなり。先達而申したる斗ニ而ハ、馬がおもふ様にこゝまぬなり。是にて髓ニこゝみて全用のわけが知るなり。

一、馬浮組登と云事

騎馬を組ては(早)瀬を渡るわざなり。此馬いかだ組様の事を只今ニてハ存したる人はなきなり。大かた傳が絶へたるなり。依之、世上ニ而皆申事ハ正流の傳がなくて、人々附會いたし、さま／＼の事を申故不分明なり。馬いかだの儀、頼政の謠の本にも、足利の忠綱宇治川を渡る時、よ(弱)ハき馬をば下手ニ立、つよきに水をふせがせよとあり。是等がたしかに馬いかだ組たる証拠なり。ケ様申てハ得心もなく傳にもならぬなり。

馬いかだ組と申ハ、当流におゐて、先川法くりの大馬を三匹將基頭にのりならべて、夫方一段一段にめんとり羽に川上、川中、川下と三様にならべて、真中の馬ハ先の馬のしりかへを取て持、跡の馬ハ手綱へ取添て持なり。川上と川下ハ先の二騎の武者よりおゝい繩を取添て、跡の武者も持事なり、歩行武者ハ馬に取付持付に取付て、人馬流に隨而渡るなり。是馬浮様の傳なり。ケ様にいたしてハ、其惣勢を以て難なく渡す事なり。

一、大河渡 附 川渡仕掛の事

是は一騎にあてゝの業なり。右の馬いかだのケ条ハ、は(早)や瀬の足のふみ立ぬ所を大勢にて渡る事なり。馬のたけの立処ハ一騎渡りにても別条なし。馬のたけの及バぬ深き川を渡るが大切なり。此節、水を渡るに、馬にはなれて人馬別々になる事ハ多きなり。依之、川渡の仕かけが有、四尺斗短き緒を用るなり。くわんを(環)一ツ、かき(鍵)を一ツ付て馬せん(縫)の穴より右の緒を通し、むなかいの横緒へ引かけて、扱、くわん以て五寸のむらにて帯の帯にてるなり。是が下なるか江河渡の仕懸と申て秘して傳たる事なり。扱、馬の後足のうく程ふかくなると馬がしづむなり。其時立馬になりておよぐなり。扱、後足がさ(半)ば立に成て水底へとゞくとうき上りて、夫方浪をわけておよぐ物なり。右の通、うき上る時我身と鞍との間へ水が入てうき上りてくらばなれを致す也。扱、後足を拂ふ時、又落馬致す物なり。古來、馬のさんづへ下り、水を切ルと申事、此仕懸がなくハさんづへの下る事ハならぬなり。ゆるみ様ハ奎馬ニ而心みれば相知るなり。跡輪を越

して馬のさんづへのりて、前の塩手へ指を二本かけとり、髪の処へ付て水底に浮み上るなり。ケ様之事を以て当流におゐて雲珠を以うかけ上る事を用捨すると申ハ爰なり。雲珠ハいよふ深き川にては邪魔になり也。先生のひたと心みられて左様の事なり。生得、馬ハ水を得たる者故、右之通の仕懸にてよくのれバ雲珠にハ及バぬなり。

寛文中中に秋田領岩瀬川の洪水の時、津軽平八郎殿、右の仕懸を以安らかに渡之、信政様のいよふ御称美遊バされたと有事なり。

一、大將馬上の仕掛の事

是は鞍堅めの至極いたしたる物也。長き緒へくわんを四ツ付て、其致様ハ後に一ツくわんをくゝり付て帯に致なり。

（環）
宍心責馬の如くに緒を二本後へかけて両方くわんを通し、心責の通に仕懸るなり。是にて悉くつよき仕かけなり。下々にちとさわりと成なり。然とも、大將ハ下馬せずと申語故に、大將馬上鞍堅と申から出来たるくら堅めの至極よりて、許のケ条にあげられて相傳致す事なり。

以上

天明九酉年（一七八九）正月、御家中兵学并武藝師範之面々書出候之様被仰付。左之通

兵学師範

一、貴田孫太夫申出候。

曾祖父孫太夫儀、寛文十戌年（一六七〇）四月、江戸表^ニ而山鹿甚五左衛門（山鹿素行）^{（右）}ハ兵学皆傳仕候^而指南仕

候。

一、祖父孫太夫儀、貞享^(寅)三辰年(一六八六)六月、江戸表^ニ而曾祖父孫太夫^ハ兵学皆傳仕、元禄四年(一六九一)十月、御国元^江引越被仰付指南罷有候。

一、親長太夫儀、享保十四酉年(一二二九)十二月、江戸表^ニ而山鹿藤助^ハ兵学皆傳仕、御国元^ニ而指南仕候。

一、私儀、親長太夫^ハ門弟之内大瀬十之丞^江伺之上、延享四卯年(一七四七)正月、御国元^ニ而兵学皆傳仕候^ニ付、宝曆十三年^(未)(一七六三)六月、右十之丞兵学皆傳仕候^而指南仕罷有候。山本勘助流兵学右之通相傳仕、曾祖父孫太夫^ハ私迄四代指南仕候。此段申上候。

牧野左次郎申出候。

一、高祖父牧野伴右衛門儀、延享八年^(延享の年号は五年七月十一日まで、八年はない)於江戸表山鹿流兵学奥秘、山鹿八郎左衛門より相傳仕候。尤、於御国元御家中兵学指南仕候。

一、御手廻番頭岡本弥吉郎祖父岡本連八儀、伴右衛門^ハ奥秘皆傳仕、御家中兵学指南仕候。右年月不傳承候。

一、曾祖父牧野左次郎儀、右連八^ハ奥秘皆傳仕、御家中兵学指南仕候。右年月不傳承候。

一、御留守居組川本次郎八、祖父川元兵衛儀、右左次郎^ハ奥秘皆傳仕、御家中兵学指南仕候。右年月傳不承候。

一、寄合森岡金吾、父森岡主膳儀、宝曆十一年(一七六一)三月、右兵衛^ハ奥秘皆傳仕候。尤、兵衛病死御家中兵学指南仕候。

一、川元兵衛悴左内儀、宝曆十二年(一七六二)正月、右主膳^ハ奥秘皆傳仕、御家中兵学指南仕罷有候処、同十三末年(一七六三)、無調法之儀有之。指南方不相成候^ニ付、主膳^江奥秘相返シ申候。又々主膳指南仕候。

一、御留守居組川元次郎八親長之助儀、明和五子年（一七六八）六月、主膳^方兵学奥秘皆傳仕、御家中指南仕候。然処、同人病死仕候ニ付、又々主膳指南仕候。

一、私儀、安永六酉年（一七七七）正月、主膳^方兵学奥秘皆傳仕、同年九月十九日、御家中指南之儀御聞届相濟、門弟取扱仕罷有候。

横嶋勝右衛門申出候。

一、親弓翁儀、山本勘助流兵学貴田長太夫^方享保二十卯年（一七三五）三月皆傳仕、明和六丑年（一七六九）五月三日門弟指南之儀、伺之通被仰付。

一、私儀、宝曆十二年（一七六二）五月、親弓翁^方皆傳仕候。其後明和五子年（一七六八）六月、師匠家貴田孫太夫^方再傳仕候処、親弓翁及老年門弟指南成兼候ニ付、安永九年（一七八〇）十二月十二日以後私指南仕候旨申上候処、御聞届被仰付、私迄二代指南仕候。

射衛師範

中畑孫兵衛申出候。

一、曾祖父孫兵衛儀、吉田流加藤新右衛門天明三年（一七八三）三月二日皆傳相濟指南候処、松平忠右衛門門弟ニ被仰付、元禄十六年（一七〇三）三月朔日、江戸表^ニ罷登弓道稽古仕候処、日置流皆傳相濟、宝暦元年（一七五一）六月二日罷下り申候。然処、為稽古新千百俵被下置、日置流指南仕候処、宝永六年（一七〇九）本間民部左衛門罷下候ニ

付、石堂竹林流同人門弟ニ被仰付、弓道執行仕、同八年(一七一二)八月十三日本間民部左衛門罷登候ニ付、一所ニ罷登、於江戸表皆傳相濟、同九年(一七一二)八月三日御国元^江着仕候。其後石堂竹林流指南仕候。

一、祖父中畑次右衛門儀、曾祖父孫兵衛^ハ皆傳仕、享保十年(一七二五)十二月十五日^ハ石堂竹林流指南仕罷有候。

一、父中畑半兵衛儀、祖父次右衛門^ハ皆傳仕、元文四年(一七三九)九月廿日^ハ石堂竹林流指南仕候。

一、私儀、親半兵衛^ハ石堂竹林流皆傳仕、安永三年(一七七四)十一月十五日指南仕候。然処、於江戸表亀井能登守様御家中都森勝之丞門弟ニ罷成、明和七年(一七七〇)四月八日、日置一流石堂流皆傳仕候。指南之儀ハ、家傳石堂竹林流私迄四代指南仕候。此段申上候。

関小傳次申出候。

一、私祖父權次郎儀、日置流射術於江戸表元文辰年(一七三六)、河野左七^ハ傳授相濟、宝曆五亥年(一七五五)^ハ申立之上指南仕罷有候処、同人門弟廣田吉藏儀、明和二酉年(一七六五)正月權次郎^ハ傳授相濟申候間、門弟共相讓申立之上、同三戌年(一七六六)^ハ同人指南仕罷有候処、私儀天明四辰年(一七八四)正月、吉藏^ハ傳授相濟申候間、同人死後、同年五月^ハ申立之上私吉藏門弟取扱仕罷有候。此段申上候。

斎藤小左衛門申出候。

一、私祖父斎藤射祐儀、石堂竹林流射藝寛保四子年(一七四四)笹森勘解由左衛門より皆傳仕、其節申立指南仕候。

一、父斎藤小左衛門儀、勘解由左衛門門弟ニ而稽古仕、其後勘解由左衛門門弟射祐方^江相讓候ニ付、四卷書并弓書共射祐^ハ時々相傳仕候。尤、射祐指南中ニ付、同人指南申立不仕候。

一、叔父斎藤官八郎儀、祖父射祐(一七五二—一七六四)宝曆年中四卷書并弓卷共段々相傳仕、明和七寅年（一七七〇）八月四日申立之上指南仕候。

一、私儀、祖父并叔父官八郎方皆傳仕、天明三卯年（一七八三）門弟取扱之儀、伺之通被仰付指南仕候。祖父射祐方私迄三代指南仕候。此段申上候。

竹内源太夫申出候。

一、祖父竹内源太夫儀、雪荷当流射術、享保四亥年（一七一九）九月十九日勝本水右衛門より皆傳相濟師範仕候。

一、父源太夫儀、宝曆九卯年（一七五九）四月廿二日祖父源太夫方皆傳相濟師範仕候。

一、私儀、天明元丑年（一七八一）閏五月九日森岡主膳方皆傳相濟師範仕候。

右主膳儀、父源太夫門弟ニ御座候間、安永三年（一七七四）八月十三日皆傳相濟申候。祖父源太夫より私迄三代師範仕候。

大導寺隼人申出候。

一、親通翁儀、幼年之節祖父宇左衛門病死仕候ニ付、同人高弟之内、七戸衛門次、笠井藤左衛門方宝曆二申年（一七五

二）皆傳仕候。同六子年（一七五六）師範御預申上候。

一、私儀、親通翁方安永二年(E)年（一七七三）皆傳仕候。然処、中畑孫兵衛儀於江戸表尾劔流石堂竹林流皆傳仕罷下り候

ニ付、同人門弟ニ罷成稽古仕罷有候処、天明三卯年（一七八三）皆傳仕候。親通翁儀師範仕罷有候処、老年殊ニ病身

ニ罷成、門弟取扱相成兼申候ニ付、天明四辰年（一七八四）私師範之儀御預申上候。私迄三代師範仕候。此段申上候。

一、後藤勇助申出候。私儀、日置流竹林派射藝明和七寅年（一七七〇）六月、江戸表土并能登守様御内、真鍋彦五郎方と皆傳仕、同八卯年（一七七二）正月指南申立之上被仰付、門弟取扱罷有候。

一、（日置流竹林派）館美文内申出候。私儀、射藝前々笠井藤左衛門門弟ニ御座候処、同人病死仕、傳授事も半端ニ御座候間、大導寺族

之助同門ニ御座候ニ付、同人と尾脇流明和元申年（一七六四）十一月傳來仕候。明和二年（一七六五）四月門弟取扱申立之通被仰付之。

（第七代藩主信寧）戒香院様御代明和四亥年（一七六七）御参府御供登被仰付、於江戸表土并能登守様御家中真鍋彦五郎方へ罷越稽古仕、同年深川三十三間堂ニ而御威光ヲ以千射仕、日置流竹林派射藝皆傳仕、只今以右流儀指南仕罷有候。此段申上候。

馬術師範

一、（八条流、馴縄流）木立要左衛門申出候。

高祖父木立民部儀、元和年中（一六一五—一六二四）越後之国ノ住、二田浦越後守と申仁と八条流乘法皆傳仕候。

其後寛永元年（一六二四）南部之住人小笠原小兵衛と申仁も八条流皆傳仕候。右二流之内二田浦流を門弟指南仕候。

一、曾祖父木立長兵衛儀、右民部方と八条流二流皆傳仕罷有候処、寛文二年（一六六二）江戸江罷登、於同所公儀御馬方中山勘兵衛様江弟子入仕、高覧八条流乘法相傳可仕旨被仰付、江戸御家中之内御家老神保三右衛門殿御先立ニ而入門仕。始終御物入之御附届ニ而滯府仕候而一流皆傳仕候。其後寛文四年（一六六四）四月七日と門弟取扱師範仕候。

一、祖父木立長兵衛儀、右長兵衛と家傳之八条流三流不殘皆傳仕候而高覧八条流を以師範仕候。

一、父木立藤右衛門儀、右長兵衛の家傳八条流不残皆傳仕候処、門弟指南方ニハ小笠原小兵衛之八条流其手筋宜御座候ニ付、小笠原流の八条流を以門弟師範仕候。

一、御流儀乘法牧野泰意方（第七代藩主信孝）宝曆二年（一七五二）十月不残相傳仕候処、戒香院様御意（第五代藩主信孝）ニ而玄圭院様（第八代藩主信孝）泰意江御相傳之御印之卷冊、馬図轡等共ニ不残私江相授可仕旨被仰付、不残相授仕候。

其後於江戸表御同流之儀ニ付、有馬備後守様江入門奉願候処相授仕候。御流儀之儀ハ私家傳仕、御切紙等数通相授仕候。尤、御物入御附届稽古仕候。右御流儀之儀ハ家傳仕、外江ハ指南不仕候へども、御流儀之儀ニ付此段申上候。

一、馴縄流軍馬之儀、津輕崑左衛門殿（第九代藩主信孝）私皆傳仕、元文五年（一七四〇）四月門弟へ指南仕候。

（八条流、神当流）
有海七太夫申出候。

一、高祖父有海七太夫、初メ藤右衛門儀（第四代藩主信政）妙心院様御代被召出候。尤、八条流師範仕候由傳承申候。誰方ハ傳授仕候哉不傳承候。

一、曾祖父有海半七儀、寛文七年（一六六七）五月、青沼勘右衛門方ハ神当流傳授仕師範仕候。

一、祖父有海七太夫儀、右半七病死之御幼少ニ付、青沼勘右衛門門弟ニ罷成、享保十年（一七二五）正月、神当流傳授仕師範仕候。

一、父有海半之丞儀、右七太夫方ハ延享四年（一七四七）三月、神当流傳授仕師範仕候。

一、私儀、親半之丞方ハ安永九年（一七八〇）十二月、神当流傳授仕候。尤、高祖父藤右衛門より私迄五代師範仕候。

（大坪流、神当流）
青沼半助申出候。

一、先祖青沼藤兵衛儀、梅田理右衛門尉ら寛永十八年（一六四一）大坪流皆傳仕候。慶安二年（一六四九）ら師範仕候。
 一、二代青沼与四右衛門儀、御旗本花田庄右衛門様御門弟被仰付候。寛文四年（一六六四）神当流御皆傳被下置候処、御家中師範共被仰付候。

一、青沼勘右衛門、同与四右衛門、同求馬、同吉之進、右吉之進迄、二代目与四右衛門ら神当流皆傳師範仕候。私儀吉之進ら寄々皆傳仕、先祖藤兵衛ら七代師範仕候。

（數鞍流）

一戸助太郎申出候。

一、一戸仁五右衛門儀、數鞍流馬術乗田自榮方ら享保八年（一七二三）五月皆傳相済指南仕、同人倅三太兵衛江相統、右跡木村清左衛門指南仕。其後進藤庄兵衛方江相讓指南仕。同人倅幾之丞儀、親庄兵衛方ら皆傳相済指南仕罷有候処、病死仕。同人倅多吉郎儀幼少ニ付、右門弟當時私方ニ而指南仕罷有候。

一、私儀、宝曆十一巳年（一七六一）正月十七日、兄三太兵衛方ら皆傳相済、天明六年（一七八六）四月ら指南仕、当年迄三ヶ年ニ罷成申候。

一、乗田五左衛門門弟取扱秋元金九郎申出候。

乗田清藏先祖自榮儀、須鞍流馬術早身平四郎ら皆傳仕候。尤、何年何月傳來仕候と申儀不傳承候。門弟取扱之儀ハ天和元酉年（一六八一）ら門弟取扱指南仕候。其後忠左衛門、五左衛門迄三代門弟取扱指南仕候。然処、五左衛門儀ハ安永七戌年（一七七八）病死仕候。同人子清藏儀幼少ニ付、館山善兵衛儀五左衛門門弟取扱指南仕候処、天明四辰年（一七八四）病死仕候。清藏儀未熟ニ御座候ニ付、私儀右跡五左衛門門弟取扱仕候。此段申上候。

以上

劔術師範

(新影治源流)
成田又左衛門申出候。

一、親吉三郎儀、享保十一年（一七二六）十一月、新影治源流劔術斎藤角左衛門と皆傳仕、明和九辰年（一七七二）迄四十七ヶ年師範仕候。

一、私儀親吉三郎と宝曆十三年（一七六三）八月流儀皆傳仕候。明和九年（一七七二）病死仕候後、九月廿二日師範伺之通被仰付候。今年迄拾七ヶ年指南仕候。此段申上候。

(梶派一刀流)
山田一学申出候。

一、曾祖父山田仁右衛門儀、梶新右衛門様と梶流一刀流劔術天和元年（一六八一）十二月十六日皆傳仕、其節指南仕候。

一、祖父山田弥右衛門儀、享保七年（一七二二）九月廿八日、右仁右衛門と皆傳仕劔術指南仕候。

一、親山田金蔵儀、若年之節、右弥右衛門病死仕候ニ付、仁右衛門高弟小倉藤左衛門より寛保三年（一七四三）十二月劔術皆傳仕候。

一、私儀、若年之節親金弥病死仕候ニ付、金弥高弟田中惣右衛門江皆傳相濟候ニ付、同人儀後見被仰付、同人と天明二年（一七八二）六月皆傳相濟申立之上、同八月三日より指南仕罷有候。曾祖父仁右衛門と私迄四代劔術指南仕候。以上

一、
山田仁兵衛申出候。
(梶派一刀流)

私儀山田仁右衛門二男ニ御座候処、小倉藤左衛門ヲ梶派一刀流劍術皆傳相濟罷有候処、宝曆四年（一七五四）閏二月七日、劍術出精ニ付新規御徒被召出、同亥年（一七五五）師範伺之通被仰付。当年迄三十四ヶ年指南仕罷有候。

（下伝流、林崎新夢想流居合）
小山次郎太夫申出候。

一、祖父次郎太夫儀、山形半十郎ヲ享保九辰年（一七二四）四月廿八日、当田流劍術并林崎新夢想流居合共許傳授仕候ニ付、師範仕度儀伺之上享保十一年（一七二六）より指南仕候。然処、卜傳流劍術元文辰年（一七三六）二月廿四日棟方作右衛門ヲ極意皆傳仕候ニ付、同年ヲ卜傳流劍術并林崎流居合共、亦々伺之上指南仕候。享保十一年（一七二六）ヲ明和六丑年（一七六九）迄四十四年指南仕候。

一、親市太郎儀、祖父次郎大夫ヲ宝曆十二年（一七六二）八月廿四日、卜傳流劍術極意皆傳仕候而、明和七寅年（一七七〇）二月廿四日ヲ伺之通指南仕候处、病身ニ付同年七月指南相止候。

一、私儀、祖父次郎太夫ヲ卜傳流劍術并林崎流居合共、明和亥年（一七六七）五月許傳授仕候而、同七寅年（一七七〇）七月十七日師範仕度儀、伺之通被仰付指南仕罷有候处、祖父次郎太夫ヲ傳儀相残候ニ付、叔父小山太郎兵衛ヲ安永三年（一七七四）正月二日極意皆傳仕候。明和七寅年（一七七〇）ヲ当申年（一七八八）迄十九ヶ年師範仕候。右之通、祖父次郎太夫ヲ私迄三代之内指南仕候。此段申上候。

（克己守格流太刀、本覚克己流和、堀口源師流長刀）
唐牛甚右衛門申出候。

一、親甚右衛門儀、添田弥兵衛門弟ニ御座候处、克己守格流太刀、本覚克己流和、堀口源師流長刀、享保十八年（一七三三）十一月皆傳仕候处、同人子定兵衛病死後、定兵衛子定之助若年ニ而師範難成御座候ニ付、師範之儀宝曆年中（一

七五一—一七六四) 申立之上師範仕候。

一、私儀、親甚右衛門方安永三年(一七七四)十一月皆傳仕罷有候処、親病身ニ罷成隠居願之通被仰付、安永九子年(一七八〇)七月方私師範仕。私迄二代師範仕候。此段申上候。

一、^(二貫流)九戸小七郎申出候。

私儀、一貫流劔術天明元丑年(一七八二)九月廿六日、米沢市郎大夫方皆傳仕、同二寅年(一七八二)十月廿日指南願之通被仰付、同年方指南仕罷有候。

一、斎藤繁兵衛申出候。

私儀、唐牛甚右衛門方本覚克己流和術、克己守格流劔術、安永元辰年(一七七二)皆傳仕、同年方当年迄十七年師範仕候。

一、神應右衛門申出候。

私儀、唐牛甚右衛門方安永六酉年(一七七七)十二月、克己守格流劔術、本覚克己流和術、堀口源師流長刀皆傳仕、天明七未年(一七八七)五月十二日師範御願申上、指南仕罷有候。此段申上候。

一、^(梶派一刀流)武田弥字申出候。

私儀、梶派一刀流劔術田中惣右衛門方方天明二寅年(一七八二)七月皆傳仕候而、天明六年(一七八六)九月十三日指南申立之上被仰付、門弟取扱罷有候。

一、(直元流)吉岡徳藏申出候。

私儀、笠井六郎太夫方直元流劔術天明三卯年(一七八三)十一月極意皆傳仕、同四辰年(一七八四)閏正月二日師範伺之通被仰付、当年迄五ヶ年師範仕罷有候。

(当田流太刀、林鶴新夢想流居合)

一、浅利万之助申出候。曾祖父浅利伊兵衛儀延宝三卯年(一六七五)七月廿五日当田流劔術当田甚五兵衛方皆傳仕、其節申立之上指南罷有候。

一、祖父浅利万之助儀、親及老年門第一戸三之助江相傳仕、其後三之助(享保十九寅年)享保九寅年(一七三四)十一月廿日当田流劔術傳來相済指南仕罷有候。

一、父浅利清藏儀、右万之助方宝曆三酉年(一七五三)正月十一日当田流劔術傳來仕指南仕罷有候。

一、私儀、親清藏方宝曆十二末年(宝曆十三年)(一七六三)二月十二日当田流劔術傳來相済指南仕罷有候。此段申上候。

(直元流)
笠井園右衛門申上候。

一、曾祖父笠井傳右衛門儀、直元流劔術并大長刀建立仕、師範申立候。(享保元年二月「奥富士物語」)年月傳不承候。

一、祖父笠井藤左衛門儀、右傳右衛門方右皆傳仕師範申立候。年月共傳不承候。

一、父笠井碓人儀、右藤左衛門方皆傳仕師範申立、年月共傳不承候。

一、私儀、親碓人方皆傳仕候而師範仕罷有候处、故障之儀御座候ニ付、申立之上師範相止罷有候处、天明二年(一七八二)五月十二日、三上銳助儀、兼而皆傳も相済罷有候間、申立之上惣門弟相讓、於鉄炮町導場取立、唯今同人師範仕罷有候。此段申立候。

(梶派一刀流)
外崎十郎右衛門申立候。

一、祖父十郎右衛門儀、山田仁右衛門と元禄子年(一六九六)十一月十八日梶派一刀流劍術皆傳相濟、願之上元文四未年(一七三九)五月九日と師範仕候。

一、父三太左衛門儀、右十郎右衛門と元文五申年(一七四〇)正月廿八日皆傳相濟、宝曆三丙年(一七五三)四月十三日と師範仕候。

一、私儀、親三太左衛門と天明元丑年(一七八一)五月十四日皆傳相濟、同六年(一七八六)四月十八日より師範仕候。此段申上候。

一、今左衛門申出候。当田流劍術延享元子年(一七四四)渡部次太夫と皆傳指南仕候。

一、鍵宝藏院流十文字、延享四卯年(一七四七)堀口安兵衛皆傳指南仕候。

一、居合、棒(術)寛保四子年(一七四四)田中弥兵衛と皆傳指南仕候。

鎗術師範

一、(宝藏院流十文字・盡心流)
山本三郎左衛門申出候。

曾祖父山本三郎左衛門儀、高田平右衛門と宝藏院十文字兼鎗術皆傳仕候。後、勝負合発明仕候儀御座候ニ付、盡心流と流名を相改、工夫之切組男子共江教罷有候処、御家中望之族御座候而、元禄元年(一六八八)と師範仕候。曾祖父親述三代師範仕候。私兄一第師範不仕候。私儀親、三郎左衛門弟子伊藤如影方と伝授仕、明和八年(一七七二)と

師範仕候とも然未熟ニ御座候ニ付、如影介添ニ而師範仕罷有候処、居宅大破、彼是故障之儀御座候而、昨年迄十ヶ年余中絶仕罷有候処、家流望之族御座候ニ付、昨年方師範仕罷有候。御尋ニ付此段申上候。

一、(宝蔵院流十文字鑑)
櫻庭又左衛門申出候。

曾祖父又左衛門儀、宝蔵院十文字鑑高田平右衛門門弟ニ而罷有、寛文四年(一六六四)皆傳相濟申候。師範申立候年号月日傳不承候。宝永七年(一七一〇)迄師範仕候。

一、祖父四郎三郎儀、右又左衛門方皆傳仕、宝永七年(一七一〇)方享保十六年(一七三二)迄師範仕候。

一、父又左衛門儀、右四郎三郎方皆傳仕、享保十六年(一七三一)方明和元年(一七六四)迄師範仕候。

一、私儀、父又左衛門方皆傳仕、明和元年(一七六四)方師範仕罷有候。尤、曾祖父方私迄四代師範仕候。此段申上候。

(無辺流)
斎藤三次申出候。

一、祖父斎藤安兵衛儀、宮下離弓方方大内無辺流元文辰年(一七三六)皆傳仕、同年正月十日方師範仕候。

一、父市郎右衛門儀、右安兵衛方宝曆十二年(一七六二)皆傳仕、明和元申年(一七六四)九月十五日方師範仕候。

一、私儀、親市郎右衛門病死後、明和亥年(一七六七)十二月六日叔父小館儀兵衛後見仕、私門弟取扱之儀伺之通被仰付候而取扱仕罷有候処、安永五申年(一七七六)正月十五日小館儀兵衛方皆傳仕師範罷有候。祖父方私迄三代師範仕候。此段申上候。

(宝蔵院流十文字鑑)
一、戸金吉申出候。

一、一戸三之助儀、奈良元祖宝藏院直傳高田平右衛門（第四代藩主信政）第五代藩主信政妙心院様玄圭院様兩御代御流儀之鎗術奧秘皆傳仕候。右年号不傳承候。宝永四亥年（一七〇四）三月指南仕候。享保二酉年（一七一七）五月九日玄圭院様御代御師範被仰付、享保三戌年（一七一八）八月十一日印可、奧秘之書差上候。同九月十五日三国相傳神秘之書奉差上。右御師範方ニ付、門弟取扱候様相成兼候（二）而指南中絶仕候處、御流儀之鎗術奧秘、後世断絶仕候ニ付、三之助（三）預指南相傳仕度奉存候旨、延享三寅年（一七四六）九月二日門弟中（二）委細申上候被仰付、同人指南仕罷有候。

然處、宝曆三申年（一七五二）十月同人門弟葛西市十郎（二）へ右一流之奧秘皆傳、門弟共江相讓指南仕せ度儀、伺之通被仰付、同人指南仕罷有候。

一、私儀、一戸三之助末子ニ御座候處、家元之儀故、為師恩御威光を以御流儀之鎗術奧秘皆傳仕、門弟相讓指南仕せ度儀、明和五子年（一七六八）十二月葛西市十郎より委細申上候。同六丑年（一七六九）正月十一日新規御徒ニ被召出、鎗術指南仕候様被仰付、難有仕合奉存候。其後門弟取扱指南仕罷有候。此段申上候。

鐵炮師範

（井上外記流）
長谷川茂太夫申出候。

一、親茂兵衛儀、田村源之丞方（二）宝曆二申年（一七五二）正月十日、外記流鉄炮傳授相濟罷有候處、諸士方依望指南之儀御断申上、同三酉年（一七五三）正月十日より安永三年（一七七四）九月廿四日迄二十二年師範仕候。

一、私儀、親茂兵衛方宝曆十二年（一七六二）正月十日鉄炮皆傳相濟罷有候ニ付、親病死後門弟取扱、安永四未年（一七七五）二月朔日方当年迄十四年師範仕罷有候。此段申上候。

(井上外記流)
竹森郷右衛門申出候。

一、親丹下儀、井上外記流鉄炮山田十郎兵衛^方享保九辰年(一七二四)皆傳仕、享保十巳年(一七二五)^方諸組指南^方被仰付、三十六ヶ年指南仕候。

一、私儀、親丹下^方宝曆四辰年(一七五四)^(戌)皆傳仕候。宝曆十辰年(一七六四)^方諸組指南^方被仰付、今年迄二十九ヶ年指南仕候。此段申上候。

(長短反求流)
佐々木専右衛門申出候。

一、曾祖父専右衛門儀、長短反求流鉄炮朝比奈所左衛門^方傳授仕候。右所左衛門儀、越前之浪人^ニ而寛文九酉年(一六六九)松前狄蜂起之節、大筒用意仕、松前志し御国深浦迄参着之处、狄乱相鎮、御当家へ二百石^ニ而被召出御奉公仕。其後無調法之儀御座候^而永く御暇被下置、宮地村^ニ住居仕罷有候節同人門弟^ニ罷成、貞享四卯年(一六八七)五月十三日皆傳仕師範申立、宝永三年(一七〇六)迄二十年師範仕候。

一、祖父佐々木武右衛門儀、右専右衛門^方皆傳仕、宝永三戌年(一七〇六)五月十六日^方宝曆四戌年(一七五四)四十九年指南仕候。

一、父所左衛門儀、右武右衛門^方皆傳仕、宝曆四戌年(一七五四)^方天明四辰年(一七八四)迄三十一ヶ年師範仕候。

一、私儀、親所左衛門^方皆傳仕、天明四辰年(一七八四)十月十日^方師範仕候。此段申上候。

(井上外記流)
一、會田伊兵衛申上候。

一、親伊兵衛儀、井上外記流鉄炮術長谷川茂兵衛^方明和四亥年(一八六七)九月皆傳仕、同人十一月指南伺之通被仰

付、指南仕候。

一、私儀、親伊兵衛より天明三卯年（一七八三）五月皆傳仕、天明四辰年（一七八四）八月指南伺之通被仰付、指南仕罷有候。此段申上候。

一、竹森又吉申出候。
（井上外記流）

井上外記流鉄炮祖父母下儀、享保九辰年（一七二四）十一月十一日山田十郎兵衛方_方皆傳仕、親郷右衛門儀丹下_方宝曆四戌年（一七五四）七月四日皆傳仕、私儀親郷右衛門_方明和九辰年（一七七二）皆傳仕、諸組_江鉄炮指南方手傳、伺之通被仰付。安永二巳年（一七七三）三月御供登被仰付、同年七月十八日井上左太夫様御門弟罷成、大筒稽古、安永五申年（一七七六）九月十四日指南方免許狀被下置、安永十五年（一七八一）皆傳仕、今年迄十三ヶ年指南方仕、私迄三代指南仕候。

（岸ノ和流、稲田流）
阿部茂手木申出候。

一、私先祖鉄炮與七郎儀、鉄炮岸ノ和流稲田流慶長十九寅年（一六一四）九月星野長兵衛_方皆傳仕罷有候_而師範仕候。

一、阿部與七、同與七郎、同七右衛門、同與十郎、同與七郎、右二代目與七郎_方七代目與七郎迄右鉄炮術二流、代々傳來仕師範仕候。

一、父阿部民右衛門儀、祖父與十郎_方宝曆十一巳年（一七六一）正月、右二流皆傳仕、明和八卯年（一七七二）二月御届申上候_而師範仕候。

一、私儀、親民右衛門_方天明元丑年（一七八一）六月、右二流皆傳仕候處、親老年ニ付師範成兼候ニ付、天明四辰年（一

七八四) 九月御届申上師範仕候。私迄二代師範仕候。此段申上候。

師範相止候面々

一、(日置流弓術)館山善左衛門申出候。私親善兵衛儀、日置流弓術永野仁左衛門と明和八卯年(一七七二)傳授相濟、安永二巳年(一七七三)と指南仕罷有候処、天明四辰年(一七八四)病死仕候ニ付指南申候。此段申上候。以上

一、(石堂竹林流)笠井園右衛門申出候。

曾祖父傳右衛門儀、於江戸表石堂竹林流弓道矢嶋久米次方と皆傳仕師範仕候。年号月日傳不承候。

一、祖父藤左衛門儀、右傳右衛門と皆傳仕師範仕候。年号不傳承候。

一、親従人義、大道寺遁翁と皆傳仕師範仕候。年月不傳承候。

一、私儀、右遁翁と皆傳仕師範罷有候処、故障之儀御座候ニ付、去ル亥年(寛政三年)申立之上師範相止申候。

一、(石堂竹林流)成田園右衛門申出候。私親十兵衛儀、存生之内射術斎藤射祐方と傳授仕、伺之上師範仕候へとも、親病死之後、私師範不仕候。此段申上候。

一、(数鞍流馬術)新藤多吉郎申出候。祖父庄兵衛儀、数鞍流馬術宝曆八年(一七五八)一戸仁五左衛門より皆傳仕、明和元年(一七六四)と申立之上指南仕候。

一、親傳次郎儀、右庄兵衛方傳來仕、安永七年（一七七八）指南仕罷有候処、親傳次郎病死後、私若年ニ付右門第一戸助太郎へ相讓、只今同人指南仕罷有候。此段申上候。

一、田中惣右衛門申出候。（堀派一刀流劍術）私儀、一刀流劍術山田金弥門弟ニ而宝曆五亥年（一七五五）三月十一日右金弥方方皆傳仕、

安永六酉年（一七七七）二月廿一日金弥倅一学若年ニ付教導尋仕門弟取立候様被仰付、教導仕。天明二寅年（一七八二）一学江皆傳仕、門弟共ニ相讓。同年八月三日一学指南之儀申立之通被仰付、一学指南仕罷有候。此段申立候。

一、斎藤次郎右衛門申立候。私儀、当田流太刀并林崎神夢惣流居合竹森藤藏方方不殘皆傳、安永三年（一七七四）申立之上同人門弟取扱仕罷有候処、同十丑年（一七八一）導場及大破取毀、伺之上当分師範止罷有候。此段申上候。

一、戸田與左衛門申出候。親茂兵衛儀、当田流太刀成田兵右衛門方方享保十八丑年（一七三三）五月皆傳仕罷有候処、延享三寅年（一七四六）方指南仕候。

一、本覺克己流之和、親茂兵衛儀川元貞右衛門方方享保六丑年（一七二一）八月皆傳仕、延享三寅年（一七四六）方指南仕罷有候処、私儀ハ親茂兵衛方明和四亥年（一七六四）九月二流共皆傳仕候処、安永六酉年（一七七七）八月親病死仕候ニ付、病死後私指南仕罷有候処、導場数年ニ罷成候ニ付及大破。少給之私、如何様共修復仕兼、天明二寅年（一七八二）九月導場取毀申候ニ付指南相止罷有候。御尋ニ付此段申上候。

一、田中原太郎申出候。私親源太郎儀、先年堀田安兵衛方方宝藏院十（文字）鎗傳授仕、其後明和七年（一七七〇）師

範伺之通被仰付、安永二巳年（一七七三）迄二十ヶ年師範仕候。（二十ヶ年という期間が文中の年記と合わない）

一、私儀、堀口安兵衛方より安永二巳年（一七七三）六月、宝蔵院十（文字）鎗傳授仕、同年十一月伺之上師範被仰付罷有候処、同五申年（一七七六）五月差障之儀御座候而、当分之内師範相止候段御断申上候。此段申上候。

文化七年（一八一〇）武藝出精之面々書上候様被仰付候所、左之通申出候。

一、兵学、（山鹿流兵学）貴田十郎右衛門申出候。門弟方櫻庭太次馬天明二年（一七八二）入門、許皆傳相済申候。

鳴海弥太郎寛政二年（一七九〇）入門、許皆傳相済申候。

藤林文次郎、佐藤平八郎、寛政八年（一七九六）入門、許皆傳相済申候。

一、兵学、（山鹿流）横嶋弥太郎門弟、岡本専蔵寛政二年（一七九〇）入門、許皆傳相済申候。

一、弓道、（吉田流）大道寺宇左衛門申出候。門弟山田十蔵寛政十二年（一八〇〇）入門、皆傳相済申候。

一、弓道、（石堂竹林流）斎藤良助申出候。門弟佐野伴蔵儀明和元年（一七六四）入門、奥意迄傳授相済申候。

同唐牛乙次郎儀安永六年（一七七七）入門、石郷岡幾次郎寛政元年（一七八九）入門、右同断相済申候。

一、弓道、関小傳次申出候。(日置流)門弟齋藤龜藏寛政四年（一七九二）入門、米橋銀藏同十二年（一八〇〇）入門、手塚崋十郎文化三年（一八〇六）入門、右何レも傳授相濟申候。

一、弓道、館美又市申出候。(日置流竹林派)門弟原子福次郎寛政七年（一七九五）入門、三卷傳授、山内庄作享和元年（一八〇二）入門、二卷傳授相濟申候。

一、後茂太夫申出候。門弟米沢文弥寛政七年（一七九五）入門、許傳授相濟申候。

一、弓道、中畑孫兵衛申出候。(石堂竹林流)門弟毛内藤左衛門安永八年（一七七九）入門、外崎久太夫明和七年（一七七〇）入門、野呂善八天明元年（一七八一）入門、右何レも皆傳相濟申候。

一、弓道、竹内源太夫申出候。(雪何流)門弟竹内仁左衛門寛政元年（一七八九）入門、神昌弥同十二年（一八〇〇）入門、成田岩藏同十二年入門、小鹿七兵衛二男小鹿金五郎、右何レも傳授相濟申候。

一、馬術、青沼藤兵衛申出候。(大坪流)門弟米橋清藏、小山内万市、齋藤龜藏、許一卷傳授相濟申候。

一、馬術、木立藤左衛門申出候。(八条流)門弟田村平助、太田万弥、伊藤万作、何レも免許傳授相濟申候。

一、劍術、山田(梶派一刀流)一学申出候。門弟山田吉次郎皆傳相濟申候。對馬周藏安永九年(一七八〇)入門皆傳、葛西郷助寛政十三年(一八〇一)入門、許傳授相濟申候。

一、劍術、山田(梶派一刀流)十太夫申出候。門弟石郷岡祐助天明二年(一七八二)入門、釜泡嘉次郎寛政十二年(一八〇〇)入門、七戸金五郎同四年(一七九二)入門、佐野辰五郎同十二年入門、右何れも皆傳相濟申候。

一、劍術、武田(梶派一刀流)弥学申出候。高橋宇門極意皆傳、藤田又之丞寛政二年(一七九〇)入門、許傳授相濟(二刀)。

一、劍術、浅利(当田流太刀)鉄藏儀申出候。門弟外崎久太夫明和五年(一七六八)入門、永田左十郎同七年(一七六九)入門、岡本形七安永二年(一七七三)入門、何れも皆傳相濟申候。

一、劍術、唐牛(克己守格流)甚右衛門申出候。門弟添田弥兵衛天明六年(一七八六)入門、木崎忠司同年入門、右何れも和術、長刀、劍(本範克己流)堀口源師流術共印可相濟申候。

一、劍術、成田源左衛門申出候。門弟豊嶋幸吉明和七年(一七七〇)入門、皆傳相濟申候。菊池直弥寛政十年(一八九八)入門、棟方良作同十一年(一七九七)入門、右兩人ハ許傳授相濟申候。

文化九年(一八一二)二月十七日

一、一戸奥弥申出候。宝蔵院流鎗術門弟之内、式人江許、五人江目錄相傳致度儀、伺之通。

解説

- 1、『要務秘鑑』は、文化年間弘前藩の用人をしていた三橋左十郎が、家中における諸種の様式等藩政全般にわたって資料を集め編集したもの。（弘前市史・藩政編）附録の「史料解説」二頁参照）本資料は、この中の「師役之部」を載せた。
- 2、弘前図書館編『津軽覚え書』（弘前図書館後援会発行一九七四年二月、一七三―一八八頁）は、「天明九酉年（一七八九）正月御家中兵学并武芸師範の面々書出候之様被仰付」の項を掲載している。
- 3、右のことはあるが、今回「師役之部」全文を紹介することにした。弘前藩の武芸師範の系列を知るに少なからず役立つと思われる。

あとがき

平成二年八月十六日、故寺山龍夫先生の十七回忌法要が弘前市茂森町京徳寺で行われ、ご案内をいただいたので出席した。故寺山先生は、弘前藩当田流太刀、林崎新夢想流居合の道統浅利伊兵衛均禄（明暦二年―享保三年）^{六五六―一七二八}の後胤にあたり、同流の正統を継ぐ修業者であった。当日は、所蔵の武芸古文書等を預けていただいた寺山泰子夫人はじめ、故寺山先生のご兄弟が参列されていたが、かつて故寺山先生に師事し、現在も当田流太刀の修業に励む竹内大氏もおられた。そして竹内氏から、南津軽郡尾上町教育委員会へ提出しているという「戸田家文書登録簿」の写しをいただき、閲覧を勧められた。法要の因縁というか有難かった。

平成二年十二月九日の日曜日、戸田家古文書、古記録の所蔵者戸田敏博氏と大学の研究室でお会いすることができた。

同氏との事前連絡では、「戸田家文書登録簿」に掲載してある三十五点は、所蔵の全部ではないということなので、当日は全部持参して下さるようお願いしておいた。午後一時頃からダンボール箱に収められていた資料を次々とひもどいたが、量も多く一気に読み通せることはできなかった。時間の経過が気になり、大急ぎで複写した数点の資料が今回陽の目を見ることになった。残りの資料は、機会があればいつでも——ということであったが、それが果せず今日に至っている。戸田氏の折角のご好意に報いることができず、心苦しく思っている次第である。

市川家に武芸古文書のあることは、弘前市に伝わる古流柔術本覚克己流の修業者小林清次郎氏から伺った。小林氏はしばらく弘前市を離れていたが、平成三年度から弘前市笹森記念体育館で本覚克己流柔術の教室をもちたいという。そのためのテキスト作成を意図し、本覚克己流の資料を調べるために弘前市立図書館に行ったところ、既に調べている人がいるというので教養部の研究室に見えたのであった。本覚克己流についてのご高説をいろいろと賜ったが、その時自分は弘前藩に伝わる武芸の古文書等を調べていると申し述べた。その後小林氏から電話があつて、住吉町の市川氏、春日町の小山秀雄氏（卜傳流の継承者）、岩木町花輪の三上与一氏等古文書を所蔵しているとの事であった。

市川直正氏とは、平成三年三月十四日教養部の研究室で資料ご持参の上でお会いすることになった。市川家はかつて弘前市古武道振興会の事務局のあったところである。資料はそれ程多く所蔵してはいなかったが、故市川宇門氏の書きまとめたと思われる「剣術秘書」には圧倒されたものである。あまりにも分厚い「剣術秘書」を今回紹介できず残念であったが、全頁複写し自分なりに製本して、これを座右におき、今では自分の修行の励ましの書として大事にしている。

以上、戸田、市川両家所蔵の古文書、古記録の一部を今回紹介するに至った経緯を述べて「あとがき」とする次第である。

（一九九一年十一月三十日）